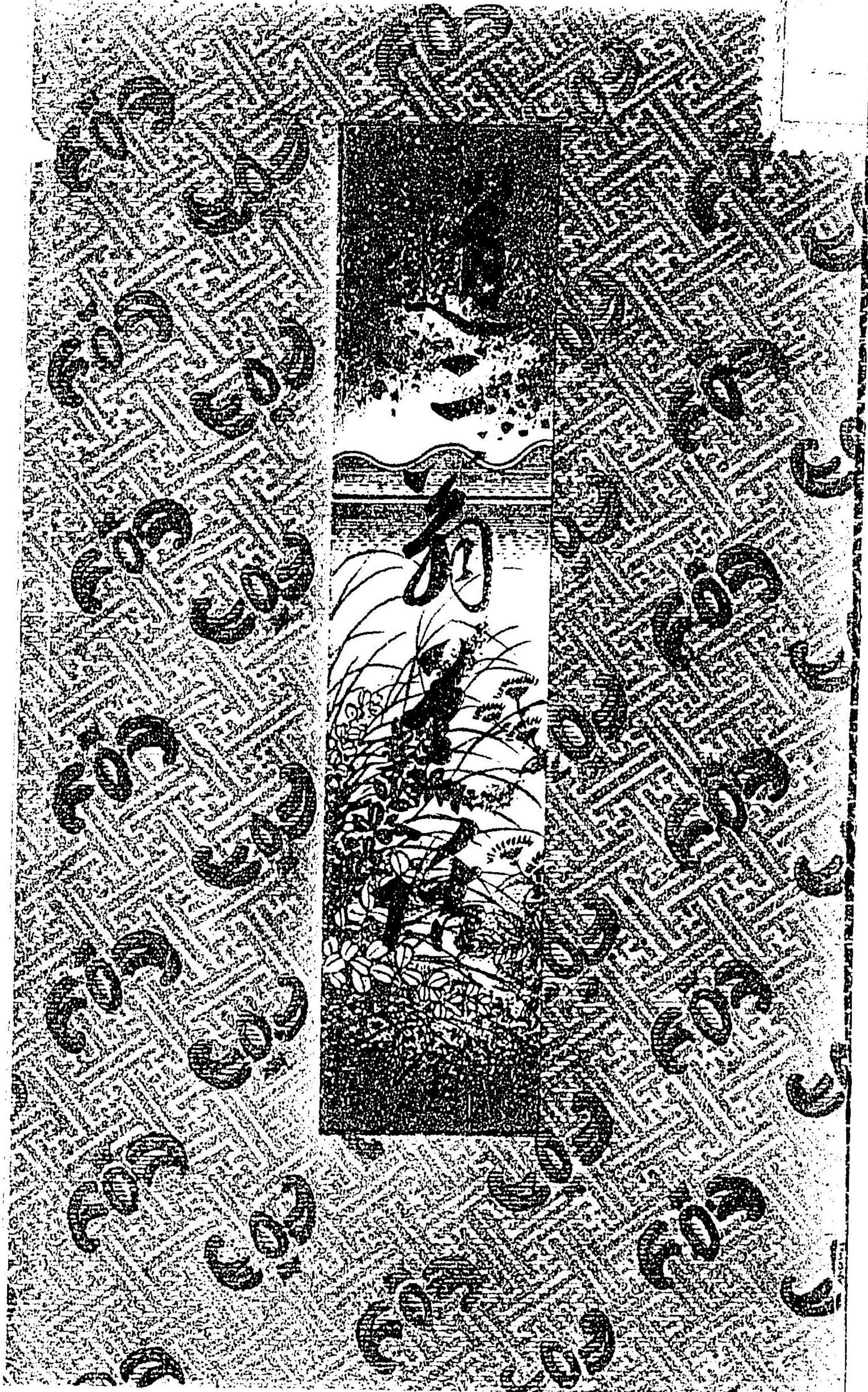


E-49X-1



8410  
576

中澤道二翁傳記  
浪華八宮齋筆記



# 道二翁道話全

浪華 同盟書房發行

子曰不得中行而與之必也狂狷乎。狂者進取狷者有所不為也。夫人志操極高而多行掩蔽之。闕亦徒以謹厚の者ハ立已守節自ら是として。竟ハ聖道知ることをサ。故に其志節をさふ道の至處に届るも行ひ亦謹厚や。言願行々願言て。慥々なるかた。とかや。さんと學ハ言行一致や。て。過不及を地位を。要ま。我以て。その過た。は裁抑。其不及ものは激勵して。日々進で止む。終ハ中和の徳を成就するの外を。奥に。友道。二中澤翁ハ篤ハ聖學に志。先人堵庵先生に親炙。奇を問ハ益ヲ請。一旦豁然として性理の蘊奥。

を聞悟し。磋磨の功績あり。道哉諸邦よ。唱つた。其言卑近  
う。其意思深遠なり。其言貴賤尊卑。老若男女を  
携む。皆此の感化を蒙る。羣集する者宛と。市小歸するが  
如く。頃日浪速の社友八宮氏なる人。日々其席に居らる。其  
道話を筆記して五巻とあり。其行梓ふ。歌て同  
志の輩。須臾せんとも謀りて。序を予ふ。求む。予懇く  
其の書を閲せしに。其意味深長なること。いづれも。素より前  
平安の産。商家此市の中。成長し。營生の暇少し。を以  
て。書が讀む。事ごとく。あり。唯性理の奥より徹  
通するのみ。其平常教諭するの活き。けし。神儒釋老の

言より百家衆技。狂言侍語。圓卷の書。濫ふる。見  
聞のをし。記勝。き。は。を。譬。論。或。假借し  
用ひて。聖教の奥旨。活潑的の真理を。導く。以て。其を  
あ。は。は。書。見。人。唯怖る。意味の。遠。幽。妙。なり。よ  
あ。遠。謹。厚。篤。實。の。行。ひ。を。欠。或。教。外。別。傳。不。立。文。を。  
ま。書。聖。人の。糟。粕。の。語。を。附。着。し。行。ひ。餘。力。可。れ。ご。  
自ら見とて。聖賢の書を見。を。廢棄。或。三。聖  
一。致。の。大。旨。を。得。し。浮。屠。と。偽。教。と。行。ひ。を。混。淆。或。鉤。深  
闡。微。の。論。を。主。張。し。宿。儒。高。僧。を。睥。睨。或。狂。言。侍  
言。を。玩。んで。克。己。復。禮。の。教。を。知。ら。ず。或。は。史。書。を

懐かしと安んずる人を教ふて已が為ふ學ぶの道ありを辨せん  
とぞ。此皆翁の本意なり。此をして亦取らざる處なり。希  
く同志の人は書より固有の性善を以て悟り。日をほり年  
を磨く。本心の金徳を習熟し。君臣父子夫婦兄弟朋友の  
人の人をも五倫の道を令ふ形ふ踐み。身に行ひ遂ぐ。彼の狂  
捐過不及の二ツを折揚し。不偏不倚。中和の極を致す。  
天人合一の地位にまゐると學びたると。實ふ我石門の徒才  
と云ふべし。

寛政甲寅冬 手島堵菴男正揚識

青山晴雲尚彫刻

道二翁道話初編

浪華 八宮齋 輯



近思錄曰。夫天地之常。其心普萬物。而以無心也。天地の常とは則ち  
道の事也。人ます。天の心といふは。一切萬物。人間禽獸草木に至るまで皆  
天の心なる也。夜が明るとちうく。かうく。梅の木に梅の花が咲き。柿の  
木に柿の出来も。皆天の功用じや。けれと天は目に見へぬ。影形もなく無心  
なれと。平等一校萬物に普くして。此やうにうごき。詰じやによつて。一切萬物  
の造化するも。悉く天の働き。天と萬物と一體なる也。釋迦如來も孔子様も。  
千石萬石の腰様も。賤しい銘々ども。も蚤も。鯨も。犬も。猫も。雁も。鴨も。皆天の生  
じた土じや。其生じた土が形の通りしてゐるが。則道じや。といふ事でござり  
ます。道とは何ぞ。雀はちうく。鳥はかあく。鳶は鳶の道。鳩は鳩の道。君子其  
位に素して行ふ。外に願ひ求めはない。その形地の通り勤めてゐるを。天地和

合の道といふ柿の木に柿の出来るもあいくく。栗の木に栗の出来るもあいくく。と口舌言はずたい素直に和合の道。此外に道はあいうれが神道。夫が儒道。これが佛道。此外に道といふはない。聖人は天地同根同性なるもへ。一切萬物を心として。其外に別に心はない。學問といふは。其道理を明らめるのじや。君子之學は廓然たる大公。物來りて順應する。心は虚靈不味にして萬事に應じて跡なした。い應ずるばかり。主人に向へば主人ばかり。親に向へば親ばかり。花に向へば花ばかり。心に隔のない事は。鏡にものゝ移るがごとく。去れば跡を少し。疵は付ぬ。此心は平等。一枚孔子も釋迦も。熊坂長範も。銘々共も。芝居見て歎しい所ではかなしい。其かなしいは此方にはない。應ずるばかり。又うれしい事見ては嬉しい。其嬉しいは此方にはない。應ずるばかり。又花を見て。花とは誰が花とは見たる。花見ぬさきには。れれがくはない。順應するばかり。此道理を合點したを佛家で成佛の相といふ。是を道ともいふ。道といふは順應するばかり。去によつて。人は一

個の小天地。天地の外に道はない。人は天を心として。形は土じや。焼は灰埋めは土。上々様方でも。御大名様方でも。我々共も。乞食も。穢多も。一切萬物。一豚。犬も。猫も。熊も。魚も。鳥も。草木はいふに及はず。一切天の化したのじや。悉皆土の化ものじや。土に二ツはない。御姫さまの土じや。とて伽羅の匂ひもせず。奴の土じや。とて尻からげてもいぬ。平等一枚土に隔はない。紫笛翁のうたに「西行も牛も。れやまも。何にもかも土のばけたるいな。り街道。此世有らん限り。心は居なり。街道。此席に並らんでござる。れまへがた。残らず。土じや。土の化もの。同じ土を。權兵衛の太郎兵衛の。ね源の。れさよの。と塊たやうなもの。じや。つらりと並らん。人形や。見世丸で。土じや。是が死で。土になるの。焼て土になるの。といふやうなまどろい事じやない。此身此まゝ直に。土じや。是は人ばかり。じやない。一切萬物。丸で。土じや。夫で。形地といふ。形とは。形地といふ事じや。扇も。扇の形地。見臺も。見臺の形地。犬も。猿も。形地は。土じや。柳も。松も。鷹も。鴨も。其外。江河の鱗類。鯛でも。蛸でも。鯨でも。ごまめでも。一切萬物。殘

らす。形地有ものは皆土じや。心は天なり。形地は土佛家では此形地ある所を。かりの世といふ。扇も今日扇く〜と云はれて居る。うちは扇のかりの世やぶれて役に立ぬやうになると。風呂の下へほり込む。扇の火葬。茶椀も今日勤めてゐる内は茶椀のかりの世。此形地有ものゝ無常なる事。如し夢。幻。泡。影。如し露。亦如し電。應し作。如し是。觀。露の形地まぼろしの此身。人はたゞ露の此身。幻の身なる事を明らめるを。神道とも。儒道とも。佛道ともいふ。是を合點するのじや。寺く〜の鐘の聲。諸行無常のひいさ。死ぬるすよ〜。夫をとき。の鐘とばつかり覺へてゐる也。へげふは日が永ひの短ひのど何す。給銀でも出して置たやうに。其やうな爲に。こしらへたものでない。人と生れ來たは何の爲に出て來たのじや。不足いひに來たのじや。ない。生死一大事の因縁。犬や猫とは違ふ。佛知見を開ら。がしめんが爲に。世に出現なされたの明德を。明らかにせんが爲に。世に出現なされたのじや。三千世界に人は尊ひ。天上なるが也。へに佛の大慈大悲のひびき。死ぬるすよ〜。大切な事じや。す〇ねをるか。す鐘の聲さ

へ聞なれて。永き眠りの覺る夜もなし。此無常をしらぬ也。へ目が明と何がほしい。か。い。ほ。しい。と。お。した。い。か。う。し。た。い。春は。と。ふ。し。や。う。秋は。と。ふ。し。や。う。子供の行すへが。と。ふ。なら。う。何をいふも。金の事じや。金がなければ。と。お。も。ならぬ。人を突こかして。も。金。を。して。や。ろ。う。思。ふ。や。う。に。こ。け。て。は。く。れ。ず。ハ。ア。ス。ウ〜。日があ。一日八萬四千の地獄のくるしみ。皆目が覺ぬ也。へじや。〇は。か。な。くも。消。る。を。露。と。思。ふ。な。よ。と。ん。な。も。の。でも。消。て。行。な。り。露の親子。露の主。從。露の夫婦。と。ん。な。も。の。でも。死。んで。行。な。り。去。り。と。て。は。も。ろ。い。も。の。じ。や。口。で。は。皆。言。ふ。て。ゐ。る。ア。夢のうき世じや。は。か。な。い。も。の。じ。や。露の身じや。と。口。で。ば。つかりいふて。骸は。金。鉞。の。や。う。に。覺。て。ゐ。る。夫で。何。が。ほ。しい。か。い。ほ。しい。と。ふ。いふ。た。が。濟。ぬ。こ。う。い。ふ。た。が。開。へ。ぬ。と。朝。から。晩。まで。が。み。く。〜。と。氣。を。も。ん。で。う。ろ。た。へ。廻。る。さ。の。と。く。な。も。の。じ。や。露の身が合點が行ぬ也。へじや。此露の身を。譬。て。御。断。し。申。せ。う。マ。ア。世界中のいさ。と。し。生。る。も。の。ゝ。壽。命。桃。でも。柿。でも。何。で。い。ふ。て。も。同。じ。事。じ。や。が。適。々。受。が。た。き。柿。の。形。地。は。む。す。べ。と。も。柿。に。あ。る

柿はすくなくない。大方あだ花で散てしまふ。風に散らされ、鳥に落され、子どもに取られ、虫に喰わればら〜。あだ花で散るが多ひ。是も柿の木の事ばかりじやないぞへ。此身のあだばなる事を引當て見るがよい。此極まで首尾能くつとめ、どふやらこうやら宿這入する様に成てから、ころり、ア、はかないものじや嫁入の約束極り結納まで取て、向ふへ行一段に成てころり、又嫁入りして御目出たい〜といふ舌も引かぬうちころり、皆あだ花で散て仕廻ふ。毎年〜七月の精霊、佛前に新しい戒名が多ひ。梅の花が梅に成て、梅干の壺へ納るまでは、大鉢や大かたの難行苦行を遣れて來ば、目出たう壺へは納らぬ。今日何屋何兵衛と成て三枚疊でも敷て居るは、大鉢有難ひ事じやあ。皆神代から樋で傳わりて來た。何屋何兵衛じや、すりや甚だ大切な事じや。たどひ貧乏などてめつたに悔まぬがよい。勿鉢あい事じや。みなが貧乏辭がりてにげあるくもへ貧乏がついてまわる。是をたどへて見れば、糲桶へはまつたやうなもので、急に上らんともがけば、そこらあたりへへばり付て、一向ど

ふもならぬやうになる。もし過てはまつたら、これはせう事がないと心をれとし付て、おつと氣を静むれば、骸のあたゝまりです。ほりどひとひとり離れる。コリヤたどへじや、又本眞に糲桶へはまつて、さよろりとしてゐるは、ソリヤあほうじや、取違へまいぞへ。貧乏も其通りで誰じやとて、好き好んで貧乏するものはなければ、天命なれば是非がない。其かわりに、貧乏結構なものじや。人に損かけられる氣ずかひがない。盗人の世話もなく、水難火難の案じもない。スリヤ有難ひ、天命の貧乏うじやと思ひ、随分大切に貧乏勤め守りたがよい。ううすると次第に貧乏をはなれる夫を急に逝んどもがくもへ往さわる所に、貧乏が引付き廻り、終には貧乏と打死にせにやならぬもど貧乏いやがるといふは、此骸が有也へじや。此骸がなけりや、悔み事はない。うの上惡事も出來ず、愁ひ災難といふ事もない。去によつて心學を御進め申ます。本心を知るといふも、外の事でない。骸のない事を知るのじや。此身此まゝ骸は有ながら世話にあらぬ。ハアスウ〜も入らぬ。第一死ぬるといふ世話がない。



大躰重寶なものじやない。永ひ未來といふも死んだ先きの事じやない。心の事じや。腹の中は六十萬億那由多恒河沙由旬兩眼四大海の如しと。大きな佛さまじや。是が目に見へぬもへ暗から闇去りては暗ひく。佛法塵毛じや。予神道塵毛。儒道まつげ。あまり近ふて見付けざりけり。足が見へぬもへ目が明くと。何がほしいか。ほしい。とふいふたが濟ぬ。こういふたが聞へぬ。ハアスウくく。皆此骸が有也へじや。ちつとでもよいものが身にまきたいのは。骸に直打がない也へじや。うの上。にうまい物喰ふて遊んで居たい。皆小人の樂しみ子供あそび。たつた一色か二色の事で。一生をあたふたく。腹の中がまつ暗がり。暗きより闇き道に予入ぬべし。いづくをさして御出なさる。予。はるかに照らせ山の端の月。ちつと不審打てころうじませ。此よふにいふて有てもきよるりくわん。盤に鉄砲打て見せたやうなもので。ぬつから通じぬ。おともならぬてにくく。是此手の握たり開らひたりするは誰が仕業。予。是此通りに。びちくく。天がはたらき通しじや。此やうに天を出して見せ

ても。きよるりが味附やつぱりたれがするれが見ると思ふてゐる也へ。何いふも金の事じや。金がなればとふもならぬ。是では詰らぬ。あれではかぬ。何がほしいか。ほしいがやまぬ。おんまりあさとい。よいかげんに迷ふて置たがよい。〇うまれては死ぬるものとは知りながら猶うらめしき朝ぼらけかな。死出の旅とはいづくをいふ。予。死んだ先きに死出の旅はない。此死出の旅の道法に不同がある。八九十里もあれば六七十里もあり。廿里三十里もあれば三里か五里もあり。又五丁か三丁もある。藁の上で死るも。砲倉暴倉で死ぬるもあり。或は驚風。顛肝。腎虚。脾胃虚。内傷。皆ばうく。と。あな花で散が多ひ。たとへ七十八十の齡ひを保ちても。ホンくく。と。ハアスウくく。のやまぬ内は皆あな花のうちじや。是はつかりはとふもねだりにゆく所もない。子。在。川上。日。逝者。如。斯。夫。不。舍。晝。夜。といまるものは一ツもない。出る息。引息。するくく。しばらくも止まる事はならぬ。線香の立てあるやうなもので。もの云ふてゐる内に消へ行。さつきにかられまへ方よつばと灰に成た予へ。

十  
さきほどの次郎兵衛は今の次郎兵衛ではない近松門左衛門がねはつ徳兵衛の淨瑠璃にあだしが原の道の霜一足ッ、に消てゆく夢のめなる夢の世をといふ文句面白ひ事じや是もねはつ徳兵衛の事ばかりじやない世界の中の人が残らずねはつ徳兵衛じや寝てゐる間も休みなし出る息引息するくく一足ッ、に消て行くとへ戻るといふ事はない夫もしらずに目が明くと何がほしいかいほしい商賣繁昌家内安全子孫長久らくさい延命くと祈る内にも減る命是ばつかりはとふも仕やうがない七十まで生るものを古來稀なといふて七十を古稀の賀といふ尤八十九十までもゐる人もあれと夫は萬人の内一人か二人かじや先通例が七十稀なり又七十といふもよつばと珍らしいありがたい天命じやわたくしが巳のとして六十七歳是をマア七寸の線香にしてとるうじませ残りはたつた三步じや便りないものじや去てては本にはかないものじやしかしめつたに力落さぬがよい灰の中にまた何んば有ふも知れぬマアそれを便りにして持てゝある世界

じや扱正月のしめかざり氣もはんなりとして八十になる婆さまも活返た心地あら玉の春をむかへて御目出たひくばつかりじやがわしは今年の何月幾日に死るといふ事知りたもの一人もないなせにしらぬういなねれがくねれが銀じやねれがものじやねれがのじやくといふてゐるがとこがねれがのじや肝心の死ぬる事さへねれが自由にならぬもの是がとふなるもので今年の元日に雑煮の餅十四五も喰ふたねやぢさまが此間もころり此春から今日まで一年立ぬ内に幾人死なず是が世界中では何程の事やら敷も限りもない事じや皆銘々とも其敷の内じやぢへ今をもしらぬはかない身の上今でも御迎ひがとざるもちつと待てねくれはならぬハイくいふて往にやならぬうのやうなあふない骸を持って居よふよりいつろ死んで仕廻ふたがよい死んで仕廻ふたら死ぬる氣遣ひけがなふてよい或道歌に  
若ひ衆よ命れしくば死にめされ一度死たら二度は死なぬよ

平常往生能う御明らめなされませ。紀州若山朋友の辞世に

心學のねしへの杖に助られ極樂へ行足のうるさよ

我さへ殺して仕廻へば丸で佛じや。生てゐる内から佛の仲間入りして置ぬと極樂へ往ても佛さまがたに御近付がないとツイ投出されて本の地獄へ宿這入り。ハアスウ〜此席の御方々は皆丸佛じや。一佛一躰に成て何ぞれかしい事いふとにこ〜〜笑ふばかりうまいものじや。丸で佛さまじや。微塵も我といふものはない。今、ホン〜〜がどこにあるぞ。ハアスウ〜〜がいつくにあるぞ。天地同根同性天照大神様とも同躰じや。けれど此席が終りて門口へ出るがさいご忽ち活返りて。モウ何がほしいかい。ほしいとさわぎかける。ちやうど蛇を竹の筒へ入れたよふなもので。竹の筒に入れてゐる内は真直に成てゐる。其竹の筒を出るがさいご何をいふも金の事じや。金がないければどふもならぬ。春はどふしやう。秋はどふしやう。どのたくりまわる。竹の筒は教へじや。たしへは此席の御まへ方。即今只今の心の外に何が有る

ぞ。此外に道はないぞ。此外には生死もない。此所を能う決定して覺悟を極める事じや。ものには覺悟といふ事がないと。うろたへる。灸治はあつものなれど。熱ひとかくとしてすへれば。子供でも合點してすへる。もし鹿相で取落とびつくりする何也へ驚くなれば覺悟がなかつた也へ。じや。是もはじめから合點さして。艾に火をつけて脊中の上からころ〜〜。何でもあゝ事じや〜。此身もはかないものと覺悟して見れば。何にも驚く事はない。夫じやによつて。今をもしれぬ親じや。今をもしれぬ御主人さまじや。大躰大事にせにやならぬ。うれを澤山うふに思ふ也へ。みな爵があたつて不仕合な○なでさすり大事にするも。うづみ火のつめどふならぬ。うちでころあれ。親子のあいだも。主従の間も。夫婦の間も。兄弟のあいだも。一家親類の間も。朋友のあいだも。つめどふ成ては役に立ぬ。武士は尙以て死を極て置ねば。眞阪の時に役に立ぬ。楠正成。湊川の討死。佐藤次信。主人の身替り。ぐす〜〜した事では。間に合ぬ。あのとさ世間へ外聞がわるひの人。に譽られたいのといふやうな了

簡では出来ぬ仕業じや兼て死を極めて置たのじや或國の殿様の御辞世に  
 「終に行とてころをこゝにしめ置て世にながらへる身ころ安けれ  
 御存生の内から石礫まで建置れ世にながらへる身ころやすけれ有難ひ事  
 じや百姓でも町人でも同じ事じや此死といふものを極めて置ねばうろた  
 へる死を極めるといふはどふなれば本心を知る事じや本心に生死はな  
 い生死するものは迷ひの思惑ばかり其思惑が本来の生れ付にない事を  
 知る也へ何んば思惑が有てもねつから生死の世話は入らぬ此道理をしら  
 ぬとめつたむしやうに死にとむあがるうこで正月になると祝ひはやすじ  
 やたい死にとむないばつかりでこまめの干物までねまめなやうに何んぞ  
 御祈禱にもなる事かしらぬ孕み子を引出し水に漬つて醤油かけかすく御  
 目出たい敷多ふなるにあやかるとやう其様に子が出来てどふするものでた  
 つた一人か二人の子でさへ難義がり春はどふせう秋はどふせう子供の行  
 末がどふなろうと小言ばかりいふくせにうれも目出たい事難有ひ事の

かすくへるやうとの義を祝ふてする事なら心も形もろのとふりに義  
 を守り勤めたがよい或發句に

元日やまたうかくの始かな

面白ひ事じや口ばかりで祝ふてもまたうかくのはじめかな骸と着物ば  
 かりが正月で腹の中には何がほしいかいほしいどふしたいこうしたいど  
 災ひのかすくが殖るばかり又松は千と世の齡ひといふに可愛ううに  
 松のやゝ子を引ぬいて門口の柱へ釘で打付け千とせのことぶき御目出た  
 い松に成て見たがよい松のはりつけじやがあやかりてよいものか皆死に  
 とむないばつかりの御病氣じや正月の儀式といふは大切な事ろふを或人  
 のはなしに正月の式は大鉢神代のむかしを尊て清浄潔白に身を慎しみ正  
 直質素の風義を學ぶのじやと有るの様な事は棚へ上げて置てうろく正  
 月前からホンくしかける今年の御禮には何をせにやならぬとあわてか  
 ける別而女中方なと益正月の御禮の衣裳で氣違ひにならしやるのがある

且那殿も浮されて。いつ幾日が節で日待の料理は何々。いつ比が敷入りで芝居行きの遊山のどねごりどねらに氣をもんで。丁稚も手代も女子衆も家内諸とも打つれて。○またらうか。のはじめかな。あつたら事じや。それをきのとくに思し召て。一休和尚目を覺してやらんと。元日に大慈大悲の舍利頭竹の先きに付て。京洛中の家々へ門口から御用心。肉氣なき此しやりこらべあぢかしこ。これより外に目出度はなし。此通りじや。誠に有難ひ御示じや。人は惡念妄想を去れば。此しやりこらべの如く。清淨にして。少しの穢れ不淨もなく。是は目出度人の道はないに。凡夫は此心をしらすたい。今日の名聞利欲にふけり。たごり高ぶりて何がほしいかい。ほしいと。惡念の増長するを樂しみと思ふてゐるは。去りては不便千萬な事じや。今日いかめかしくよろほひかざる其すがたは。是此しやりこらべが衣裳をかけてゐるやうなもののじや。何が目當に其やうにうるたへまわる。早ふ其心を明らめて。ホンくを止めよとの御異見じや。けれと。凡夫は心を明らめる事とはしらす。た

いしやりこらべが氣にかゝり。あた思々しい氣遣ひ坊主が來たといふて。家々に門をしめたといふ事じや。其例によつて正月に表をしめると申ます。此とき。蟻川の新右衛門衣服を改め上下を着て。一休を請招し。其しやりこらべと盃した。死を極めたほ。目出度事はない。此露の身を能く覺悟したもののじや。侍などは。別て此死を極めて置ねばならぬ事じや。或國に主君の怨を報はん。どろの家臣打寄りて。始め制約したは。人數二百八十余人とやら。それがだんく。干べりしてやうく。四十七人が死を極めた也。へ名を擧て。末世代の擧れ。人と生れて人の道を勤る此やうな目出度事はない。此死を極めて置ぬ也。へ目が明くと何がほしいかい。ほしいと。うるたへまわる。  
「はかなくも消るを露と思ふなよ。とんなものでも死で行也。  
死んだは。とんなものじや。ちやうど寝たやうなものじや。寐た時何ん不覺へてゐるか。何にもしらぬ。天地と一體といふも。起きてゐるとき。の推慮じや。寝た時は。何んにも覺へてはゐぬ。とんものでも消てゐるなり。夜の八ッ時

分には釋迦も孔子も熊坂長範も銘々共も乞食も穢多も猫も犬も猿も鹿も丸で虚空じや消たと同じものじや寝たときは三千世界が丸で虚空じやこれは天皇様の寐た虚空じやの是は乞食の消た虚空じやのと別に虚空に墮切りはない平等一枚乞食の讀た歌に

「寐る間のみ人にかわらぬ思ひ出をうき世に返す曉のかね

夜が明ると今日がかりの世見たり聞たり皆天地のかりものじやによつてかりの世永ひ未來とは心の事じや心は天地あらん限りの活通しでいなり街道じや扱是までは骸の事はからが心の事じや

或人問て曰く三世とは如何手を一ツ打此内におり得するや看々三世とは此骸に對しての名なり心に三世はない故に不可得なり不可得とは思案分別で合點する事はならぬといふ事じやけれども是を小割して見れば眼前に今といふものがある也へに三世といふ名が出来たものじや手をうたぬ先きは未來手を打た所は現世打た跡は音が過ぎ去た也へ過去といふ三世

ともにどこにあるを過去も未來もたい今ばかり此今を會得するを本心を知ると云ふ此今の外に何が有る

「あすの事きのふの事に渡らずとたい今橋をわたれ世の人

即今の今から見れば先ほどの五ツ時分は過ぎ去て過去五ツ時分の心今いづ方に有る故に過去心も不可得なり後の七ツ時分は今からはいまだ來らず明日も未來明年未來未來とはどこに有る故に未來の心も不可得なり。現在といふは即今見たり聞たりするばかり此外に何んぞ今らしいものが有るか目といふも鼻といふも言ふたばかりで直に消て仕廻ふ夢まぼろしの如し何んにも會得するものはないたい見るも聞くも夢まぼろし一切萬物悉く影ぼらし見たといふても出る所もなく入る所もなし聞くといへども取る事も捨る事もならぬ此也へに現在の心も不可得なり此今が取らへらるゝものじやない前に在ルカトスレハ忽焉トシテ後に在り  
「いなすまの影に先きだつ身をしらば今見る我に逢ふ事もなし

今見る我はどふも取らへられぬ見るも聞くも夢まぼろしなれど心は常住にして延びちいみなし法華に彼久遠を見れば猶今日の如しとは何事じや。則心の事じや即今の今見る我は影もないものなれど今赤ひと見たもきのふ赤と見たも跡月赤と見たも去年赤と見たも十年跡に赤ひと見たも赤ひと見たにかわりはない赤ひと白いと見違へた事もない是が本心に延びちいみ大小長短のない事を彼見久遠猶今日ト云いにしへも今もかわらぬ心なれどもどふもつかまへ所もなくたい明らかなものと知つたばかりで。此外にどふも仕やうはない。さるによつて心には生ずるといふ事もなくまた死するといふ事もなくまた煩ふといふ事もなく又年の寄るといふ事もなく。譬て見れば鏡にかけ形はなれどもたい明らかなに移るばかりで是が鏡の徳でまた心に影もかたちもあけれども明らかなに移るが本心の徳往古今來此明らかさにかわる事は無い。此所は釋迦も孔子も熊坂長範も又銘々共も同じ事じや。天理に於ては少も私のない事をよく御明らめなされ。又ものゝ音もろ

の通りで太鼓はどんく。鉦はぐわんく。聖人賢人じやとてどんくくがぐわんくくとも聞へず。佛菩薩じやとてぐわんくくがどんくくとも聞へぬ。どんくくぐわんくくの外に何が有るぞ。此どんくくぐわんくくの外に釋迦もなく孔子もなく天地もないぞ。といふと正直な人は夫なら本心といふはどんくくぐわんくくの外に思案分別は入らぬものじや。なと、はや一人前の思案分別をかためるが否さに古人是を誠しめてぐわんくくどんくくなるも更にあたらすと。しかり玉ふ此やうに小むつかしい言はひでも大事ない事じや。先きはともきのふも去年も十年跡も千年萬年跡も過ぎ去たは過去といふ後ほども明日も來年も十年さきも千萬年先きもいまた來らぬ也へ未來といふ。うふ見れば年といふも過去未來月といふも過去未來日といふも過去未來時刻といふも過去未來で。ことばばかりで一切が皆影ばうし。ちよふと水に畫を書が如く。かすみに色相の移る如く。向へは移り去ればといひる影もなし。此故に三世不可得といふ。夫から何も無いものか

と思へば眼前赤ひと見あついと知りつめたいと知る。は何ものぞ古今來替らぬ照々明々歴々たる物あり是を名付けて古の明德とも本來の面目とも主人公とも本心とも天とも妙とも名はたんと付てあるけれど皆心の異名じや名は跡で覺へたがよい急に入用は心の事じや心は影形もなく色香もなき也へホンくもなくハアスウもなく何がほしいかいほしいもなく何をいふも金の事もあく地獄にころ金の汰沙はあれ極樂には金の汰沙は入らぬ往古今來生き通しの變化也へ佛家で無量壽佛といふ儒道では天といふ皆心の事じや心の外に一切の書物一切の經々に用事はない。三千世界の一切萬物皆此天を心としてゐながら天をしらずにゐる事は魚は水を心として水を吞たり吐たりして生きてゐながら水を心とはしらぬ。水を離れて生きてゐる事はならぬ。人は天を心として天を吞たり吐たりしてゐながら天をしらぬ。天といへばあたまたまの上の青ひ所とばかり思ふてゐる。アノ青ひは限りのない色じや則仁の色とも云ふ遠ひ所から此方を見ると

青ひ。此方も青ひ中に這入てゐるけれど青ひは見へぬ。此やうにいふても合點の惡ひ人は天といへば此上にまだ世界が有て二階住居の有るやうに思ふてゐる。此上には何にもない。日月星辰といへども何にもない。虚空の天を行道なざるばかりじや。是は混天機といふものを見ると日月の行道までが残らず知れる。扱一切萬物人間禽獸草木まで皆此天を心としてちうくかわく。出る息引息ばかりのかね合にてすつぶり天につままれて。此やうに動きはたらく事。たとへば大海で魚のゐるんでゐるやうなものじや。此やうにしてゐるは大海の中へ籠を幾つも並らべて其籠に權兵衛の太郎兵衛のね源のれしちのど名を付て並らんでゐるやうなものじや。ソコテ人の腹の中も天腹の外も同じ天なれど腹の中の天は性と名付けてある。是は少と様子のある事なれば其わけは跡で知れる。うれでマア性といふて居れど同じ天に違ひはない。けれども通用が性といふ。やつぱり心の事じや。此心を知れば性を知る。性を知れば天を知る。夫で天が心といふ事が能う合點が行



扱此一切萬物が虚空天を心として雀はちうく鳥はかあく。あんまり奇  
 妙なものもへ。又妙法とも實相ともいふ實相といふは雀はすいめでちうく  
 が天地眞實の相鳥はからすでかあくが眞實の相此實相にうろはない。ち  
 うくいふものは法ちうくいわずものは妙なり。柿木に柿の出来るは法。  
 柿を出来るは妙なり。一天四海皆歸妙法といふて妙を知らしてあるけれど。  
 何んばでも此妙に氣が付ぬちつと不審打て御らうじませ。車はどここが車じ  
 や。輪か輪建か輻か輻か輻か輻か軛か軛か軛か軛か軛か軛か何もかも一ツく離して見  
 ればことくく皆名がある。どここが車じや考へて御らうじませ。眞木と車の  
 穴との間に少しばかり寛ぎのある所へ天が通ふて車の用を勤めてござる。  
 是で天の御たすけの満々である事を御合點なされませ。あれがすき間なし  
 に横槌のやうなものなら引ずりてあるかにやならぬ。それでは大躰大躰な  
 ものじやない。天の御通行がないと皆横槌引ずり廻りてある。見とむないも  
 のじや。ちと嗜んだがよい。扱車のうごくは車の用車をうごかすは車の躰躰

用一致にして車の名あり。御まへの御名は源兵衛さま。どここが源兵衛じや。目  
 が源兵衛か。鼻が源兵衛か。耳か口か舌か齒か手か足か脊中か腹か臍か尻か  
 但し小便する御道具か。陰囊か骸の皮か肉か骨か五臟か百尋か腹臆か皆る  
 れく。に名がある。夫を一ツく除て見れば源兵衛はどここにある。それか  
 くれ。これか源兵衛はどここらじや。な。此所を能ウ合點せう。へ。大切を事じや。  
 此何んにもない虚空の不可思議天の妙躰から形地をこしらへて使ふてど  
 ざるが妙。うごいてゐるが法源兵衛がものいふは法源兵衛にものいわすは  
 妙なり。妙法一致にして天地眞實の相。是を法華に如。是相。是性。是體。是  
 力。作。因。縁。果。報。如是。本末。究竟。等。ト。アリ。斯の如く天地眞實の此體  
 をこれか。のじや。く。と。うろば。つかり。いふてゐる。是が怪力亂神を語といふ  
 て。君子はこれを氣違ひじやといふてござる。去によつて妙を離れた法もな  
 く。法をはなれた妙もなし。妙法一相にして實相の名あり。目は目の妙法で物  
 を見る。耳は耳の妙法で音を聞く。鼻は鼻の妙法で香を嗅ぐ。舌は舌の妙法で

味あじひを知る見るの聞きくの嗅かぐの味あじふの知しるのとて所々で名なはかわるやうなれど難たが波はのあしは伊勢いせの濃な萩はぎものゝ名なも所によりて名の替かりはあれど一ツの心こころが観かんるのじやによつて聞きて見みや言いふて見みや喰くふて見みや味あじふて見みや嗅かひで見みやなでゝ見みやいろふて見みや知しりて見みやと目めで見みるばかりが見みるでもないたつた一ツの天あまの心こころで一切いっさい世よの音ねを觀かんじ見るのじや火事かじのとき太鼓たいこがどん／＼目めも鼻はなも知しらぬに耳みみが一番いちばんに見みるどん／＼火事かじじや夫おつとから屋根やねへ上あると遠とほひ近ちかひと目めが見みる其時そのときに耳みみはない休やすみじや耳みみは消きてゐるまた目めや耳みみで知しれぬ事ことがある肴さかなのよしあし是こゝも大きおほきにわるひは目めのいろでも知しれるけれどよいかわるひかといふやうな肴さかなは知しれ憎にくひ其時そのとき鼻はなが嗅かひで見みてコリヤいけませぬ又何なにやら紙かみ古ふるくさひと鼻はなが見みる夫おつとからさわひで目めがきよろ／＼めつさうあ火か燵たきに足あし袋ふくろがくばつてゐると目めが見みる暗くらがりでもあまひからひは舌したが見みる皆實相みなじつさうのはたらしき心こころは妙めうなり骸からだは法ほうなり心こころは天あまで目めに見みへぬけれど法ほうはからだの中に備おなりてゐる法ほうは道みちじや五本ごほん

の指ゆびでも親指おやゆびは親おやゆびの妙法めうほう小指こゆびは小こゆびの妙法めうほううごくは法ほううごかすは妙親指めうおやゆびは親指おやゆびの通りするが親おやゆびの道みち小指こゆびは小こゆびの通りするが小こゆびの道みち何んにもしらぬらしいさい子こでもアノのゝさんと親指おやゆびつき出す子こもない何んば親おやゆびでも人ひとさし指ゆびの道みちは勘かんまらぬ人ひとさしゆびは人ひとさし指ゆびの通り勘かんむるが人ひとさし指ゆびの道みち乞食こじきばゝの死ししなでも南無なんぶあみだ佛ぶつといふてにざり拳こぶし出すものでもない夫おつと々に備おなりた道みちの通り法ほうの通り斗はかする事ことならぬもし小指こゆびが親おやゆびのまねしたり紅べにさしが高たか々々ゆびのまねすると道みちに背そむくへ五本の指ゆびがもがつき出すと家内かうち大おほさわぎ源平げんへいの大合戦おほあひげんも其道そのみち々に背そむくへ諸々方々もろもろがもがついたのじや一軒いっけんの内の納おきならぬも夫おつと々の道みちに背そむくへじや旦那だんなは旦那だんなの道みちがある不御家様ふごけさまは御家様ごけさまの道みちがある息子ひつこ殿だんなは息子ひつこ殿だんなの道みち丁稚ちやぢは丁稚ちやぢの道みち其道そのみち々が間違まちがふと家内かうちがもがつく難たが義ぎなものじや夫おつとといふがみな別わか／＼に心こころを持も合あしてゐるもへ目めが覺さめぬ治郎兵衛ぢらべゑは治郎兵衛ぢらべゑの心こころは源げんはたげんの心こころと銘々巾着めいめいきんぢやくに錢ぜにでも入いてさげてゐるやうに

思ふてゐる。あんまりあさどひ。天地貫ひて一躰の心といふ事しらすにゐる。三界唯一心とは何をいふたものぞ。文字は讀んだだけと何んの事やら合點が行ぬ。もかぬ筈じや。皆別々。心に心をこしらへてゐる御かげじや。腹の中に火の玉を手細工に建立して。何んのかのくくくと小理屈いふてゐるのじや。先此火の玉のこしらへ始めを能ふ吟味して御らうじませ。うまれた時は何にもしらす。心が有とも。火の玉が心じやとも。何ともかとも思ふてゐやせぬ。天上天下唯我獨尊。天地と俱に兼越して。其折々の心ばかり。天の心で育て上られ次第。成人するはと見たり。聞たり。飛んだり。はねたり。自由自在が出来るものもへ。あんまり甘過て。ツイうるたへ出したものじや。此やうに動きはたらく。自由自在の出来る此骸は。れれがもので。れれがでにするのじやと迷ひかけて。夫から天と別々。に世帯するもへ。だんく。貧乏人と成り。何がほしいか。いほしい。何を言ふも金の事じや。金がなければとふもならぬ。と不足ばかり。我慢はいよく。増長してとふが濟ぬ。斯が聞へぬ。とふも此

事はつかりは言はねばれ。此胸が徹られぬと氣を妄搔。其こたへられぬ胸の中の願主は。誰じや。能ふ吟味して見たがよい。たい此出る息引息に動もならぬ。斯もならぬ。思ふばかりの胸の中は。偏徹もなき。あばら骨かなじや。けれと是が思ひ付た僻といふもので。とふも仕やうのないものじや。夫で何となど。かどなど。思ふてゐねば。心悪ひ。其僻付たもや。く。を引擢りて仕廻ふ。神佛聖人の御教。何にもむつかしい事は入らぬ。我心を知るばかり。一切經一切の書物も。皆明德を明らかにする。我心の所書じや。世間に書を讀人もたんどあれど。大方文字の沙汰ばかりで。肝心の心の沙汰をするものがない。此方の學文は。交字しらいでも。心安ふ出来る。心學と云て。心をまなぶのじや。學とは眞似ふといふ事。聖人君子の御心を。及ばすながら。銘々とも心に移して眞似るもへ。學といふ。我腹の中を誠にする心の吟味じや。れのれを責るが學文の大意。其己を責るとは。我心に立歸るばかり。立歸りて見れば。善惡の沙汰もなく。又文字の沙汰もない。上天之載は。聲もなく。臭もなし。至れ

る哉此至れるかなとは心の事じや心は天地に満々たれども影も形もないものなるが何を便りに此やうに見たり聞たりしてゐるや此所を能く考へて御らうじませ何にも外の事じやない思案分別止にして唯此まゝにせよ見ても裏表なきこの心來らず去らぬ面影の君に引れて萬代や經んど一休和尚も此面影には大きに戀煩ひをなされた其筈じや此世有らん限りの無量壽と契りを御結びなされたのじやとなたも御合點かなソコテ蜷川新右衛門の末期に引導渡してやらんと仰られたれば新右衛門むつくと起きひとり來てひとり歸るも我なるに道教んといふぞれかしき一休の返歌にひとり來てひとり歸るも迷ひなり來らず去らぬ道を教へんと爰が生死一大事の因縁大切な所じや此を能く合點せにや一休の辭世も聞へ憎ひ死にはせぬよろへは行ぬこゝにゐるたづねはするなものはいはぬぞ焉とはせよこじやぞ來らず去らぬコソ此目に見へぬ虚空の天じや有難ひ所じや一切こゝから助けぬいてござる此茶椀も形地は土内外の虚空は天此虚空の天が入

用じや此茶椀も形地ばかりですん切りて干木のねもり見るやうなものなし茶碗の用は勤まらぬ内かくばみて虚空の天があればこゝろ茶を汲で茶椀の用を勤める人も茶碗に助けられて用を調ふううないと熱ひ茶が手にすくふて飲むものじやない人は片意地な所もあれ茶碗は素直にあいゝと日がな一日茶碗の道を勤めぬいてゐるのかわり夜分になれば茶椀でぐうぐうねつから滞りはないうまひものじや其時は茶碗といふ名もわすれ果てゐる夫でも夜分火事か何ぞのときにはまた起てはいゝいふてかけまはるもし鹿相で打落せは直に破るけれど腹も立チャせぬろの時茶碗の形地は破るけれど茶碗といふ名はひいきも入らぬろこで茶碗の辭世に

今破るよろへは行ぬこゝにゐる尋ねはするな御茶は吞れぬ來らず去らぬこゝの所を茶碗めが能く合點したもののじや又燈し火も同じ事じや明ウ燈りてゐる間はともし火のかりの世此火が消れば本の暗やみ

夫で燈火の辭世に今消るよそへはもかぬこゝにゐる尋ねはするなわかう  
はないぞ。古歌に

「ともし火の消ていづくへ行やらんくらきはもとの住家なりけり。

暗ひはくらがりの心で則天。わかひは火の心で則天。心に影形もなく明暗も  
なく。無聲無臭といふこゝろはどのやうなものぞ。御工夫なさりませ。此やう  
にいふても遠慮深ひ御方は其やうに心安う性を知るの心を知るのといふ  
けれど昔は人も上根に有たもへ工夫に工夫を徹し明德を明らかた人も有  
おけれど今は末世末代人の根氣も薄くなつて中々我々如きが性を知るの  
心を知るのといふよふな事は出来ませぬとめつたに辭義する人があるも  
のじやがこゝを能く考て御らうじませ。昔も今も心にかわりのおい事をた  
とへて聞しませう今爰へ燭臺に蠟燭千挺は立ならべてまづ一丁に火を  
燈し其蠟燭の火をだんくくと次ぎの蠟燭へ移して廻るに始めともした蠟  
燭の火は昔とし段々と跡で燈た火を今の世として見るに明さに少しも違

ひはない是は去年の火で古ふて暗らく。是は今年の薪米火で格別明りがつ  
よいといふやうなこともないといふてもまだ名や形に迷ふて夫でも火と  
人とは違ふと言ふてござるけれどこゝを能く合點したがよい火と人とは  
形地に違ひはあれど火のあかいは火の心人の動くは人の心心は則天。天に  
二ツはない此やうにわたし一人が言わけせいで大事ない事じや法華に  
十方佛土中唯有一乘法無二亦無三といふてあるは心の事じや佛さまにう  
ろはない皆銘々ぞもの本心を明らかにめさるふばつかりにいふてある惜な御  
證文じや又佛さまが否なら儒道に子曰參哉吾道一以貫之其外種々無量の  
書物數も限らぬ事なれば私は文盲なもへ文字の事は甚不得手。あなた方で  
能く吟味して御らうじませ。すべて一切の經々一切の書物心を知るの外に  
用事はないそのまた知る心といふはどのよふに知るのなれば我心にこれ  
が見る。これが聞く。これがする。と思ふ其思惑のない事を知るのじや古歌に  
「ほととぎす啼つるかたを詠むればたゞ有明の月を残り

此たいにさへ成たら月ばつかり残りて有る此月は誰が見てゐるぞ月では  
 遠ひ最少と近おして上ヶませうサア此扇は誰が見てゐるぞ。たれがくくの  
 分別を山ほどこしらへて見ても扇はあふぎ又思案分別を止にして見ても  
 やつぱり扇じや是でれれがくくの分別をするだけが無益の費といふ事を  
 能ウ御得心なさりませ。夫じやによつて此れれがくくをさつぱりと除てサ  
 ア此扇は誰が見てゐるぞ。やつぱりれれが見てゐるでは役に立ぬ何と能ウ  
 染込だものじやないか。此れれがくくの天地の間尺にあわぬ事を私も自得  
 した事がござります。序に御はなしいたしませう。近頃夏の事で御ざりまし  
 たが其時の大暑怪しからぬ事。さのふにまさるけふの暑さ。チト熱りを涼さ  
 んと裏へ出崩溜りの水邊に床几のあるを幸ひと。しばらく涼敷の御恵みに  
 暑さを忘れて居りました。時に床几の上へ溝虫が一疋這ひあがり。何やら身  
 を悶ると思へば脊中に針のやうなものが出てゐる。見てゐる中に両方へ分  
 れ羽根と成り。蜻蛉のやうなものに成て。いづくともなく。フウ〜飛んで行

た。扱々ふしぎな造化の御細工と感入る中に又一ツ疋這ひ上り。是も同じ  
 く脊中に羽根の形がある。其羽根を又両方へ開かんと身をもがけ。とも分れ  
 ず。ソコテ私が了簡じや。とふぞ早ふはねを廣げてやらんと思ひ。紙入の楊枝  
 を取出し。其羽根を分て遣たれば。直に一間ほを飛び上ると見へしが。忽ち水  
 中へ落入て死で仕舞ふた。何の入りざる世話の焼立。あなた任せに仕て置ば  
 よい事を。此方に氣を急たばつかりで。無益の殺生。いたしました。是で一切を  
 考て御らしませ。皆我人ともに時節の來るを待かねて。氣を急て無理するも  
 へ。中途で敷尻て仕廻おが多ひ。又世間の聳取り嫁取りの取結びな。とは別し  
 て。大切な事じや。容鉢の能ひのや。身上のよいのを。期にして。れれがくくが  
 手傳ふて。一生を過事が有ものじや。女中方。初産の時など。かならず氣を急も  
 のじやないぞ。心靜て。時節の來るを。じつと待てゐるのじや。双すると。腹の中  
 と。外の氣と。合鉢するも。へ。心安ふ。安産する。女中方は。別して。大事じや。程に能  
 ウ心得て。居やうぞ。へ。又雪隠へ。往た時。も。同じ事じや。無理に。氣張るものじや。な

い。あなた次第にしてゐると。心能ふ御安産なさる。在郷の子供が子守歌に利功ぶるのは短氣と損氣あはが身を持世を過すと謠ふてゐる。何と面白ひ事じやござりませぬか。阿法とは阿字の法に随ふてゐるのじや。それがくのかしこは入らぬ。あなた任せにしてゐると。自然と身に幸福を得るといふ事じや。又主人に奉公する衆なと。取わけ氣を急ものじやないぞ。たいあいくくと素直に。御主人任せにしてさへ居れば。仕廻ひは天地合身が脩る。夫を皆が氣を急て。中途で暇取り女房穿作跡へも先へも往がたし。一生うるたへ難義の仕通し。其外心中身なげ首くより。分散欠落行方しれず。物狂ひも狐つきも。皆れれがくのかの御手傳なされた御かげじや。一生身の災ひとなる。れれがくのかより人に早ふ暇遣つて御仕廻ひなされて。どおぞ我なしの本心を御明らめなさると。誠に天道次第あなた任せで助りぬいてゐる此身。天の與ふる樂しみは實に面白き有さまかな。生涯を有難ひくで。御暮しなさる事とござります。此やうな果報ものがどこにあるもので。能う算用して

御らうじませ

道二翁道話初編終

道二翁道話二編

道須臾離べからず離べきは道にあらす此道々といふてあるが何ぞ道らし  
いものが有か道は朝から晩まで顯れ切て有けれと心學の力がないとねつ  
から見へぬ道は上下に明かなり誰が起しもせぬけれと夜があけるとちう  
くかあくすいめは雀の道からすは鳥の道犬はいぬの道猫はねこの道  
鮒はふなの道鯉は鯉の道鯨は鯨の道鱒はいわしの道少しも道に違ふもの  
はない其外非情の草木に至るまで柿の木は柿の木道の栗の木はくりの木  
の道柳はみどり花は紅井のれくが道の通りを勤め行ふて少しも道に  
背くものはない萬物一躰道の外に教もなく教の外に道もなし人には人の  
道が有て五倫五常の外に人はないともく母の胎内に一滴の水がやどる  
や否や道はしやんと備り切てあるけれとかなしい事じや  
「生れ子が次第く」に知恵すきて佛に遠くなるぞかなしい事じやちいさい

時にはどく様かゝ様くといふて付慕ひとく様かゝさまがらつとの間で  
も見へぬとれるくして尋ね廻た其咎じや父母の外に心はない父母ばつ  
かりじや是は生れぬ先きから天地自然のはへぬきといふもので則是が道  
じや夫が次第く智恵づきて佛に遠くなるぞかなしい事とは其はへ貫きの  
道をはなれるもへ鬼とあるころ恐しけれ其道に離るゝはどふしたもものな  
ればたい物事に執着するもへじや執着とは物に取らるゝ事じや放心する  
のじや放心とは向ふへきよると心を取放して此方は御留主夫もへ見る  
に取られ聞に取られ目が明くと何がほしいかいほしいと見るものさわる  
ものに取りられ切てゐるじやによつて道は暫もはなるべからず離べきは道  
にあらず道とは何んぞ心の事じや神道と言ふも心の事佛道といふも儒道  
といふも心の事じや儒道では放心といふ佛家では迷ひといふ放心といふ  
より迷ひといふが子供衆や女中方の耳なれてどざるもへ迷ひといふが知  
れよい切此教といふは何んにも外の事ではない此迷ひといふ事がある也



へに聖人佛が此教を御立なされたものじや此教じやとて神佛聖人の御作  
 でもない天地自然の道には迷ひといふ事のない事を御知りなされて其道  
 理を御教なさるのじや迷はねば教は入らぬ一切萬物畜類鳥類草木に至る  
 まで天より請得たる通りの道を勤め行ふてゐる也へ迷ひはないたゞ氣の  
 毒なもの人じやうれの道を往ばよいけれど道もない所へ往ふとす  
 る也へどつけもない事が出来る本途の道を行けば怪我はないに磯道やい  
 ばらがきで往かれもせぬ所へ無理に往ふとする堀も淵もあるけれど其難  
 所が目にかゝらぬ危ひ事の天上じや誰でも知れた事の様に思ふてゐるけ  
 れど知れぬじやて知れぬ證據をいふて聞しませうわしは今年の何月幾日  
 に死ぬるといふ事知つたものひとりもないわしは今年の何月幾日に分散  
 する何月幾日に逃落する身投する首くゝる心中するといふ事知つた者一  
 人も有りやせまい知らにやころ毎年くゝ色々さまざまの事が出来るじや  
 ないか皆うかくして覺悟がない故じや君子は此覺悟をささる也へ日々

に新に競々こわしくの御慎が厚ひ也へ怪我がない此怪我の本はといへ  
 ば迷ひからじやうの迷ひをとへて見れば夏向き此といふ虫が窓からか  
 表からかついと這入て座敷の障子でポンくゝいわしてゐる明ひ也へ向ふ  
 へもかれるかと思ふてポンくゝと道もない所へ往ふとする立歸れば何ん  
 の事はないに其立歸る事を知らぬじや聖人の教へは此立歸る事ばかり  
 去年も江戸で十一才になる子が前訓を聞て此立歸る事を知つた子があ  
 る其子が何心なう遊んでゐれば駕かきがいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 何んにもしらすに居れば駕擔が息杖で子の脊中をしたゝかたゝいた其  
 子大きに腹が立たれどイヤくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 らへ身に立歸りて見たれば何んの事はない腹立が止だ夫から内へ戻りて  
 親御様に其立歸つた事を御はあし有たれば親御様は大きによるこんで全  
 く前訓の御蔭でかやうくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 一生災難の種は消て仕廻ふたといふて私も悦びました一切の事が立歸り

て見れば向ふに悪ひ事はない

「我よきに人に悪きがあるものか人のあしきは我あしきなり  
皆我身に立歸らぬゆへ主を恨み親をうらみ終には家を失ひ身を亡す大事の  
事じや皆銘々身に歸り見て腹の中に覺があらば懺悔をなされませ。親ある人  
ならば親のまへへ手をつかへ主人ある御方ならば主人の前へ手をつかへわ  
たくしはかやうく存じ居りまして御恨み申ましたと云ふ御了簡なし下  
されませとさんげして御詫なされませ懺悔の功德は無始の罪業消滅するど。  
佛様の御説き置れたにうろのない事じやはとに身に歸り見て御詫なされま  
せ身に悪業さへなくば懺悔は入らぬ事なれと悪業なしの人といふもない  
ものじや朝から晩まで見ると聞との二ツから始る五塵の内でも見聞の二  
ツを深く戒て有る目と耳とからホンくが起る能寐た時はホンくはな  
い寐た時とにホンくが有るぞ寐た時は丸で佛様じや盗人が這入ッて  
何やかや引擔て去にれるけれどしらんかして見ぬ顔してござる有難ひ事

じや不へ無心無念の本躰じやとつくりと拜でござるうじませ此時は三千世  
界もなく天地もない實相無漏の大海じや乞食の讀た歌に

「寐る間のみ人にかわらぬ思ひ出をうき世にかへす曉の鐘

寐た時何が有る釋迦も孔子もない熊坂長範もない犬も猫もくうくばつ  
かり十萬石も百萬石もない玉樓金殿もない金銀財寶も宮も藁やも穢多も  
乞食もくうくは同なし事じや寐た姿を外から見ればある或は親子とも  
寢てゐる母親もあり乳香子もあり外からは見ても寢て居るものは何んにも  
知らぬ物の見事に消てゐる少もれれがくはない天地同根同性丸で我なし  
虚空同躰此時始而知衆生本來成佛ナルヲ能ふ考て御らうじませ是尊ふと  
き御姿じや不へ扱目が明くとうき世にかへす曉の鐘かねがごとんと鳴ると直  
に今日の上が道じや雀はすいめの道鳥はからすの道ちうくかあく柿の  
木に柿が出来栗の木に栗が出来る此外に道はないぞ神道といふも佛道とい  
ふも儒道といふも此事じや觀見法界草木國土悉皆成佛と天地の間に成佛せ

ぬもの何がある。禽獸草木に至るまで悉皆成佛。各性命を正しうしてうの分限に隨ひ君子其位に素して行ふ外を願す。商賣があはぬといふて。春咲すにいた梅もなく。米が高といふて。顔しかめた鶏もなく。節季に錢が足らぬといふて。欠落した犬もない。難病平癒の爲に西國四國廻る狸もあければ。不仕合で從弟の親類尋ね廻りて。かゝりに行腹蛇もない。皆天命に隨ふて。分外を願ひ求めざる也へ。一切世話入らず成佛せぬもの何がある。人ばつかりが成佛せず。にゐる。此やうな情ない事がどこにあるもので。實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹ねども。隨緣眞如の浪の立ぬ目もなしと。目が明くと。隨緣といかて。見るにつけ。聞につけ。何がほしいか。ほしいと。迷ひ出す。哀しい事じや。皆目が覺めぬ也へ。じや。不へ。此迷ひを立歸らそ。おぼつかりの教へ立歸ると。丸で道じや。立歸る事を知らぬ也への教じや。佛家で火宅といふも。又八萬四千の地獄といふも。此ハアスウ〜の事じや。目が明くと。何がほしいか。ほしいと。ふしたい。こうしたい。春はどふせう。秋はどふせう。子供の行末

がどふなるう。何をいふも金の事じや。金がなければどふもならぬ。此事が三年前に氣が付たら。今の難儀はせぬものと。死た子の年まで敷へて跡へもホソ〜。先へもホソ〜。是を八萬四千の地獄といふ。極樂といふは。たつた一ツで助かるばつかり立歸るばつかり立歸りて見ると。むしるの上も極樂世界。又立歸る事がないと。玉樓金殿も。ハアスウ〜。苦しみ朝から晩まで八萬四千の地獄廻り。縮緬羽二重にまかれて。結構な座敷で給仕さして御めしを喰ひながら。青ひ顔して。わしがやうな因果なもの〜。皆ホソ〜の過ぎたのじや。不。蛇めがあんまりホソ〜して。ホソ〜。草臥にくたぶれて。後には仰向に成て。ぢり〜。まいしてゐる。此等は。まだよいのじや。今一段しきりが來ると。ハアスウ〜。いふ柏子に。火の中へ。ほいと飛び込で。仕舞ふやけ。せせにや合點が行ぬ。愚人夏の虫飛で。火に入る。火宅のくるしみ。皆れのれが手に飛び込むのじや。こわひ事じや。西行の歌に  
「來て見ればこゝも火宅の内なるに何住よしと人のいふらん

明神様の返歌によしわしと思ふ心をふり捨てたい何となく住ばすみよし。此住よしとはこの事じや外にはない皆銘々の胸の中が住よし様親子兄弟夫婦もともに一家親類睦まじう家内和合住よしくらし此住よし様をしらぬもへたゝい何んのかのくゝと互に口舌いひ合ふて住憎ひ火宅にしてゐる。勿躰ない事じや予へもふよいかげんにホンくゝして置たがよい。「鳴子をば己が羽風にねどろきて心とさわぐ村雀かな」「傀儡師胸にかけたる人形箱佛出ろふと鬼を出ろふと仕よい樂な事を嫌ふて仕憎ひ苦るしい方をたのしみと思ふて氣を張て勤めてゐるが小人の常じや孟子曰不仁者可與言一哉安ニ其危一而利ニ其蓄一其亡樂所以者トアリ是が小人の樂とする所是非もあい事じや皆災ひを利と思ふて我身亡す事を樂しみとしてゐる是をたどへて見れば盗人めが家尻を切る時に内の様子を考へどふ目を見ればよしと自身も惡ひといふ事は能ふ知ッてゐるもへふるひくゝしをるどふやらこうやら首尾能ふ切負

せた。ヤレうれしやと悦ぶ是がこれ皆災ひを利として身を亡すもゑんもの。のを樂しむといふものじや。扱夫から又そろくゝ忍び入て銀戸柵にかゝり錠の儼てゐるをひねくり廻しどふ知れねばよいがくゝと震ひくゝ是もどうくゝ壞放してヤレくゝ嬉しやくゝ皆災ひを利とするのじや是から門へ持出すをどふ知れねばよいがと差足拔足ろろくゝ表は首尾能ふ出たヤレ嬉しや此時れのれが首のころりと落ちてゐるもしらすヤレくゝうれしやくゝと我身を亡すもゑんものを樂とするのじや何んぞマアせうこともないとしや是が盗人ばかりの事じやない予へ高利を取てはヤレうれしや。疵物を首尾よう賣付ケてはよしよし。人目を首尾能ふ掠てはヤレ嬉しや。向ふの難義は不構此方の勝手さへよければ先ッよしくゝ。すつきり災を利として身を亡もゑんを樂しみとしてゐる皆礎道や堀の中へはまるのじや。うれを痛はしう思ふてヤレ立歸れッ礎道じやッレはまる予といふ神道佛道の教へ聖人君子も涙こぼして御世話なさる則是が教へじや聖人の教へ

は子孫長久の道より外はない。小人の目から見れば甚だ淋しい夫也へ此大道を往人があゝ歌に

「人多き人の中にも人そなき人になれ人人となせ人

君子の大道は行人がすくない。兎角磯道や堀の方へは行人が多ひ其咎じや賑かで連が多ひ其又がけ道には色々様々のものが並らべ立てある。先ッ一番に鍋焼貝やさすつぱん汁うまいものばかりじやろの上美しいとふるう。藝子やら舞子やら太鼓持やら役者やらひんくわんくわんとんと賑かにして呑や謠や一寸先きは暗の夜わいくのわいとさ。一向やくだい。一寸先き所じやない。丸で闇じや。ソコ不忠不孝身披心中首くもりと。段々直打の高ひ磯道へころりくと落ちて行知れた事じやけれど。皆此がけ道を好もしがる。皆ホンくから起る其ホンくのもとは見ると聞くと。二ッから故に君子はその見ざる所を戒しめ慎しみ聞ざる所をねぢ恐る。此やうにいふと芝居も見ざる事ならぬ。酒も飲事ならぬ。茶屋へも行事なら

ぬかと思ふが。ろのやうな不自由な事じやない。君子の大道はねはやけにしてせばいのじやない。酒も飲だがよい遊所へも行がよい。樂しみに行所にしたものじやもの其程くくに樂しむがよい。うれをくるしむが間違ひじや。皆此方の用ひやうが悪ひもへじや。聖人の道は和するが道じや。和するといふは其分限を越すして。ほとよふく。執行ひ世界と中よしで暮すのじや。夫で常が大事じや。たい常を慎しみ恐るゝが肝要じや。皆能ふ云ふ事じや。ふつと出来心で大きな災難に逢ふたなと。出来心といふが。とこに有もので。三界唯一心。天何言四時行百物成。ト此心がついやちよつと手細工に出来るものじやない。夫をねれがくで。ねれがものにしてゐる。じやによつて。道は聞ねばならぬ。どれほとよい人でも道がないと出来心といふものが身を亡す。こわひものじや。わしは悪ひ事はせず無理はせず。商賈には情出す。親達は養ふ。此外に教は入らぬ。別に聞事はあゝ。是でよいと。我ばかり合點して。ちやんと。貫木入てゐる人が有ものじや。是がとふもならぬ。で孔子でも。釋迦でも。是で

よいといふ事はない。心の駒に手綱ゆるすな。戦々競々日々新亦日新なり。是  
 でよいといふ事はないうれに手綱なしの駒に乗りあるくもへとこまで行  
 ふもしれぬ。あふない事じや。道は須臾も離るべからず。引留る手綱があいと。  
 どのやうな事が出来もしれぬ。じやによつて常に稽古してねかねばならぬ。  
 本心を知らぬと可愛といふては取られ。憎ひといふては取られ。若ひ御衆は  
 取わけ。此可愛といふに取らるゝが多ひ。この國のものやら知りもせぬ人  
 を大切に。して住吉へつれて参つたり。妙見山へ通し。駕で連れて参たり。遊山船  
 で花火焼て見せたり。其仕廻には勘當請たり。欠落したり。心中したり。首くゝ  
 りしたり。是等はあんまり取られ過といふものじや。よつて心得ねばならぬ。  
 大事の事じや。何んば御歴々様方でも。此道がないと取られやすい。傾城とは  
 城傾とやら云て。昔から何んばも家國をかたむけられる。皆可愛に取られた  
 り。嬉しいに取られたり。憎ひといふては取られたり。北條時代の盪治殿ちつ  
 とのあいだの堪忍が出来なんだ。たばこ一ふく呑む間引留むる手綱がなか

つた故。一家中はちりくばらくで難儀する。高で口論とて口での言ひ合  
 ひたどへ人中で。これほと地面かゝされた。とて善悪邪正は天地に明らかな  
 事じやに。惜しい事じや。じやによつて常が大事じや。常に大事を極めてねか  
 ねばならぬ。銘々皆腹の中に心中も身投も首くゝりもある。間男も盗人もあ  
 る。孔子も釋迦も骸のある間は。皆腹の中にある。夫也へ此出来心を靜る爲  
 の教じや。日々新に戦々競々戒しめ。慎めこわしく。弘法大師の歌に  
 「法性の無漏路と聞けど。我すめば有爲の浪風立ぬ日もなし  
 隨縁真如の浪の立ぬ日もなし。時々因縁にふれて。ツイひよいくと。出  
 來心慎しまねばならぬ。大切な事じや。此前京に冬の事で有たが。夫の留主に。  
 友達が遊びに来た。女房は何に心なふ。火燧で仕事してゐる。又友達も夫が留  
 主なら。早ふ去ばよい。寒ひ事じや。といふつゝ。上る女房も。じだらく。夫が留主  
 じや。と言へばよい。に。火燧の火がよい。ちと御あたりなされ。といふ。友達も。じ  
 だらくもの。ツイ火燧に當たもの。じや。是がこれ。兩方に立歸る心のないの。じ

だらくばかりで爰までは出来心もないが彼火燧にあたりて。一ツ二ツ断  
 する内。ツイ手がさわり足がさわり。ちよつとふともへ足の先きがさわる  
 や否や直にちよか〜と出来心。こわひものじや。ほくちやの火なぶり。常に  
 用心せにやならぬ。恐しい事じや。所へ夫が戻つて来た。扱られからが出刃庖  
 丁さんまい。切つたり突たり。丁内ろうどう。大きな事が出来心じや。始め友達  
 が内を出る時。何んの氣もないけふは。八兵衛の所へ往て間男して。仕廻に出  
 刃庖丁で突合せうと。思案して来たでもない。門口這入るまでも。また火燧へ  
 當るまでも。其心はなかつたけれど。ツイ出来心。大事のものじや。よつて常を  
 慎しまねばならぬ。皆安樂なからホン〜が起る。何がほしい。かいほしいも。  
 道がない也へじや。道は結句不自由な所にあるものじや。甚だ貧窮な人の。今  
 日の世渡りに追ひ廻されてせう事なしに。道を行てゐる人が有ものじや。年  
 寄り親に女房子で家内五人是を男の足一本で。其日過ぎ。大根〜といふて。  
 日があ一日賣りあるき。日暮に戻りて。草鞋もぬがす。是嗅見や先づ今日も二

百文。扱々有難ひとれしいた。いきソノ米買やれ。是は薪代ソノ油ソノ味噌代  
 と夫々にちわりて渡し。とふや明日も日和ならよいが。と夜食も喰ふて寐た  
 所は極樂。一日の草臥で夢も見すく〜と寐た所は萬貫目持も。庭の上も  
 同じ事何んにも替つた事はない。扱目が明くと草鞋しめはき。今日も御日和  
 様有難ひと。又荷を引かたげ大こん〜何んばよい。普請の家を見ても。テモ  
 結構な家と見たばつかり。此やうな家に暮したいとも思わす。大根〜ねつ  
 から取られる氣遣ひげはない。又友達が向ふから来る。權兵衛とこへ友達が  
 今日休んで坊主めつれて。開帳参りソリヤ。能ふ参りやる。参つてねじや。チ  
 イ〜早ふ仕廻や。うまいものじや。扱權兵衛は情出すかして。坊主めにもさ  
 つぱりと着せて。チ、出来した〜と思ふばかり。さのみ浦山しいとも思は  
 す。大根〜の外には何んにも願ひ望みはない。ねつから取られはせぬ。又と  
 のやうな好色深ひ人でも向ふから美しいとふるう。鬘が来る。テモ美しいと  
 見たばつかり。あれはどこの娘じやとね。ち向ひても見ぬ。大根〜と今日に

追廻されて、ひとつも取られる事はない。きやうとひものじやうれがモウ下櫃に米が一ツばいも有やうになると。モウ何がほしいかい、ほしいあの島がよいの。此着物ではゆかれぬのだ。ホン／＼しかける。是じやによつて常が大事じや。心得ねばならぬ。此常の有難ひ事能ふ御合點なさりませ。或は腫物でも出来るか。時行病ひにくるしむ時はどのやうにいふぞ。どふぞ。此痛すこし助つたら何思ふぞい。ソレ常を願ふじやないか。どふぞ。今一度本服さして下さりませ。此くるしみを助つたら何思ふぞい。皆常を願ふ。夫がちつと本服してヤレ嬉しやといふがさいと。モウホン／＼する。此前米が二百五十匁した時の事を思ふて御らうじませ。諸々方々の大騒動やかましい事で有た。米屋は米を賣らず。酒屋は酒を賣らず。諸商賣ともしばらく商賣取引惣やすみ。ろの時は日本國中の人々が何を願ふたぞい。どふぞ。今一度安ひ米喰ふて死にたいと。木の芽や草の根まで尋廻りて皆なきの涙可愛ひとり娘を賣て喰ふやう。諸道具をかふるやう。あけても暮ても米の事はかり常はものもいわぬ。

小便取りまで申し作方はどふぞ。ざりますな。とねんごろに孫やつた在所の人が來たやうに。毎日／＼深切にどふぞ。ざる米の相場を一向しらぬ衆までが五穀成就／＼の願ひより外はなかつた。是で常の有難ひ事能ふ御知りなさりませ。此時世界中の人が米の有難ひ事を知り。御冥加を思ふやうになると。天地の御機嫌が直り。秋作も能ふ出來米が安ふなると。扱々有難といふたばつかりで。モウ何がほしいかい。ほしい。下櫃に米が一ばいになると。此米は悪くさい。嗅がするの菜がないと。めしが喰へぬのだ。ホン／＼しかける。早ふ忘れたものじや。施行の粥を貰いあるいた事はわすれて。緋ぢりめんて。髪結ふたり板しめの袖口を牛の舌のやうに。による／＼出して。ホソ／＼するは。あんまりじや。是が女中の事ばかりじやない。世界中の人が天地の融通の御施行で。今日まで命を繋いで來た事をいつまでも忘れまい。物覺へがなふて。氣の毒じや。極樂好きの極樂嫌らい。地獄嫌らいの地獄好き。といふものじや。何を呑したらよかるうぞ。序に御披露申ます。此間承りました。



結構な妙薬でござります毒虫に螫れたるに鳥賊の墨をつけると奇妙にな  
 をります。是は何んばもためして見た御方々がある鳥賊を料理する時すみ  
 の袋の破れぬやうに出してもらい糸でくくりて蔭干にして置く冬向干ひ  
 たらば唾にてうるねし付ればよし亦病犬に咬れたるにもよいといふ事  
 ござります。今一ツ妙薬やけのくすり。是は胡瓜をわろしてつければ早速  
 平愈す。是も久しく圍て置には胡瓜を小口切にして蓋茶碗の類に入れて  
 りを張て氣の脱ぬやうにして置けば水になる。其水を付れば忽ち平愈す。  
 なたも能ふ覺て置て御披露なされて下さりませ。扱此火傷に付て火宅の  
 なし。序に御断し申ませう。  
 先ッ今日の有難ひ事一ツ。身に立歸りて考て御らうじませ。一日ひもじ  
 いめ寒めしらす雨露にも濡す暮すといふは大休有難ひ事じやない。御代太  
 平の御恩此上に何か有。此有難ひ事しらす目が明くと何がほしいかいほ  
 しいと。ホン。くするは皆やけをしてゐるのじやうのやけが積りくして

火宅の苦るしみじやによつて日々のやけとの内に早ふ御直しなさるがよ  
 い。扱此断しは前方實に有。事じやといふて或知識に承りました。是は現在  
 無間の業といふて甚だ有難ひはなしでござります。下京邊に有。といふ事  
 で御座ります。嫁と姑と中の悪ひの世間に何んばも有事なれ。是はよつば  
 を珍らしい中の悪ひのじやといふて子供はあり去にも去れず。居にもゐら  
 れず。くるしみ通し日々の業が積りくしてます。中が悪ひ朝から晩まで  
 双方からの責あい。夫もへ二三日も親里へ去んで見ても二人の子供がかゝ  
 様。くど跡をしとあて泣さけぶ。子もへの闇に責られ戻りて見れば婆さま  
 に責られ盆も正月も節句も亥の子も休みなし。互に責つ責られつ。七月の十  
 六日でも爰の内は休みなし。火宅のくるしみ死ぬにも死なれず。とあもこ  
 ふも仕やうがないといふて。一二年の内に死にさうな婆様でもなし。世にい  
 ふ。是が金槌婆様といふのじや。世間に親殺しの主殺のといふ事のあるは前  
 世の敵同士の報ひのといふけ。とるのやうな事でもない。性は善也。悪ひと

いふ事は誰も知つてゐるけれど互に立歸る事が出来ぬのじや。夫もへ腹の中に日々塵埃が積りつゝてのハアスウ。其所を佛様は因縁とも因果ともいふ。聖人は天命といふて恐れてござる。みな善悪ともに因縁に寄といふて腹の中かられいでくしてまねき寄たのじや。是にによつて惡ひものには付合ぬやう。隨分心を清淨にして日々に新に戦々競々と恐れ慎むが子孫長久の御祈禱じや。扱此嫁は去ぬにも去なれず死ぬにも死なれず。どうもこうも仕様のないやうに成て來たソコデこわひものじや。婆さまを殺して仕廻ふ氣に成たばい様殺せば親子四人が助かる事と心を極めた恐しいものじやないか。飼畜犬に手を喰はるとは此事臣其君を弑し子其親を殺すといふも一朝一夕の事にあらず。くるしみに苦しみを重ね迷ひにまよひを重ね。無間地獄の底に落入ては壁の中の塗込れたやうなもので跡へも先さへも行がたし。是人の事じやあいなへ嫁姑ばかりの事じやないや。皆銘々腹の中にある事じや。ホン。が過ると色々様々の事が出来る。欠落分散心

中身投首く入り皆ふい。と出來心大事の事じや。心中する人の在所として別に一村あるものでもない。盜人の生ずる國として盜人ばかり仕込でゐる。國も有ものじやない。皆銘々腹の中ちつとかやつとか。持合せがある日々に新に慎しみがなないと。ツイふい。と出來心によつて常々心得ねばならぬ。嗜まねばならぬ。人の無ひ所へ這入ればどふやらに。小氣味がわるひ。是は業の持合のないのじや。夫も腹の中に少しでも業の持合があると。よい所へ來たと思ふ大事の事じや。今の間男殿も其通り夫の留主の所へ往たら。ツイ戻ればよい。女房もじだら。ちと火燵へ御當り。火燵にあつたばつかりで。命仕廻ふた。是が無間地獄の釜こげといふて。犬も喰やせぬ。あつたら事じや。互に業の積りつゝての事じや。嫁が姑を殺す氣に成たも。はじめわづかな事からじや。不返事が火宅のはじまり。

「よしの川其水上を尋れば葎の罪萩のした露  
はじめは纒の露しづくから。後には船さしても渡られぬ大川となるこわひ

事じや嫁は一途にどかす知らぬやうにして殺したいものど。色々工夫して念比な醫者殿の所へ往てどふ私に毒薬を下さるませ醫者どの聞て夫は大切な事じやがマア何にさつしやるぞ。ソコテ彼嫁がかやうくくくと一部始終のわけを打明した恥しい事ながら親子四人が助かる事でござります。どふぞ御慈悲に毒薬を下さるませといふ醫者殿も吐息つき夫はきのどくな事じやと暫く思案し成程心得ました。いかに毒薬進ませせうが然しわしがいふ事能お聞しやれ天命の生ある人を私事の恨を以て殺す時はうのかわりたるなれの身に報ふて子供が死るかこなたが氣違ひになるかせにやならぬ夫も氣の毒じやによつて三十日があいだこなたが行をせにやならぬが合點か。夫もむつかしい事じやあいたい婆様に一ト言も口答へする事ならぬたとへまた逆さまな無理を言はしやつてもたいあいくくと素直にしてちよつとでも腹立さす事ならぬ此三十日の内にこなた一生の孝行を取越て勤めねばならぬ夫が出来ふかハイハイイヤモウばく様さ

へ死で下さる事なら三十日はねるか。五十日が百日でも勤めませう。チ、よし、夫さへ出来れば氣遣ひはない。モウ今日去にしながら土産でも買て去んで機嫌取らしやれ。コレ何言はしやつてもアイくくく合點か假にも腹立さす事ならぬぞ。ハイハイ、異りましたといふて立別れ。切歸る道にては、ささまの御すきの御やきを買て冷ぬやう眞ぶところへ入てあたゝめ内へ歸るばく様内に待てござる。戻つたら何で滄ふくと思ふてござる所へ嫁はいつもと違ひにこくくして戻りて來た申ばく様只今歸りました。是はねみやでござります。あたゝかな内に御上りなさるませとさし出せば、婆さまこわひ顔して竹の皮包み引たくり。この賣買の高ひ時分澤山さうに錢かね遣ふてもらいますまい。此錢で大根葉でも買や明日晝の菜が有るに。エ、世帯しらすであるわいと呵れてもたいハイくくくばつかり本にもう御夜食あげる時分と茶もはんなりと入れて其片手に婆さまの御好の胡麻みる酒しをたつぶり遣ふてこしらへ。サア御上りなさるませ婆さまはぢる

く見て。コリヤ何んぞいの榮耀らしい喰ふてよくばこなれ参れ。こちらい  
 つもの通り香のものゝ刻たのでよごんすと膳棚からぐわつた。引出し  
 夜食喰ふて。又たばこ盆引よせくすべかける嫁は子供のめし仕廻ひ。ろく  
 片付ヶほんにば様一日そのやうにして御さつて御退屈にござりませう。  
 ちつと御肩さすつて上々ませうとぞろく撫廻る。チ、是何さつしやるぞ  
 いのうのやうにしてもらわいでも大事ごんせぬ嫁はハイくといふばつ  
 かり一言の口答もせず美しいものじや御明上ゲたり線香たてたり。婆さま  
 の着物疊んで子供寐させ片付廻り婆様モウ御やすみなさりませぬか御寐  
 間いたしませうといつちあたゝかお所へ蒲團敷て。サア御やすみなされま  
 せ。ばゝさまいのもといこう勝手が違て来てチ、あの人のわいのこちらいま  
 だ寐所してもらふほごにはごんせぬと蒲團引かぶりてころりと寐る嫁は  
 ハイくいふて裾押へたりたゝきつけたり枕もとへたばこ盆に火を入れ。  
 枕屏風引廻しちと御足さすりませう。イエくこちらどこへも歩行せず何

んにもだるい事ごんせぬ。ハイく高が三十日何んとなと口舌れのしやれ  
 追付鬼婆思ひ知れと心の内には思ふても表邊は随分大切にすも我身の  
 畏さじや扱翌日朝もどおから起き飯をしらへして奥から口まで奇麗に掃  
 出してば様モウ御起なりませぬか婆さまいつも寐所からやいゝるふ  
 て苛りかけるに今朝は寐過してびつくり目を明き嫁にせんを取られうこ  
 ら見廻しても何んにも言ふ事がない。夫でアイ今朝は頭痛がするけれど起  
 にやならん起ませうとぐすく起て手洗を遣ふ。うの間に嫁はちやんと飯  
 をしらへいつもの所へ座ぶとんしきたばこ盆に火鉢も直し場取りして待  
 ている婆さま手洗をつかひくも何不見出して言ふくと思ふても何に  
 もいふ事がない扱不拍子なものじや苦々しい顔してめしを喰ふ嫁は婆様  
 の給仕を仕廻ひ棚もとして髪を撫つけ申婆様私はちよつと妹の所へ往て  
 参りませう婆さま一ツ調子上てどふなど御勝手になさりませ。ハイくい  
 ふて嫁は又彼醫者殿の所へ往てきのふからの次第かやうくく。と委細

に物語すれば醫者との聞てうれでよし。扱薬をこしらへて置ました進  
 せさつしやれと奇麗な重箱にあん餅二三十斗入れて。此内に彼が仕込であ  
 る急に験の見ゆるやうにすると目立て悪ひ自然と病で死なしやつた様に  
 ない跡で小言が出来るさのふもいふ通り高で三十日の間じやはとに連  
 もの事に婆さまの足納さつしやるやうに力一ッばい心を盡し後て残念に  
 ないやうに随分に孝行にさつしやれ。コレ何言はしやつてもアイ〜  
 合點かハイ〜畏りました何から何迄いか御世話でござりますと重箱  
 提て立歸りば〜様只今歸りましたといふても婆様こわひ顔してうろ吹て  
 ござるば〜さまの顔が鬼のように見へ持てござるさせるが鉄棒の様に見  
 る。こゝが大事の所じやと手をつかへこれは妹の所からあなたに上ぐま  
 してくれといふてれこしましたらと御上りなさりませと指出す婆さまも  
 満更悪るふもないやう引よせて一ッ二ッ喰ふて跡は佛だんの下へ入れて  
 置く。嫁はサア仕てやつたと悦び夫から猶々心を盡し氣を付ケ其後は毎

日〜色を替へ品をかへて土産物に事よせ退屈さつしやる時分には酒の  
 酌して進せたり或は茶をはんなりとして餅を焼たり庭へ下りさつしやる  
 と草履を直し杖をあてがい腰をかへ。三度の御めしには何んなりと婆さ  
 まの好のものをこしらへ是もたんとすると氣に入らぬ也へ少しッ、こし  
 らへて機嫌を取り寐起には撫さすりハイ〜といふて介抱するもの  
 じやによつて。さしもの婆さまいつろやくたい。コレヤ何ん事じや此やうに  
 しられては何にも腹立る手が〜りが無い様に成て何んにも用がない仕や  
 う事なしに佛壇で佛さまばつかり滄りてござる看經しい〜もとふやら  
 此間から拍子が違ふてあじいな氣に成り。ハテ合點の行ぬアノ嫁には何ぞ  
 魔でも見入れてはいぬかと不審立ながらもためし見るに毎日毎夜のかい  
 ほう残る所もなく親切に氣を付て呉る也へとふやらわやくいふものは自  
 身ばつかりの様に成て來た。ソコテ婆様も尻ころばいやうでつく〜思案  
 し。ハテめんような事じやアノ如才のない氣ではあの人にも悪ひ事は

ないがどうしてこればあの人が憎ひずとるる。目が覺かけて本へ立歸りかける。サア爰が大事の所じや地獄の罪人も黒がねの帳の消る時節がある。是から成佛の段じや。此時婆さまの本心の光明が罪りと始て顯はれかけて。有難ひ事じやないか。愧備師胸にかけたる人形箱佛出うと鬼を出るふとまゝじや。嫁は一途に卅日の高がくゝりて有也へいよ。張込で孝行にする。婆さまはいよ。はづかしう成て。ハテ心得ぬあの嫁がどこが悪ひずとふ見ても。悪ひ事は少しもないのに。是まで何んで憎んだ事じや。ず能ふ思ふて見れば。いか様わしは大きな業人じや。末期の水を汲でもらふも。あの人より外にはない。其上可愛息子につれ添ふ大事の嫁を憎んだは何事ぞと。こりど了簡が入れ替た。有難ひものじや。ぞへ性は善也。人々己に貴きものを持合してゐるけれど。大事の御月さまを黒ん坊が隠した。向ふへばつかりホンくくして立歸る事しらぬは。皆黒ん坊の業じや。婆様の本心の光りが出て來ると能ふしたものじや。今度はうろく。婆様の方から嫁御の機嫌取て

ござる。是こなたも此寒ひのにちやつと仕廻ふて。早ふ火燧へ當らしやれいの嫁はハイ。わたしは何にも寒ひ事はござりませぬ。ねまへさまが寒ひ時分に御ひへなされたら。御持病が發りませう。婆さまがイヤ。わしは此間から大分心もちが能ふござる。案じて下さるなと嫁姑のむつまじさやうとひものじや。嫁の心はうろじや。けれど骸の勘が本真じやによつて。婆さまはた。して次第。に嫁がかわい。成て來た。夫からしわん坊の婆さまが自身の入れ物にたくり込で置たものを取出しては嫁にやつたり喰したり。正直なものじや。嫁は何いふても。ハイ。私は若ひ骸の事ねまへさま御不自由のないよふになされて下さりませ。イヤ。ろふじや。ござらぬ。年寄が物たくわへて何にしやう。ういのだと。婆様段々心持が面白成て來ると乗が來て。簞笥の引出しからも色々のものを取出し。是こなたの下着がきつう損じてある。是をマア着やしやれと。たしげもなくすつか。婆さま急に大氣にならしやつた。能ふしたものじや。心持さへ嬉しうなると。何んにも

欲はない皆心の事じやぞへ心さへ足納すれば直に極樂

「足納をするときせぬとの胸の中地獄もあれば極樂もあり

此比は婆さまの顔付がにこ〜と嬉しうふに成て来て嫁の顔色の悪

ひを察してコレこなれば此間からさつう顔色が悪ひのどこも悪ふはない

かや。今煩ふて下さると子供の難義は知れた事じやがたれば大躰迷惑な事

じやない。食事でも味じなくば何んなりともこしらへてませう程に随分

煩わぬやうにして下されやと眞實眞身我子の如く嫁が可愛成て後には田

もやろ畔もやろに成て来た扱つまらぬものは嫁じや胸算用がくわらりと

違ふて是はマア何んの事じやぞい。一向わけの分らぬ様に成て来た。ハテめ

んような事じや。あの婆さまには何んぞ取付てぬやせぬか知らぬ。あんまり

で合點が行ぬ。是までははへぬきの鬼ば、様のやうに思ふてゐたが。此比の

様子では世間にもよつばとまれな佛婆さまじや。アノば、様を殺るふとは

去とては勿躰ない。ヨウ罰が當らなんだ事じやと嫁御も又目が覺て来た。有

難ひものじや

「雲はれて後の光りと思ふなよもとより空に有明の月

「よいものを生れ付には持てゐれを皆ホソ〜にかすめ取らるゝ

是が能ふしたもので。初めは嫁の心の内には婆様を殺す氣なれど骸の行ひ

が孝行の仕業じやによつて婆様が佛にならしやつたものじや。是で能ふ御

合點なさりませ。口でどのやうに言ても心もどのやうに思ても骸に行はね

ば役に立ぬ。何でも身に勤めねば利益がない。朝夕たのがなす業が大事じや

「何事のれはしますか。はしらねども忝じけなさに涙こぼるゝ

此度は嫁御が本眞に目が覺て来て。コレヤこうしてゐる所ではないと直に

醫者殿の所へ走りて往た。申さふすば、様の死なしやれぬ薬を早ふ下さ

ませ。醫者殿聞て了ればさふも合點の行ぬ三十日請合の療治まだ廿日にも

ならぬにさふする了簡じやぞい。イエ〜〜さふのこふのはさざりま

せぬ。あの佛さまのやうな婆様を御恨申たは何んの事じやぞ。さふ先日か

らの御薬の消るやうな御薬を早ふ下さりませ。醫者殿様子を得と聞き。そんならこなた婆様を殺す氣はもふないか。勿体ない。何んのうろを申ませう。醫者殿涙をばら。と流し。出來さしやつた。能ふマア其心に成て下さつたのう。氣づかひさつしやんな。何にも毒は進せはせぬ。こなたの突詰た心から殺ろふとまで思ひ詰さつしやつたはよく。の事であるうが。然し双方に怪我のないやうに仕やうはないか。と色々工夫し。或知識に此事を尋たれば。それは一大事の事が出來ふもしれぬ。かやうにして見よと。差圖によつて其通りを進めました。が首尾ようまいりて。御互に御目出た。此末が大事じや。ほどに。随分大切に。孝行さつしやれと。たがいに悦び。心も解合て。其醫者殿とも。今に念比にせらる。よし承りました。此やうな恐しい事も有ものじや。しかし有難ひはなしでござります。此醫者殿が知識で有た。へ。両方に怪我がなかつた。ううない。と。どのやうな事が出來ふも。知れぬ。こわひ事じや。是で能ふ考て。御らうじませ。よい事はうそにして。も。極樂は本眞ま

た。惡ひ事はうろにしても。罪は遁れぬ。嫁姑の事ばかりじや。あ。皆銘々。身の上にも。此よ。うな事は。色品替て。何んばもある事じや。た。へ。向ふから。どのやうな無理非道を。持かけても。高が三十日の氣に成て。向ふの望の通りして。さへやれば。三十日か。くらぬ。内に。首尾よ。ふ。相濟ものじや。それを勤めても。見ず。に。どののこうの。小言ば。つかり。いふて。暇にあかして。苦るしむ。わ。つ。け。も。ない。事じや。又。どのやうにしても。中の直らぬのは。やつぱり。此方の腹の中の鬼の業じや。と。御明らめな。さつた。が。よい。此嫁御の如く。よい事は。うろにして。も。極樂は本眞となる。其。かわり。惡ひ事は。虚言にして。も。地獄は本眞じや。わた。し。は。う。ろ。に。盗み。いた。しま。した。心。には。さ。ら。盗。する。氣。は。ご。ざ。り。ま。せ。ぬ。と。どのやうに。いひ。わけ。しても。罪は。遁れ。ぬ。首は。こ。ろ。り。じ。や。に。よ。つ。て。此。眞。妄。の。二。ツ。を。能。明。ら。め。ね。ば。天。地。の。間。に。身。を。入。る。事。は。な。ら。ぬ。故。に。道。は。暫。く。も。離。べ。か。ら。ず。時。々。刻。々。に。心。を。用。ひ。ね。ば。い。つ。の。間。に。や。ら。無。間。の。業。が。積。り。く。て。氣も。つかず。目にも。見。へ。ぬ。と。い。つ。の。ま。に。ほ。こ。り。の。た。ま。る。袂。也。け。り。



うか／＼してゐる内に袂のくろが溜るわづか此手の出し入れに赤ひ袂のくろや黒ひ袂のくろや干才茶のたもとのくすやいろ／＼さま／＼。心中身投首く／＼りのくろが溜る。恐しい事じや無間の業とは此出る息引息に溜る。たもとのくろを吟味する事でござります。腹の中から本心が夫うろじやよしにせい／＼といふてぬれを何んとなと理屈を付けて骸の勝手の方へ引付るもへ色々様々の袂のくろとある去によつて離べきは道にあらすと

道二翁道話二編終

道二翁道話三編

天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。

天の命とは天の命令といふ事じや其天の命令の通りを身に行ふを性にし  
たがふといふ。此性といふは天より賦與して吾れ人稟得たる本心の事じや。  
譬ば天を大海の水にして見れば人の身は其大海の中に籠を幾つも並べた  
様なもので其籠の中の水も天籠の外の水も天なれど人の身に稟得た所で  
は其名を性といふ。うれで天が腹の中へ往來なざるを息といふ。うの息ある  
中を命としてゐる故一切萬物皆天の命にあらざる者はない。其命に率ふが  
道じや。道とは何ぞ。夏になれば暑ふなる冬になれば寒ふなる。誰が世話もせ  
ぬに冬の中から梅が咲く。春は櫻に桃柳。秋は楓が紅葉する。夜が明るとちう  
ちうかあ／＼。鳥は鳥の道。雀は雀の道。柿の木に柿が出来る。栗の木に栗が出  
来る。素直に口舌言はず。天命の性に率ふ。和合の道。うの道の通り勤て。少しも  
性に背くものはない。道は上下に明らかなり。世界中の鳥が夜が明ると起る。

せふしたもののじや。皆鳥の起たやうに思ふてゐるけれどねつから鳥の起る  
 のじやない。皆天命の性に率ふ道の通り。萬物一躰すこしも道に背くものは  
 ない。鶯が鳥の真似もせず。馬が牛の真似もせず。昔から柳は緑に花は紅の一  
 向宗。杜若のむらさきが。今年は千才茶に咲て見よふと。雑行した事もない。椿  
 の花の口紅が藍媚茶で笑ひもせぬ。女中が九能聞ふぞへ。春さき鳥が一番子  
 二番子と云て産むけれど。早産も取揚ケ婆もいらぬ。桃の花の咲も實の成も  
 世話入らず。一切萬物道は盡し切つてある。たい世話のかゝるは人じや。夫故  
 教によらにやならぬ。先ッ朝目の開たはせふしたもののぞ。不思議なものじや  
 ぞへ。ちつと不審打てごらうじませ。皆吾でに開たやうにねもふてゐる。じや  
 によつて。もちつと〜といふて辭義する。夫でも本心は正しいものもある。イ  
 ヤ〜起きにやならぬ〜といふを。私心の身勝手めがもちつともちつと  
 直切り小切りする。それで胸がもいやくやもいやくやするけれど。と〜と  
 私心めが本心をたゝき付けて。夫なりに又一寐入りやう〜と四ツ時分に

起きてア、今日は氣色が悪ひ。誰が氣色悪うしたのじや。悪ひといふと自身  
 モ知ツてゐるが。能う止めぬ。何ンと世話なものじやないか。それじやによ  
 つて教に依らにやならぬ。盗人も悪ひといふ事知ツてゐればこそ人に隠し  
 てしをる。うの悪ひと知りながら能う止めぬ。是を人面獸心といふ。形は人な  
 れど心は鳥けたものじや。といふ事じや。誰でも本心には悪ひといふ事能う  
 知りてゐるけれど。無理にしてゐる事が何ンばもある。みな生ながら心は畜  
 生道へ宿這入りしてゐるけれど。しらすにゐる。難義なものじや。あの鐘馗大  
 臣の繪に。其側に鬼が小サウなつてゐる。是が君子の腹の中じや。本心の鐘  
 馗大臣が正しいも。私心の鬼めがら。いさうなつてはい〜いふて這ひ屈  
 である。聖人でも君子でも。骸のある中は私心がなければならぬ。故に君子は  
 戦々競々と御慎みが厚ひ。日々新に劔を磨てござる。もゑ其劔の光に恐れ  
 て鬼めが小サウなつて頼出しする事がならぬ。また銘々共の腹の中は鬼め  
 が大キウ成て本心の鐘馗大臣が小サウ成てござる。其筈じや。ねつから劔を

磨といふ事がないもろすりこぎのやうなものじや何んばふり廻しても摺  
 子木じやによつてねつから恐怖はしれらぬッコデ鬼めが大キウ成てこれ  
 がくくといふて家内一ツばいに成て胡厄言ひ次第じや是がこれ天命  
 の性に率はずに人欲の私に率ふてゐるのじや今のもちつとくめが大將  
 に成り居ったのじや夜寐しなに風が吹く風呂の下の火の用心はど本心が  
 氣を付るを骸の私心めが不肖皮着てハテもうよいわいあで仕廻ふッコデ  
 寐入ても心が安堵せぬもろ夜がな夜日と火事の夢やら突落さるゝ夢やら  
 でれそはるゝ能ウしたもののじや道は天より稟得てゐるけれど其道の通り  
 せず性に背くもへ迷ひだらけ心こゝにあらざれば化ものが出たり幽霊  
 に取付れたり轆轤首に笑ひ殺されたり狸に陰囊かぶせられたり一家親類  
 の顔が白眼やうに見へたり世界中の人の顔が鬼のやうに見へて一生うる  
 たへ仕廻ひ難義なものじや惣て化ものに出逢ふたといふは其化ものは向  
 ふから見せるか此方から見るのか能ウ考て御らうじませ幽霊が火をふ

くやうに見ゆるはいつや向ひの内義が産の持でもりで死たのどころこ  
 の婆さまが頓痛で死にやつたの誰某が身投たの首縊たのといろくのも  
 のを腹の中に持合してゐるもへるれを引當に此方から算用して詠めてゐ  
 るのじや其やうなかしこい了簡を除て能ウみれば浴衣のかけてゐるが風  
 で動くのじや心こゝにあらざれば見れども見へず聞ども聞かず喰へども  
 其味ひを知らず向ふの了簡も知らずどういふたが濟ぬかういふたが聞ぬ  
 ぬど此方の算用ばツかりを當にしてばいくばやいてゐるのはみな化物  
 に出合ふたのじや能ウ氣をしづめてとつくりと向ふの人を能ウ見たがよ  
 い高で骸に着物のかけてある人がものいふてゐるのじや其外には火を吹  
 ものでも水を吹ものでもない皆此方の思惑ばツかりじや日月の須彌を遠  
 り給ふを人間は晝夜を敷へて年月をはかる一切萬物の一動一靜するを見  
 て實に生死のあるものとするは天の流行なる事をしらぬもへじや能ウ目  
 を覺して本性の究りなき所より見れば乾坤といへども鴉の巢を見るが如

しやッぱり浴衣のかけて有たのじや。丁ど雪隠なとへ往た時に風と壁の干  
 破た所を詠て見ると鬼の顔の様にも見へたり。又女の首のやうにも見へた  
 りするとがある。是が皆我腹の中にかねてれたにかはやをんなの首を持合  
 してゐる故。それを干破た所へ宛がうて詠てゐる。獨狂言の此作者はたれじ  
 や。能う吟味して御らうじませ。夏になれば風を悦び寒ふなれば頭巾を冠  
 る。此化物を捉へて見ればまぼろしのごとし  
 引よせて結べは柴のいほりにてとくれば本の野原也けり  
 何にも形のあるものじやない。森羅萬像皆幽霊じや。其證據にや陽氣は出ぬ。  
 夜の八ッ時分には皆消て仕廻ふ何にも執着ものでも。囃付ク物でもない。是  
 で能う御合點なさりませ。化物のといふも幽霊といふもみな我思惑ばつか  
 りじや。扱また轆轤首といふも考て御らうじませ。男の轆轤首といふはない  
 ものと見へる。兎角女には多ひものじや。寐てゐる間に何處までも首が延る。  
 こはひものじや。大坂の首が堺へ往たり。京の首が江戸へ往たり。長崎へ往た

り。其外國々在々へも首が往來する。恐しいものじや。年寄てはあまり見ぬも  
 のじや。けれど若ひ時はちよこく出合ふものじやは。とどなたも御用心  
 なさりませ。美しいびいどろのやうな顔にかねくる。とつけて人を見る  
 とにこくく笑ふと首筋もどからずつとしてふるひ付ク。さふすると。と  
 ふぞ一夜さあのと。うろろ髪とあけても暮てもあのと。うろろ髪く。と何の  
 事もかのと。忘れ果てたいぶらく。と立願ひじや。夫から後には親の事も  
 主人のとも。商賣の事も。夢中に成て。とうく。家も身上も笑らひ殺さる。首  
 の化もの。と。ふぞ一生の内にあはぬ様になさりませ。こわひものじや。と。扱  
 狸が陰囊引被せれると。真くら闇に成つて。跡へも先へも。行とならぬ。難義な  
 ものじや。此陰囊をかぶせられまいと思や。常く。心懸て用心せにや。ならぬ。  
 ろれば。どう用心するのなれば。もし借銭して。奢て。おやせぬ。か。藏の。うちの。簞  
 笥長持に。歩をかいては。ぬか。日合の。出る。金で。旦那。といはれてはい  
 ぬか。と。折く。吟味してみぬ。といつの間に。やら。と。いと。陰囊引かぶせれる。其

時は跡へも先へも行事ならぬ。立往生じや。算用なくにめつたにポンくす  
 ると。生ながらみな干物じや。これが本心知らぬ御かけ能ウ考て御ろうじま  
 せみな教じやわいな。一切教にあらざるものはない。身にたち歸りて見ると。  
 佛法毘毛じや。神道も儒道も。毘毛じや。あまり近みて見付ざりけり。善と悪ひ  
 は腹の中に能ウ知ッてゐる。悪ひと知らば直に止めたがよい。夫が神道。夫が  
 儒道。佛道。此外にみちはない。此道に由ぬが也へに悪ひと知りながら能ウ止  
 めぬ。盗は悪ひ事じやと知りながら能ウやめぬ。此盗といふと。盗人の事はつ  
 かりのやうに思ふてゐるが。間違ひじや。天命に背くは皆盗人でござります  
 ずへ。大江山の酒香童子も。羅生門の意張氣童子も。皆盗人の劫經たのじや。本  
 は同じ人なれど。なせ盗人といふなれば。先ッ一番にこの骸を盗たものじや。  
 天命の此骸で己が自由を働く故。盗人といふ。酒香では遊びくらし。商賣不精  
 で仕事嫌ひのらつぼの天上るくな事は思ひ付ぬ。酒香童子とは。酒香童子とい  
 いふとで。幾ッ何ッ十に成ッても。わけもない。子供のやうなものの故。童子とい

ふ。人に角のはへたのじや。角といふは。角のある人の事じや。年中丸裸で虎の  
 皮の禪してゐる。身の分限不相應の着物着るは。天地の禮服にあらざるもへ。  
 裸でゐるも同ナ。事じや。虎の皮の裸は。股ぐらばつかりに張込でゐる故。  
 身に災が絶ぬ。むかしは。此鬼めが山奥に住だけれど。今は大分町稼してゐる  
 は。邊に御油斷なされます。段々子をへり付て。鬼の卵子がかへりかける。又  
 此鬼の角の生か。り。邊なたも御ろじや。つた事があるかい。ないまこへ。出  
 して御めにかける。邊なたも近付に成て。置きさりませ。朝起しなにもちつと  
 く。いふたり。又人が呼んでも。返事せな。んだり。少と氣に入らぬ事があると  
 頬をふくらしたり。するは。みな鬼のありか。り。じや。此頬をれり。く。なで。御  
 覽じませ。此頬のかは。が強ふなると。皆鬼になりませ。ずへ。こわいものじや  
 ど。ふ。ず。此鬼の成人せぬ。内早ふ殺して。御仕廻ひ。破成が肝要じや。ううないど。  
 八萬四千の地獄を連て。歩行れる。一生が間胡亂にやならぬ。難義なものじや  
 此鬼を降伏するは。ど。おするが好。ず。或人明惠上人に問て。曰。佛法の大意如何

と尋たれば上人答て有べきやうと仰られた此六字の假字のうち一切の御經が備ッてある有難ひ御言葉じや天皇は天皇のあるべきやう武家は武家のあるべきやう百姓は百姓の有べきやう町人は町人のあるべきやう手代は手代のあるべきやう丁稚は丁稚のあるべきやう丁稚が丁稚の有べきやうにあいと中年からうろたへ出し仕舞は巾着切となる犬は犬の有べきやう猫は猫の有べきやう此あるべきやうにさへ在ば何にも教は入らぬ神道も儒道も入らぬ極樂も地獄もいらぬ天子のあるべきやうにないは殷の紂王夏の桀王天子のあるべきやうになかつた也へ萬民塗炭の苦み武將の有べきやうにないは平の清盛相摸入道天下を失ひ下萬民の歎き且那が且那の有べきやうにないは家内脩らず一家親類大騒動むかしの大合戦も有べきやうになかつた也へじや武士の有べきやうは楠正成青砥左衛門大石何某また士のあるべきやうにないが小野九太夫とやらいふて同ソナし家臣なれど是は又銘々家業士の道を忘れたい慾ばりて身の奢を極め主君の

恩義を捨て逃あるき末世末代の恥ざらし悲しいとじや此人は彼もちつとくの弟子に成たのじや生々世々地獄の釜焦わづかな樂みを期にして萬劫辛きくるしみを受る一切の書物一切の經文皆天命の性に率はしめん爲ばつかり有べきやうが三教の大意じや  
 日くのつくりし罪は塵埃南無あみだ佛は箒成けり  
 六根清淨内外清淨はらひ給へ清めたまへ日々に新たに又日に新たなりなむあみだ佛は箒なりけり夫に腹の中には汚ひものを入れてなむあみだ佛くどふ御助ケ下さりませと念佛申し阿彌陀様を眞顛倒直に地獄へ突落スのじや勿躰ないとしや不へ能ウ目を覺して御らうじませ  
 花は花紅葉は紅葉其儘に言はで教る我法のみち  
 夜が明ると今日が法の道生死の道天地のみちちうかあ猫のじや  
 犬のわんわん蟬のミイ蛙のギヤア瓦礫草木皆是大日所變じや大根か茄子迄みな御說法じや

騒しき峰の嵐や磯の波これみな法の御聲なりけり  
 法華經の心を知らば世中の賣買亦聲も法を説なり  
 朝から晩まで日々に新たより外に道はない神の道が人の道人の道が佛の  
 道君子其位に素して行ふ外を願わすきよろゝ他所見るとはない銘々の  
 受取前を勤めさへすればよい。

さしあたるけふのとのみ思へたいかねらぬ昨日知らぬあすの日  
 あしたはまた來やせぬたい今日の天命を大切に勤むるのじや君子に三ッ  
 の畏れあり天命を畏れ大人を畏れ聖人の言を畏る此天命とは何所の事じ  
 や天命といふ名を知つたばつかりみな干物の天命で役にたふぬびちゝ  
 活た天命を知らぬ腹の中に少しでも悪ひ事は悪ひと知り善事は善と知る  
 此やうな慥な天命を身に備へて居ながら地獄も極樂も向ふばつかりに見  
 てゐる向ふに用はないわいな教は皆我身に立かへるとじや又あんまり立  
 かへれゝいふと去年死た孫のとまで思ひ出してうちの坊が今年ゐれば

明て五ツア、可愛さうに惜ひと致ました今比はさいの川原で小石を集め  
 一ツ積では父戀し二ツ積では母戀しと積上げては鬼に崩され泣てゐるで  
 ある地蔵池をふす御助ケなされて下さりませと泣たり口説たり迷はぬ子  
 まで迷わするむかし和泉式部は小式部をさきだてし時に。  
 假に來て親にあだなる世をしれと教て歸る子は佛なり  
 と詠れたりこれでころ親も子も成佛じや。ア鬼はここにあるぞ是から吟  
 味して御覽じませみな腹の中にさいの川原も地蔵菩薩も建立してあるぞ。  
 泣たり笑ふたり白髪のはへた迷ひ老婆白髪のはへた迷ひ親仁迷ひ子が泣  
 きゝつかむ螢かな本覺眞如の高天が原といふ故郷明德佛性の本宅へ歸  
 る道筋を忘れながら泣きゝつかむ螢かな何がほしいかいほしい何を云  
 も金の事じや金がなければどふもならぬと道草ばつかりに日を暮すあつ  
 たら事じや皆天命の恐しい事を知らぬやへじや天地の間に天命の重ひ天  
 上があるけれど知らぬ人がある知りてがすくない天命の重ひ天上とは何

ンテ御法度を謹而可守事親の云ひ付主人の言付三千世界に天命の重ひ天  
上此上なし何を仰られてもあい〜と親の心に随ひ主人の心に随ふこれ  
が天命を恐るゝのじや則人の道じや。

あい〜と返事よければ昵じく心に不足あれば不返事

此大切な天命を聞損なふてゐる勿躰ない事じや二三度も呼して返事する  
其不返事は誰がいふなどねさへてゐたテ又何が不足ではらの中が強張て  
有たテあんまり結構過るもゑもつと我まゝに驕られぬといふて腹の立の  
じや御上の御觸は天の御辭大慈大悲の天命楚のべゝが着せとむあいどふ  
テ福の神にしてやらふとて御世話なさるもしらす何ソのかのどこいどば  
つかり己が欲深ふて商賈の暇な事は言はずと世間が詰ツたの詰らぬのと  
役にもたゝぬことばつかりいふてゐる皆不返事じやテ勿躰ない事じや爵  
が當りて不仕合になけりやならぬ君子は天命を恐れ上を上とし下を下と  
す堯舜の道は孝悌のみ此外に立身出世の道はない扱此天命〜といふに

大分間違ひのあるとじや茶碗を一ツ棚へ上ゲるにもやり放しにして置ッ也  
へちよつとさはりても落る直に破れるハア是も天命何の是が天命である  
放心したのじや夫にまた此やうに寐むたいも天命此様に酒の飲たいも是も  
天命じや惡所狂ひして酒を過し夜露に打れ永々濕を煩ひあげくに鼻がこ  
ろりハア是も天命仕廻には身上仕廻ふて扱をかぶり是も天命のやうな  
天命がどこにあるもので皆我まゝ氣まゝの天命じや此間の心中女は十九  
男は廿三ア、天命じやな暗らひものゝいふ事じや生れた時は天の丸無垢  
の人で有た御歴〜も我々も熊坂の長籠も生れた時はホギヤア〜熊坂  
じやとて鮎のやうに鳴もせまい皆仁義禮智の性を以ッてせずといふ事な  
し同ジじやゝ子でつふりてん〜やてうち〜あはゝ何ソにも替ツた事  
はない。

生れ子が次第〜に智慧づきて佛に遠く成テ悲しき  
子供の時から惡ひ遊びの友達六道したり穴市したり大口いふたり虚言い



ふたり悪友悪因縁に引張れて佛に遠く成す悲しきあつたらとじや。夫にまた人の能ウいふ事じや。あの子は生れつきに肝積がある。イヤ蟲のわざじやのと云。誰があた面倒な肝積蟲や。奢虫や。身投首絞まで添て生付る親が何所にあるもので。よい加減に迷ふて置たがよい。イヤ私は運の悪ひ生れ付キじやのど。分解もない事ばかりいふ。運の悪ひと言は。聖人の教に隨はぬは。運の悪ひ事は。ない。スツキリみな己が我まゝ氣まゝを親の所爲にして仕廻ふ。何ソと冥加ない事じやないか。此皆聖人の教を聞ぬ夷國の風俗なり。此夷國の余類のものが我國にもあるまいものでも。あいつといふて。神佛が教を立て御世話なさるのじや。學問の道他なし。其放心を求るのみ。放心とは我まゝ氣まゝさせぬやう育るのじや。子を育るといふても。犬や猫を育るやうに物喰して大キウさへしたらよいと思ひ。少しも教もるといふ事もなく。喰たがるものを喰し着たがるものを着せて坊よ幼よとねぶり廻すばかり。ソコです。ねたり。不忍かはいたり。するを大分知恵付きましたといふて。悦び横着な

事いふたり。友達とたゝき合なとするも。氣丈者といふて。譽そやす。半分は親御様が手傳ふて御苦勞に與るのがある。是等が夷國の余類の衆といふものじや。我神國ではかやうな事がいやさに。近來前訓を説て。子供衆の内から御進めなさる事じや。先入主となるといふて。幼少の時に覺たとは。善惡共に一生の主となる。大躰太切な事じや。あいつ骨が強張てからは。教が入にくひ。ころばぬ先キの杖じや。倒てからは。役に立ぬ家も潰れて仕舞てからは。役に立ぬ。つぶれぬ内から子孫長久の教が大事じや。是に付て。れどけ。斷がある。皆目覺しに聞て。れくれなされ。或所の子息殿が。商賣不情で。夜溜り。日溜り。酒飲たり。のらく。遊びくらし。親御は次第に年がよる。子息殿は次第に強ふなる。難義な者じや。父御は氣をいため。通し。寝ても。寝られず。寢所で。ぼつしりとひとり。言アノ。獄道めは。また戻らぬか。毎晩。外を家として。出あるき。何になる。積りじや。中。あれでは。我等が。よくする。どのやうな。めに。逢ふも。知れぬ。母御も。氣の。よく。是非もない。事じや。足本の。明ひ。内に。了簡を。極めず。ば。成ますまい。

と御夫婦相談して御座る所へ表の戸樞をさるゝと音がする御夫婦ながら  
 じつと寝た顔して御座れば子息殿は酒機嫌で鼻歌ふしひよるゝ足で父  
 御のつふりに蹠御赦されませといひつゝ段楷子へ上る中程で手で戴く眞  
 似して二階へ上る母御が是いまのを見やしやつたか父御がチ、知ッてゐ  
 るあれ程酒に酔てれるけれどそれが天窓に蹠き御也さりませと手で戴く  
 眞似して二階へ上りれたまら親の太切な事知らぬでもない母御が  
 さればいのあれが心に何とも思はねばアノ御赦るされませは出ぬ筈じや  
 明日でも急度あれが了簡の所を聞て見さつしやれど親の慈悲は有難ひ物  
 じやソコデ明日に成て子息殿は四ツ時分に起キ食喰ふて又出かける所を  
 父御がコリヤ用があると呼付ケ其様に外を家として出あるき仕廻ひはど  
 うする積りじやぢやいモウ勘當せざるまひと思案極と置たが併しゆふべ  
 二階へ上りしなにたれが天窓に蹠き御也さりませといふたが覺てゐるか  
 夫ならまらざら親の太切なと知らぬでも有まゝ其心なら向後志しを改め

ちつとは親の氣を痛めぬやう性根を入替よと呵り付れば子息殿聞てフウ  
 ンもふべ蹠たはれたまへの天窓で有たか夫なら大キナ間違ひじやわしは又  
 悪ふ心得て酒徳利かと思ふて戴ひたといふた此やうな大間違ひがある此  
 間違ひが世間に大分ある事じやなれがくゝといふてホソソソとするは  
 皆酒徳利戴ひてゐる林じや親御様の長壽は格別有難ひとも思はず家屋敷  
 から諸道具に辭義してゐるが何ソぼもある又女中方な内の上の潰れ  
 る事も構はず呉服屋の香具屋のと云ふに義理立て世間へばつかり氣を張  
 て御座るがある皆酒徳利に辭義してゐるのじや天命に背く大間違ひ是を  
 手細工の天命といふ誠の天命とは自然にして逃れぬ所の事じや帝王と生  
 るゝも天命則天の命令じや孔子も天命釋迦も天命百萬貫目持も拾萬貫目  
 持も天命武家と生るゝも天命町家と生るゝも天命此天命を私に移しかへ  
 る事はあらぬ併盗人ばかりは天命じやない證據がある人の知らぬ様に暗  
 がりでせにやならぬ暗がりでする事にろくな事はない世の妨となるか人

を害ふか。うのやうな天命はないけれを爰に一ッ不審がある。むかし唐土に盗跖と云て三千人の人欲の大將に成て。一生富有で歡樂に暮した大盗人がある。是は世間並の盗人と違ふて。大家小家を撰まず。其家の主人の行跡を兼て能聽合し。仁愛厚く。正しき人の家は目をかけず。たい貪欲にして。無慈悲なる人の家を目がけ。非義非道なる様子を見定め。大勢徒黨して。乱入り。金銀財寶を奪ひ取り。山林幽谷に引籠。其貯のある間は。樂しみ暮し。皆無になると。又不忠不孝の家を辱て。財寶を奪ひ取る大盗人じや。其替に心の正しき人の物は。箸隻も取りやせぬ。なせなれば。取られぬ。取る事がならぬ。心の正しき人の物。は天命の守りが強ひゆる。無理に取れば。忽ち天の網が下る。是が能立したもので。不義不道なる人のものは。取りよひなせなれば。貪欲の人といふものは。遅かれ。遠かれ。天命下りて。其家を破却する。其財寶なれば。甚取り易ひじや。どうでも。其道理を呑込で。した者やら。此盗跖は。一生無難で。歡樂に居して。終たといふ事じや。是を以て見れば。今日でも。道もない財寶を集る家には。いろ

いろさまざまの憂ひ災難が起りて。財寶をみな無にせにやならぬ。スリヤ今でも盗跖が徘徊すると見ゆる。此盗跖が住家は。何所ぞ。若腹の中に。屈でゐやせぬか。銘々吟味して見にや。ならぬ。大事のとじや。何ほ。一生歡樂に暮したとて。千載の後まで。盗跖の悪名は。運れぬ。何ソと悲しい事ではないか。よつて何時腹の中の盗跖が。飛び出やうも。知れぬ。油斷は。ならぬ。御互に用心せにや。なりませぬ。扱其外は。出家も。天命醫者も。天命。此方の仕業じやない。釋迦も。孔子も。天より性を稟得た證據にや。腹の中が。暖ひ。釋迦如來も。此あたゝかみが。あれば。こそ。五十年の說法。此あたゝかみの外に。說法もない。釋迦もない。萬物一躰。犬も。猫も。鼯も。鼠も。暖ひ。鳥も。鶯も。あたゝかひ。水中の魚。までも。冬向き水には。氷が張詰て。あれど。其中の魚の腹の中まで。あたゝかい。草木花咲き。秋實の。るも。暖みの御蔭。此暖みが。去ると。花も。實も。出來やせぬ。あたゝかみの。あの中は。人も。狐も。牛も。狸も。活てゐる。平等一枚。三千世界が。此あたゝかみを。心としてゐる。腹の中に。團炭はいけて。はないが。不思議なものじや。一佛一躰。二

佛はない此一物を儒道では性といふ道ともいふ佛家では無量壽とも名はさまざまに呼んで有れど何にも別の物じやない皆此あたゝかみ一物の事じや影も形も目も鼻も無い物なれど萬物一物の主一ツ以て之を貫く有難ひものじや此萬物一物を悪ふ心得て屎も味憎も一ツ躰じやと思ふは間違ひじや此一佛は清淨潔白にしてすこしも穢のない事が萬物の上に有ッて一ツ躰じやといふ事じやによつて一切萬物の形の上にうくる草木はをのがさまざま。春雨のわけてるれとはふらねども米屋にうけては米商賣酒やにうけては酒商賣紙屋にうけては紙商賣鳥にありてはかあ〜雀にありてはちう〜梅の木に梅が出来柿の木に柿が出来るもうくる草木はをのがさまざま。

岑の松谷のかしは木いかなれば同じ嵐に音かはるらん  
 嵐は平等一枚の嵐にかはりはなれどもまつにあたれば颯々の聲芽にあたればはら〜のをど波にあたればはら〜の音かせに色香はなれど

も。うくる所によつて音かはるらん其當つた所を因縁とも因果ともいふ。  
 白露の己が心をろのまゝに紅葉にをけばくればるの玉  
 蓮の葉に置ばもへぎの玉枯葉にをけばこげ茶の玉しら露に赤ふならふの。  
 白ふならふのといふ智恵才覺はないこれ天命に私のない事能ッ御合點  
 なさりませ。萬物一躰微塵も私心のない也へに三千世界が無心境界じや。  
 大哉乾元萬物資始と易に説れた其有さまを譬へて御話し申ませう此ま  
 へ京都四條の納涼で商人鑑といふからくりの見せ物が有ッた三四間程の  
 舞臺をこしらへ其上につらりと家をこしらへ人形をならべ米屋酒屋扇屋  
 鍛冶屋とてうど泡濬見舞のびん〜の人形のやうに臺の下で一本の眞木  
 を廻すど物〜の人形が一時に動く餅やの親仁が餅を搗米屋は米を踏酒  
 屋は酒を量る扇子屋は扇子をかち〜する煙草屋は煙草きる鍛冶屋はど  
 んでんかん〜する其大勢の人形が悉く動くからくり是が乾元萬物資始  
 といふ一躰の眞木一本の剛で三千世界が一切其まゝに一以て之を貫く無

心境界天命で生てゐる。此天命に率ふて見たり聞たり思ふたり知るといへども我思案分別で知るにもあらず。

難波津に咲や此花冬籠分別なしにさくや此はな

梅の花が咲くと鶯が来て啼く。こちには忘れてゐるけれど。山吹の花が咲き御替りも無ひかど見廻ひに見へる。さや豆の時分には生鏝がきて同じ鍋で契りを結ぶうまひものじや。これを深ひ因縁と云ふ。茄子が出来ると西瓜も出る。ななし時節に生れ合して顔見合す。是は多生の縁といふ。柿の木に柿が出来栗の木に栗が出来。鳥のかあ〜雀のちう〜。世界と一緒に夜が明たり。日が暮たり。萬物一躰ひとり狂言只氣ありて動くばかり。皆是天の御直細工じやうれゆる一休和尚の歌に。

風は息虚空は心日は眼海山かけて我身成けり

一切天の働であんまり自由自在が出来る故。ツイこれが見る。これが此耳で聞く。これがする。これがすると迷ひ付けた癖と云ふものじや。其迷ひ

を取てやらふと云ふ神道の教。佛道の教。何ノにも替つた事は無い。此外に教は無い。此道理をとつくりと合點すると腹一ツばい分別して。山ほど迷ふてゐる。其迷ひぐるめに迷ひたふても迷ひやうがない。十方世界森羅萬像無心境界に成て。此時始めて知る。天地と同根同性なるが故。五臓の神君安寧なりと目が覺る。何と天の所爲は大きなものじやあいか。けれども此天がツイハ見へにくい。ソコで眼貝に一ツばいほぼなとをどうのかうの〜ト小言いふてゐる。是を天にあはぬと云ふ。其小言の溜りが天地の間に納め所が無い。故朝から晩まで死人擔げ廻りて。どうせうぢいなく〜と相談に歩行のじや。是を譬へて見れば。一ツ本の真木の廻るに隨ふて動く。人形の糸に間違ひが来ると。其人形がぎつくりしやくりして働が無調法に成り。何所ぞ糸が切ると餅屋の親仁が餅を搗く〜ころりと顛倒る。米屋の男が米踏く〜ころりとこける。天の真木一本が廻ると。十方世界一切萬物。人間禽獸。江河の鱗類。草木まで。動きはたらくからくり也。天から〜じや。加賀の千世の發句に。

千なりや髪一すぢのこゝろより  
 此スウくの息が切れると此間まで張合してゐた人がもふべころり昨日  
 までもの言てゐた人が先程倒何ノと脆ひものじやないか皆御用心なさり  
 ませ何ノ時糸が切れふも知れぬぞへ。  
 財寶を蔵に積とも此息の引れぬ時は何となるべき  
 其内をれがくと我ばつかり立る人はどふでも内證の糸に間違ひが多ひ  
 也へ切れやうも早い無理に引切るのじや天が首を東のかたへ向かすつし  
 やるとどつこいと西向く天が手を向ふへ延さつしやるとうんなじやない  
 と引込める糸が切れる筈じや此身此まゝ天のまゝのものを我まゝにする  
 故間違が出来るじやによつて天命の此息に間違ひの出来ぬやう養生に無  
 理はないか商ひに無理はないか不忠不義不孝不悌には無かど日々に新た  
 に時々剋々に新たに吟味せにやならぬ元直は幽かなスウくで脆ひ物じ  
 や切れどまた二十貫目三十貫目の重荷を持運びするも此スウくの糸で

釣上げてあるのじや影も形も無ひ物なれど又強ひものじや夫で佛家では  
 金剛の性体とも云ふ此天の命にさへ率ふてゐれば一切萬物トント世話い  
 らず夫ぐに道はシヤンと備り切つてあるものじや。

草も木もをのが心と知れば只一ツに盡す道の廣さよ  
 禪正曰凡學問の師匠は日夜にあり四季の移代るに草木の緑枯葉の有さま  
 昨日はきのふの有さまを見て己れらが五體に及ぼして見るときは法界一  
 如にして悉く明らかなり此法界とは心の事じや心は天が鼻と口とから出  
 這入してござるゆる心に暗がりも明りもあい爰は君子も小人も同シ事  
 じやけれどもこゝろを明らめた人と明らめぬ人とは大分損得のある事じ  
 や夫を譬へて見れば暗がりて火も燃さずに説話するやうなもので淺黄や  
 ら萌黄やら扇子やら煙管やら見へ分らぬソリヤ口でいふても知れてある  
 けれど今一越不自由な所がある是が性に率ふと率はぬとの違ひじや先ツ  
 此性の尊ひ事を能ウ御合點被成ませ日月天に懸り行道なさるも性に率ふ

てござるのじや。天の五星廿八宿其外目に見ぬ微塵の如き星様までも皆  
性に率ふてござる。天地の間に性に率はぬもの何がある。此肉眼では見ぬ  
にくい。天眼を開いて見よ。日月より尊ひ所がある。日月にも親御様がある。其  
親御様がツイハ目には見ぬ。是が尊ひ天ン上じや。此尊ひ天上には無聲  
無臭。方所方角もなく。虚空と同シ。事じや。何ンにも影形はなけれど。ふしぎ  
なものじや。肴やが通れば。腥いと知り。太鼓が鳴れば。とんと知る。萬事に應じ  
て跡なし。もとの虚空で。あんにもない。死人にも目も耳もある。けれど。何ンに  
も見へぬ。とんくは聞ぬ。即今此やうに活ても。云ふてゐるものは何もの  
のじや。考て御覽じませ。是が直に天の性じや。此天のれもひが。三千世界一  
ツばい詰り切りて。あれば。ころ。夫を心として。此やうに動き働く。是を周遍法  
界といふ。何ンと大きな物じやないか。此上に何の不足がある。有リヤせま  
い。してみれば。モウ能イ加減に足納して。をれがくを離して。仕廻ふたがよ  
いじや。あるまひかい。此やうに云ふても。御まへがたやつぱり。一寸の虫に五

分の魂を能ウ忘れぬ。難義なものじや。みな幼少から覺込んだ癖と云ふも  
ので。是非もない事じや。能ウ考て御覽じませ。其割にして見ると。四十尋の鯨  
は二十尋の魂で。人は五尺の骸に二尺五寸の魂と云はにやならぬ。う  
れでは半身かなはぬ。中風病じや。魂が腹より上にあれば。腰から下は御留  
主。腹より下にあれば。臍から上は痿て。何にも役にたぬ。ぬ。心は其やうな小サ  
イものじやない。骸の百増倍有ても。間に合はぬ。三千世界外迄詰り切つてあ  
れば。ころ。長崎へ往ても。はたらかれる。江戸へ往ても。目も見へる。耳も聞ぬ。  
天地の外まで一ツばいの心なら。ころ。自由自在が出来たものじや。けれど。目  
には見へぬ。是が日月の親御様じや。此日月の親御様に御近付にしたいばつ  
かりで。名がたんと付てゐる。名は教の爲じや。萬や太郎兵衛様を。ここでござり  
ます。是から五軒め。ハイ。忝ナウ御座ります。ソレ名が無ければ。教られぬ。夫を  
名も無しに。わしが行く所は何所で。御座ります。ね。つから知れるものじや。な  
い。内へ去で。問ふて。とんせ。といふより。仕やうはない。教の爲の名じや。其名に

迷ふて迷惑する。誠の所に名は入らぬ。ソコデーッ休のうたに  
 釋迦といふ徒者が世に出て多くの人を迷はするかな  
 あんまり御釋迦様が御慈悲深ひ余りに。どふ予して此日月の親御様に近付  
 にしてやりたいと思召て。色々様々。物に譬へ名によるへて。教を御立なさ  
 れた。其教の名に迷ふて胡亂るものが多ひ。吉田の兼好八歳のとき。此名に疑  
 ひを起された。申シと。泡と。泡やか。泡の。泡か。泡は何ンといふへ。  
 祖父様祖母様と云わいの。うの祖父様祖母様の。と。様か。様は。あんと。いふ  
 へ。曾祖父様曾祖母様といふわいの。其曾祖父様曾祖母様の。と。様か。様は  
 何ンと云へ。されば鶴の孫と云故。鶴の祖父様鶴の祖母様と云わいの。其鶴の  
 祖父様鶴の。ば。様のと。様か。様は何ンと云へ。大方龜の祖父様龜の。ば。  
 様と云わいの。其龜の祖父様龜の祖母様の。と。様か。様は何といふへ。チ、  
 モウわの子わいの。わしは知らぬわいの。モウ名がない。名のある間は迷はれ  
 るけれど。名が無と迷ひたふても。どふも迷われぬ。うんなら。何も無ひものか

と思ひなさんすな。鶴の祖父様も。龜の祖母様も。皆出所がある。日月も。みな親  
 御様がある。此御方様には御名もなく。御形もない。夫もへ無念無心の本佛は  
 無形を以て體とする。不思議が體なり。思ひ議るべからずといふ。字じや。木像  
 畫像といふも。また形がある也へ世話が多ひ。火事の時。のけてやらねばな  
 らぬ。此また不思議の尊躰は。火に入つても。焼す。水に入つても。腐らぬ。墨壺に入  
 して置ても。黒ふも。ならぬ。砥かけても。薄ふも。ならぬ。何と云ふたもので。有ふ  
 な。能ウ考て御覽じませ。其姿の大サが。六十萬億那由多恒河沙由旬。兩眼四大  
 海水の如し。と。大キナ佛様じや。あんまり大キナで。目に懸らぬ。思慮分別も。と  
 どかぬ。不思議の尊躰。算盤にて。千萬年勘定しても。分量の知れぬ。大キナ佛な  
 れども。武の陰囊の中にも。芥子の粒のうちにも。一ツ盃に満て。うして。小サウ  
 も。ならぬ。祖父祖母の骸だに。有つても。皺も。よらず。娘や。子息の骸だにも。一ツ  
 盃つまつて。あれども。伽羅の油の匂ひも。せず。年も。よらず。若ふも。ならず。生れ  
 ぬ。故に。死も。せず。此佛と我々も。同い年なる。と。能ク合點すれば。神佛聖人も。



一切萬物銘々共も猫も猿も心としてゐる萬物一躰孔子の御心じやとてびいどろのやうにもない熊坂のこゝろじやとてマツ黒で團炭のやうにもない惡ひ事するは我勝手でするけれど腹の中に惡ひと知ッてゐるは此親御泡が御合點なされぬのじや。

愧儡師胸にかけたる人形箱佛出ろふと鬼を出ろふと

地獄餓鬼畜生あしゆら佛菩薩何にならふとまゝな一念

一休和尚小僧の時に或侍が地獄如何と尋ければこなた衆が夫を問ふて何にするぞちよこさいな人と持ッた扇子であたまをビシヤリと扣く侍こらへかねニツクイ小僧と反打かけるソレソレが地獄じや侍ソツト手をつき有難き御示しといへばソレソレが則極樂じやと仰られた何をこそふとまゝな一念じや即今の此一念が大事じや此ぶつゝ浮念じやとて何ソ見るか聞かせにや出来るものじやあゝ寒いとか暑いとか痛いとか増イとか腹が空たとか一念の物じや一念うかむとふつゝと消へ

消へするばつかり何ソにも跡も形も残るものじやないうれを段々珠數繋ぎにしてなぶりものにしてゐる惡ひ癖じやロモツト憎ひと一念浮ひとその跡からぞふしたらあいつがこまるであらうぞかふしたら難義して詫言に來るであらふかど向ふへばつかりホンゝ迷ふて行其跡から段々と消てゐるもしらずないもせぬからつばの珠數繋ぎの念に絡ひつかれてハアスウゝ是を自細自縛といふたはいもない事じや一念迷へば獄卒鉄杖を振揚る一念了解ば聖衆蓮臺を傾ふくと云ふて三世の諸佛が禮拜なさる一念開くとは念を捨て我身に立かへる事じや何ソにも六ツケ敷事はないたんなうするばつかり

何見ても何を聞ても有難や此御佛の有ん限は

麥の出来るも米の出来るも雨の降るのも風の吹くのも東から御日様の出さつしやるもちうゝかあゝも大根ゝ茄子ゝも時の鐘の聲も我たつた一人への御馳走と足納して見れば誠に胸の極樂世界じや

足納をするとせぬとの胸の中地獄も有ば極樂もあり

有難や我本尊を開くれば森羅萬像彌陀の至鉢

一切萬物たつた獨への御勅勞と足納してみれば向ふから無理いふて來るの迄有難なる此様に無理な事言ふたりしたりすれば人が憎むは邊にかならず無理なさすな御まへの身代りにわしが憎まれて進ませますといふのじや、扱々有難ひと御禮申さにやならぬ能う御心得被成ませわしは御まへの身代に命を捨て御異見申すのじや程に随分御慎被成ませとの御教化此身代の御光明は拜みにくひ所じやけれぞ能う合點して御覽じませ心中身扱首く入りまで皆我身代に命を捨て御助ヶ下さる御恩徳扱もく有難や、忝けなやと足納したとて誰も呵るものはない此心が即佛といふことで心と佛と衆生と此三ツに差別はない同ニ事じやといふてござれぞイエく  
く所詮我等風情中々及び絶た事じやとちやんと門入れてゐる夫でも佛様は氣が長ひ夫其心を身に立歸りて見よ其儘直に佛じやわいやいといふ

てござれぞ片意地ものイエくく私どもがやうな凡夫何ンとしてくどめつた無性に辞義して逡廻る其筈じやホンくが出来ぬによつて其癖かげではハアスウくばつかりじやよつて

何見ても何を聞てもなさけなやたい煩腦に身を任す故

何がほしいかほしい人の役じやないぞへたい今日の天命の性に率ふて善心を起して見たがよい有難ひ事ばつかりじや雨露にも濡す一日空腹め寒ひめしらす此上に何があるぞ玉樓金殿も寐た時は一枚敷百千萬石の御殿様でも千石萬石も上られぬ御腹に一ツばいじやスリヤ銘々共も同ニ事じや何にもかわつた事はない萬貫目持の御隠居様が佛壇に向ひ有難ひと思し召一念も銘々共が有難ひと足納した一念も有難ひに二ツはない御姫様の有難ひのじやとて梅花の匂ひもせず乞食老婆の有難ひのじやとて砂まふれに成てもないたい有難ひ中からでなければ善心は起らぬ身に立歸て御覽じませ大鉢果報を身の上じやない扱日月の親御様に名のたんと

ある事は皆教の爲じや。是も序にたとへて申ませう。私が名は道二と申します。此道二と云ふは通名で、其道々から呼ぶ時は色々様々の名が付てある。先づ私が悴から呼ぶときは、私を親仁様といふ名がある。女房からは夫といふ。又こちらの人もいふ。親の道からは私を悴と云。兄からは弟といひ。弟からは兄貴くといふ。君の道からは臣といひ。家來からは主君といふ。道といふ名は惣名で、うれぐの道からは色々と名がかはる。吾れ人固有の本心を、金剛にたとへた所からは、金剛經と云ふ。目には色を視、耳には音を聞く方からは、觀音とも、普門品とも云ひ、蓮華に譬て説ときは、妙法蓮華と云ふ。又は彌陀と名をかへ、其道くからいふ時は、此經より外に尊ひものはないと云ふてある。其筈じや。たつた一ツで同ジに代物じや。扱此經と云ふは、常といふことで、常とはとつとむかしの聖人や、佛菩薩の教置し言も、また是から後の世に聖人佛菩薩が出さしやつて説かれても、今ある御經や、四書五經に少しもかはらぬ。どの様な聖人佛が出て説ふとも、親に不孝にせよ。主人に不

忠せよとは、教へぬ諸の悪を作るな。衆善を行へと説給ふが、諸佛の通戒なり。みな三教共に本心に率ひ、五倫の道を勤め行ふの教なり。是が萬古不易常住の御經なり。然れども御經いへば六ツかしく聞えにくい。こゝに無上靈寶甚深微妙無類飛切の御經がある。うしてちんぶんかんの聞にくい事ではない。讀さへすれば分解も知れ、忽に御利益がある。殿方様へも私が授けませう。能ク持なされ。

一 親子兄弟夫婦を始め、諸親類に親しく、下人等に至るまで、これを憐むべし。主人ある輩は、各々其奉公に精を出すべき事。  
是即今日の天命。此外に人の道はない。尊ひ天上じや、何ソと經は尊ひものじやないか。此有難さを身に立かへりて知るのじや。聖人神佛の教も、皆心の譬喩。八千余巻も一切の書物も、性のたとへうれで、何の如し、彼のごとし。此如し。此如しと云ふは、譬喩といふ事じや。誠の事は口で言れぬ。文字に書れぬ。蓮師の歌に。

法華經は寐亂髮にさも似たりとくにとかれずいふにいはれず  
 口で言ふとモウ違ふ砂糖を舐れば甘い蕃椒喰へば辛い事知らぬ人  
 が問ふてござる申シとうがらしのからみとんものでござります。ハイと  
 うがらしの辛みとうも口では言れぬが辛ひをたとへてみれば舌がびりび  
 りするやうなソレ知らぬ人には譬て言ふて聞すより外にしやうはない夫  
 で辛は舌がびりびりすると思てゐる又外の人に問て見る申シ蕃椒の辛味  
 とんなものじやへされば蕃椒喰て辛ひは頭がくわつくとして涙がこぼ  
 れるやうなソレデ辛ひは頭がくわつくとすると思ひ又舌がびりびりす  
 ると思ひとちらが本真じやないなハテめんようなど迷ひ出すソレ口で言  
 へばモウちがふ人に問ては間にあはぬ佛様の説法も其様なもので色々様  
 々を譬てゐる其譬に取付名に迷ひ形に迷ふてうろく迷惑する其人に蕃  
 椒喰すと直に知れる成程からいは此事じやと得心する本心知るも其通で  
 喰て見ねば本真の味ひが知れぬ夫を喰ても見ずにとうのこうのく小言

ばつかりいふてゐるびりびりとくわつくと迷ふてゐるのじや誰でも骸  
 の片付は知ッてゐる焼けば灰埋めば土知れた事じやけれを肝心の片付が  
 知れぬじやによつて骸が邪魔に成てみな難義するとんふ一ッは知ッて  
 御覽じませ是が錢金のいと云ふ事ではなし本心を御知り被成た御方が  
 能々善い事ならこう手間暇闕て此やうに御世話あさる事じや程に是ばつ  
 かりは知ッて置たがよい何にも六ツヶ敷事じやない我に我のない事を知  
 るのじや是が人の腹の中を知るのではなし我手に我腹の中を吟味するの  
 じやとつくりと腹の中を僉議して見ると本心と私心とふたつあるやうで  
 甚だ紛しいものじや此わからぬあいだを天邪子といふて山へ行ふと云ふ  
 と海へ行ふと云ふ川へ行ふと云へば里へ行ふといふてうろつかしをる天  
 を邪に見てゐる故天のよこしまのこといふ一家親類知音の中に貧窮で難  
 儀な人を少々づ見つき施し救はんとすればよしにしたがよい其様にし  
 ては節季がつまらぬ第一癖に成てゐるいといふてねさへる如何さまこれ

は尤な事じや。随分始末して物のいらぬやうに家内を見集め治めねばならぬとれもへば。氣がつまつてたまるものじやない。折には酒も飲。芝居も見たり。遊山にも行。氣を養ねば病が起る。命有ての浮世じや。たとひ錢金が出来たとして世間で乞食のやうにいはれて。生てゐる甲斐もない事じやないか。イヤそふではない。世間からどのやうに言たとして貧乏の足しにはならず。兎角錢金さへ出来たら。何時顔を張ふとまゝじやと。腹の中のせり合ひ。両方あがら。尤らしい様にもあり。どちらが本真じや。どんと分らぬ。與勘平じや。我がれれが己が我がど。化され通しじや。芝居でする。與勘平は。狐でも忠義ものじや。けれと。銘く。どものは人欲の與勘平じや。によつてたましぬさける。びりびりで御座ります。のくわつく。でござります。何にもしらぬが。虚空じや。の天斗で我はないのど。しやべりぬさける。口松じや。難義なものじや。本心の與勘平はもの言はず。何ンにも言やせぬ。しらんかして。おほうのやうに見ゆれと。衆理を具て。萬事に應ずるも。るねつから。世話いらす。ソコデ人欲の與勘

平に。どんと用がないやうに成てくる。何の間にやら。じみく。と消て仕廻ふ。うする。と本心の與勘平ばかりに成て。今日我身に備たる。道が太切に成て。主人や親が有難く。銘々の宗旨く。は尙有難ひ事が知れて。來ると。庭のうへも。足納して。我家業が。大事になり。彌子孫長久の御祈禱じや。結構なものじや。や。へ。人は此ホンく。さへ止むと。ハアスウく。もないやうになり。大酒飲たり。勝負事したりする。事が。役に立ぬといふ。事が知れる。大躰有難ひものじやない。此又勝負事は。さする人がある。せにかねたんと。持ながら。倍坊の。棟の實慈悲も。情も。知らぬ。石部金吉かな。さいぼうと云ふ人があるものじや。其やうな。小人に。錢金たんと。持すと。欲に。欲を。積累ね。埒もないと。れも。ひつひて。賣げ買。世界の。咽じめ。夫から。首絞と。種々無量の。難義が。出來る。金硝目に入ッて。隙をなすと。て。金ほと。よきものは。なけれども。金の粉が。目に。いと。盲目になる。小人の。金持は。金が。却て。毒と。成る。

欲深き人の心と降雪は積るにつけて道を忘るゝ

足るを知る心こそ寶船物の敷く積置す共  
 夫を敷く積貯たがるも何と云ふも金の事じや金が無ければおもな  
 らぬと。ハアスウく。皆肝症だちの病と成て人のするほどのことが氣  
 にいらぬ。うういふ立煩ひは本復が出来難ひ。町家でも百姓でも少く  
 が有ると天にも地にもないやうに思ふてめつたに高ぶりに己は金持じや傍  
 寄くと言てあるきたひ。れかしい病じや。どのやうにしたとて町人は町人  
 じや。鍋錢でも文錢でも一文に斗通用は出来ぬ。愚人夏の虫飛で火に入る火  
 宅の苦しみ皆ホンくが過る故。頓死頓病。欠落身なげ。首く入りも心中もみ  
 な心が暗ひからじや。  
 暗きより暗き道に予入ぬべし。遙に照せ山端の月  
 古への明德を天下に明かにせんと思ふならば。先本心を知るべし。知るとを  
 致せば。意が誠になる。意が誠になると。人と和合の道が調ふ。和合さへすりや。  
 家内安全子孫長久。此外に教は入らぬ。天下泰平の外は學問も入らぬ。

心だに誠の道にかなひなば祈すとも家内安全  
 子孫長久の學問じや。天下泰平の外に誠はない。誠は人の心なり。誠の外に人  
 はない。虚言は我身を調伏してゐるのじや。金銀財寶たからとするに足らず。  
 楚國には寶とするとなし。惟善もつて寶とす。  
 さまぐの教はわれと惡を止め善をするより外に道なし  
 善をするとは別にたくんでする善は役にたぬ。たぬ今日己れくが道  
 を全ふ勸めてゐるが善を行ふてゐるのじや。  
 道といふ詞に迷ふとあかれ朝夕をのが爲業と知れ  
 夫をみな名に迷ひ形に迷ひ。所書ばかり讀て。向ふへは行すに。子曰。何屋何兵  
 備く。何の益もない事じや。一切の經文一切の書物は。我本心を知る所書じ  
 や。明德を明らかにせんが爲の楷梯じや。屋宇へ昇るに楷梯でなければ昇ら  
 れぬ。屋宇へ昇れば楷梯はモウいらぬ。夫に屋宇の上で長ひ楷梯をぶらぶ  
 らふり廻して。あふない事じや。怪我人が出来ると言ふも聞ず。鼻ばかりたか

ふして。子曰。何屋何兵備。所書ばかり讀でゐるうのかたはきでは釋迦如来が強ひの阿彌陀様が勝じやのと。自慢するを。神道者は聞て。あら勿躰なや。我神國を汚す夷狄の法。拂ひ給へ清めて給へと鈴振立る。又一方では。法華は箒でたゝかれる。門徒は門を鎖められた。浄土は錠をねるされた。名ばかりでせり合してゐる。肝心の本家はきよるりとしてござるに。何の争ひじや。わけが知れぬ。

さつぱりと埒の明たる世中に埒を明ぬは迷ひ成けり

役にもたゝぬ論を止めて。たい今日の天命を太切に勤め行ふが性に率ふ之を道と謂ふ。或書に。神道の正直を以て。佛の戒行を保たば。儒の五倫五常は守てゐるといふものなり。

道二翁道話三編終

道二翁道話四編

莫見乎隱。莫顯乎微。故君子慎其獨也。中庸第一章ニ

すべて物事隠す事は。早う知れるものはない。うの中悪い事は。はやう知れる。悪事千里といふて。忽知れる。こわひものじや。和泉式部の歌「春の夜の闇は。あやなし。梅の花色。こゝろ見ぬ。ね香やはかくる。此香やは隠るゝとは。こちには。知らず。にゐても。何の香。かの匂ひと。香が来る。くといふ事。じや。是をたどへて。嘶しませふ。少し尾籠なは。なしなれど。堪忍して。聞なされ。或茶屋の座敷で。客が。ねやま。と火燵に當りて。遊んでゐる。時に。氣の毒な事。じや。出ものはれもの。所きは。はずとて。ね山が。放屁を。すつとした。其く。せ音の。せぬの。じや。によつて。ひさい。ね山も。はつと思ふ。たけ。さすが。勤な。す身じや。鏡袋。から。伽羅を。出して。うつと。薫て。まぎら。かさ。んとする。其側。にゐる。座頭。が。鼻を。ひこく。して。申。せ。こ。ろ。此。邊。に。木。薬。屋。は。御。ざ。り。ま。せ。ぬ。か。へ。ね。山。が。何。と。し。た。へ。座。頭。が。ハ。イ。ど。ふ。や。ら。木。薬。屋。に。糞。取。や。う。な。嗅。が。い。た。し。ま。す。と。い。ふ。た。天。地

は明らかかなものじや尻を放ば尻の匂ひ沈香は沈香の匂ひと香が来て説法  
 する何と明らかかなものじやないか隠れたるより顯かなるはなし隠す事は  
 ならぬ是じやによつて腹の中に埃を溜て置すとどなたも早ふ懺悔して御  
 仕廻なされ懺悔とは腹の中の洗濯悪人も首切れて仕廻へば罪が亡びて成  
 佛する埒の明たものじや飯喰ふ跡の柵本仕廻ふやうな事してゐるのじや  
 去によつて君子の腹の中は日々に新に掃除がよいので清浄な此君子の腹  
 の中をたどへて見れば清浄な白紙のやうなもので其白紙にちよつと兎の  
 毛の先ほども墨が付と忽顯れ見ゆる明らかかなものじや又銘々其の腹の  
 中は第一不掃除で日々の埃が溜り牛部屋か馬部屋のやうに成てゐるソコ  
 デ猫の尿やら鼯の尿やら積上て有けれど大槩な埃が有ても格別自立もせ  
 ず。でもくとも穢とも思はず。夫が常と成て暮してゐる是が本心のあるじが  
 ない也へ明屋同前詰らぬものじや。「いかなども仕やうのないは佛なき堂  
 へ参た心地ありけり近所から塵埃捨に来る子供が逢合傘書たり。べかこ書

たりして犬までが雪隠にする「つれづれ草に主なき家にはきつね泉やう  
 のもの所得顔に住なれて。こたまなんどけしからぬ事も出ると何事が起  
 おやらしれぬこはひものじや。滄浪の水清らばもつて我纒を洗ひ濁らばもつ  
 て我足をあらはんと。在郷の子供が謠ふを孔子が御聞なされて。小子是聞水  
 が濁らば足をあらひ。清は冠の緒を洗ふ自ら取之と御示しあされた。何んと  
 有難ひ事じやないか。本心好の所へは寄來るものが道の咄ばかりする。誹  
 諧すきの所へは誹かいの嘶しばつかり。淨留理好キの所へは寄たがるもの  
 が淨留理の事や芝居のはなし。ばつかりして皆此方の腹の中のもの。が寄た  
 がる。能うしたもののじや。瀬戸門の奇麗に掃てゐる所へは。めつたに犬が小便  
 もするものじやない。又じだらくで不掃除な所へは。色々さまぐの塵埃捨  
 に来る。夏向飯がくさると虫が涌。アレモ飯のわるおならぬさきに。どころに  
 飯のくさるのはいないか。ど虫が涌て待てるものでもない。是で能う御合點な  
 され。わざはひも災難も外から來やせぬ。皆腹の中から御出くして招きよ



せ九のじや。權兵衛悪いやつ。おふべ能寝てゐるものを。能い智亡市があるこ  
いといふてつれて。おき兼むたいめして。ころりと一貫。今日はいつを野怪じ  
や。休にして芝居見に行。悪いやつじやと。向おばつかり恨んでゐる。向ふの悪  
ひのじやない。此方の腹の中に智亡市を持合してゐる。おへ御出くした事  
は。しらすに。權兵衛。ばつかり悪ものにしてゐる。是が腹の中に智亡市のない。  
正しい人の所へ。今夕ちよばい。ちがござります。御苦勞ながら。御出席下さり  
ませと。おふまわ偽はづかしい。言て往かれるもので。皆腹の中の事じや。へ。  
又女中方なと。鏡に向ひ身仕廻ひなさる。鏡に用はない。皆此方の用事ばつか  
り。鬚は。おがみは。せぬか。白粉は。まだらにないか。と。夫を吟味するのじや。ソレ  
みな。此方の用事で。有ふが。な。神佛に向ふても。ろの通り。向ふに用はない。此方  
の心に。不淨な事はないか。不忠不孝は。あいか。商賣に。無理はないか。人に。難儀  
を。させて。はいぬか。子孫。断絶するやうな事をして。はいぬか。と。我心身を。神前  
の御鏡に向ひ。に。こくすれば。に。こくする。こは。ひ顔すれば。こは。ひ顔が。う

つる。鏡は。神の中略にて。中の我を取れば。則神じや。我正直の心を。うつして。ど  
ふ。今。日。人の。道を。間違さぬやう。親類縁者と。恨を。結んで。はいぬか。家來を。む  
どうして。はいぬか。節季に。不足。錢拂ふて。はいぬか。悪銀を。よい銀にして。遣ふ  
て。はいぬか。と。腹の中を。吟味して。不淨な心を。袪ひ。給へ。清め。給へ。と。鏡に移し  
て。改め。慎しまば。祈らす。と。ても。家内。安全。息災。延命。子孫。長久の。御祈禱じや。銘  
々。おもの。やうな。小人は。此裏。道から。向ふ。ばつかり。期にして。おふ。ず。此。たびの  
買物。利潤。得。さして。下さりませ。おふ。ず。上の。町の。ね。源を。女房に。持して。下さり  
ませ。と。神佛を。媒か。取上。婆の。やうに。思ふて。ゐる。暗いものじや。夫じや。によつ  
て。主人の。ものを。私して。は。おふ。ず。知れませぬやう。千貫。目もある。所から。私を  
跡取りに。所望。致。しますやうな。所は。ござりませぬか。扱私。は大分。借錢が。ござ  
ります。と。おふ。ず。催足。致。します。おふ。ず。御守り。なさり。下さりませ。いつ。先の人  
が。死。たら。猶。勝手。で。御。ざります。と。目を。明て。隠て。ゐる。やうな。ものじや。暗いも  
のじや。今日。の。天道。には。恐れ。ず。書。出し。と。掛。乞に。廻。廻る。臆病者。不忠不孝の。借

錢は土に成ても水に成ても償はにやならぬ。けれど夫ぐるめに抜ひ給へ清めたまへ。其外様々の願ひ事何もかも一緒に打込でいつろ一束にして諸願成就。あんまりあつかましい。コリヤあなれた方の事じやない。皆私が腹の中の懺悔じや私に若いときから大不行でこんな事ばかりいふて神佛をさぶりものにしてたりました。勿躰ない事じや。今でも其やうな鬼めが腹の中にうるくして居ります。折々降伏するので御ざります。其相伴じやと思ふて御聞なされて下さりませ。夫なら神佛は寄願を叶へさつしやれぬものかと思ふが中々うした事じやない。

「千早振神も願ひのあるもへに人の値偶に逢ふぞうれしき」  
此神も願ひのあるもへとはどふじや。神佛は一切衆生の願ひがかなへてやりどふてくどふもならぬ。夫が神佛のねがひじや。此方に信心さへあれば何でも叶へて下さる信心とは我心身を誠にするのじや。けれど誠がない。皆うろの願ひじや。

「祈りても験なきころしるしなれ人の心にまことなければ」  
た。此方に誠がない。願をかけたら願をかけたどふりに。此方の心も骸も願の通り勤るのじや。身に勤めにや役にたぬ。立身出世がしたくば。主人大事親大事。是ばつかりでもふよい立身出世するのに違ひはない。家内安全も商賈繁昌も子孫長久も籠りてある。たい此身に勤め行ひさへすりや。何でも成就するに違ひはない。此やうにいふと又親御のない御方が我等はどふせふ。孝行の仕どころがないと思ふてござるが。うふじやない。親子は一世といふて。天地あらん限り心が一世じや。さるによつて此身が直に親御様大事にかけよ。父母の御遺躰じや。和論語に藤の朝綱の曰双親むなしといへども。我身則に父母の遺躰なれば事々物々父母の行ひにて。茶を飲もめしを喰ふも。父母の御行跡なれば。一言一行も欺く事なし。故に我常に一息のあいだも。我心にする事なしとあり。大躰大切にせにやならぬといへば。又早合點の御方が有て。成はさうじや。此身が直に親父様じやによつて。わしが酒を飲たいと

思ふが直に親父様の思召じや。是を上ますが孝行じやといふては香。此やうに仕事の仕とむないは御両親の御退屈なさつたのじや。といふては休み。又博奕が打たいと思ふ。是則父母の遺骸なれば直に博奕を打が孝行じやと思ふてござる御方もあるものじや。夫では仕廻に扱かぶりて野倒死せにやならぬ。大事の親御様方に扱かぶらすを孝行とはいはぬ。身體髪膚これを父母に受取て毀ひ傷らざるを孝行の始めといふ身を立て道を行ひ。名を後世に揚て以て父母を顯すは孝の終也。夫に扱かぶりてたまるものか。此間違があるものじや。親を大切にするといふ。漸に付て或所の親御様が晝寢してござる。其鼻の端に蚊が留りてゐる息子。腹是を見て大きに腹を立て。大事の親父様の鼻を喰ふ盗賊め。側なる割木を以てびしやりとたく。蚊は逃て親御様の鼻ばしらをたたく。碎てのけた。ちちもなにもにして仕廻ふた。此やうな事がある事ではなければ。面白い。嘶しじや。世界の難儀といふは此やうな事から始る。よひ事で悪い事でも。一遍に片よる時は。みなこんなものに成

て仕廻ふ。むかふに期こしらへても。とめてする事は。役に立ぬ。人にもものを施せば。其身の功德に成と聞て。盗しても。施したれば。功德になるやうに思ふ。心得違ひが出来る。こはひものじや。教によらにやならぬ。うふない。と買物は。無理に直切賣物は。高利を貪り。人の汗あぶらを。あつめて。家内を養ひ。大きな顔して。年忌法事勤むるは。皆親先祖の鼻ばしらを。たたく。きく。だいてゐるのじや。予へ。去によつて。此體に。少しでも。不實な事があると。直に親御様方を。地獄の釜へ。突落すのじや。胴欲を事ではないか。五刑の類ひ。三千罪。不孝より。大なるはなし。故に。日々に。新に。戦々競々。とたい。此身に。誠を。勤め。行ふより。外に。人の道はない。鏡にかげの。うつるが。ごとく。白眼ばに。らみ。笑へば。わらふ。鏡に。少も私心はない。是即鏡の。徳夫に。白眼付て。鏡を見るに。笑ふ。顔の。移るの。は。鏡の。化もの。といふもの。じや。不忠。不孝。しても。仕合よく。商賣。不精にして。も。繁昌。し。不養生。しても。息才。延命の。諸願。成就する。神佛。なら。化もの。といふもの。じや。跡で。小言が出来に。やならぬ。兎角。向ふに。用はない。たい。此方の。勤めに。有事じや。聖

徳太子の御歌に

「極樂ははるけきはとゞ思ひしに勤めていたる所なりけり  
と有難い御歌じや腹の中にむさいものゝないやう

「心だに誠の道にかなひなば祈らすとても神や守らん

故に君子は其ひとりを慎しむ前方江州高宮といふ宿にて道話の御ざりま  
した其時提灯屋の長八といふ人が前訓を聞いて此獨を慎事を勤められまし  
て御ざります是は親御様が後妻を入れてから親子喧嘩が始り四五年程も  
往因が切て有たのじやうれが前訓を聞いて扱々有難い事じやいかさま人と  
生れて此やうに親子一生不和で暮すといふは人の道にはない事じや犬か  
猫の様に親子咬合するとは何の事ぞさてくあさましい事と始めて目が  
覺た夫からとうく詔言仕負せた是が向ふかまはず一生の間詔言仕通し  
の行じやたい我ひとりをつゝしむのじや又親に詔言するは借錢の詔言と  
は違ふて大跡仕よひものじやないけれと心學の力がなにと其詔言仕通し

の行が出来憎ひ此本心を知るといふは有難いもので人は天地の活てゐるの  
じやといふ事が儲に知れる故意もなく必もなく固もなく我なしに成て天  
窓のきりくから爪先まで天何ヲいあや四時行はれ萬物生々するばつか  
り堯舜の道は孝悌のみ此外に少しも我はない我があければ出過といふ事  
がない夫で親子の間が調ふたものじや。「いさかひは實に山びこのこれま  
かや我しづまれば向ふ音なし能したもののじや本心をしると何にもいふ事  
がないたい今日の天命が請取前じやといふ事が知れて有もへ落付て今日  
を暮らす有難いものじや夫に肝心の我心を知らぬものは當をなしの旅す  
るやうなものでわが落付所を知らぬたとへば道中にて駕借て先乗たはよ  
い扱駕かきが申且那樣とこまでやりませう。ハテとこと事はないわいナリ  
ヤ知らぬとこまでなとやれソコテ駕擔がハイくくいふてあちらへ昇  
て往たりこちらへ持て行たりしてもねつから行先がしれぬ夫で駕かきも  
うろく乗人もうろく。とんと天竺浪人鬘介もかより合難儀なものじや。

人は孝悌忠信といふ落付所がないと朝から晩まで當所なしの長旅雨が降  
 といふてはうるたへ日和に成た米が下るといふてはねどり斯いふものが  
 はや出したといふては錢かねをへらし芝居は何々をする遊山にも行にや  
 ならぬ綱打にも行にやならずしかし斯錢もふけがなふては濟ぬ何ぞよい  
 事はないか此やうに世間が暇では狐が難儀するの狸の喰ものがないの何  
 をいふも銀の事じや金がなければ遊んで暮されぬ思ふ様に奢れぬと明て  
 も暮てもうるたへさはぐ旦那の落付所がないと家内諸ともあてどな  
 しの長たび路欠落分散ぼつ立らう賑やかな渡世じや孟子の曰人の道ある  
 や飽まで喰ひ暖に着て逸居して教なきは禽獸に近し鳥けだもの御中  
 間じや其鳥獸でもれのれが家業を情出すやう節季に斷いおた鳥もな  
 い雀や鳩がつゝに商賈が合ぬといふてかほを嘲た事もない狸や狼が袖乞  
 に出た事もないじやによつて此衆たちに教は入らぬ朝から晩までれのれ  
 くが道を守り雀は雀鳥は鳥鳥は鳥ちうくかうくと情出して勤るやらつゝる

に鳥が請人に預けられた汰沙もないた忠孝の二ツをあの衆までが進め  
 てゐるに去とてはしふといものは人じや夫もへ御世話なさるのじやによつ  
 て教によらにやあらぬ又此長八殿の朋友が五六人もある其衆達は禪法を  
 聞彈つてそれがくといふ鼻高連中じや皆能う御心得なされや此禪法とい  
 ふは至て大切な事じや夫を悪ふ聞廢るとどつけもないものに成て耳取て  
 鼻かむやうな事ばつかりいふて樂としてゐるものがあるソコで長八殿が  
 ぞふず此方の道へ引入といろく様々世話すれど中く合點せぬ世話す  
 ればする程先の鼻が高ふなる夫でも長八殿は上根に折々見廻ひ機嫌をと  
 り此方から禮をあつふすれども後には途中で逢ふてもものをも言はず不  
 禮をなす却て人中で恥しめるやうなことなどあるさしもの長八殿もほつ  
 と情つかし大きに腹立て私へ御相談じや扱此度御影で本心の有難ひ事を  
 存じましてアノ衆中は年來の朋友でござりまするへ何ぞぞ此方の道へ引  
 入んと世話をいたしさまぐ進めますれど一向取あへず却て無禮を致し

人中で嘲弄致ます何とも此段心外に存じますがかやうの時はいかい致しますが能くござりますとの御尋ねじやソコデ私が申すは能く物を合點した  
 がよい此方からは禮を盡し誠を以て尊敬するに却て憤りを起し嘲るとは  
 ソリヤ片輪といふものじや其片輪者を相手にして腹立るといふは此方が  
 片輪者へ弟子入するといふものじや何の其片輪者の爲に腹立て遣らいで  
 も大事ない事じや先此方から禮を厚ふすれど向ふから不禮をすると思ふ  
 が間違夫が向ふに取られてゐるといふものじや此本心を知るといふは外  
 の事ではない其所を自得するのじや高で向ふに用事はない此方の腹の中  
 にあのやうなものはないかと吟味するのじや故に君子の學ぶところは此  
 ひとりを慎しむばかり常は君子も小人も同じ事何にも替た事はない石  
 川五右衛門じやとて白眼詰にしてゐるくものでもないけれど物事節に當  
 ると節にはづれるとのちがひで君子と小人がわかる譬ば今日其日過の人  
 が大こんくなすびくといふて賣あるく間は皆節に當てゐる君子に賣

しも其通り同じ事じやコレ大根と呼ぶハイ大根なんぼといふから節には  
 づれる大概拾文に賣りてよいものを三十でござんすといふなせなればひよ  
 つと向ふが二十位にも買ふかと思ふて節にはづれるソコデ買人も十文に  
 直ざりてよいものを六文にさんせと節にはづれる夫から大根賣がむつと  
 節にはづれて貴様達に大根は性にあはぬわいのといふイヤ何といふ死に  
 ぞこなひれやぢめ重て此町内で大こん賣す事ならぬと大に節に放れる夫  
 から双方悪口の言ひ合何の役にたぬ事じや能く合點して見たがよい高で  
 五文か三文の事で大根一把真中に置いて歴々の男が節に放れる有さま何と  
 是が女房子に見せらるゝ姿かいよつばと恥かしいものじやどへ是も大こ  
 ん直ざる時ばかりじやない平常何ばも此やうな事は有ものじや親御様が  
 呼ばしやるハイといふて往ばよい今少と用がござりますと節に放れる年  
 寄は氣がみぢかい用があるてマア来いやいと申しやるソコデ口の内であ  
 ら面倒なと節に放れる夫から段々節に放れる工合剛いものじや佛家では

此節に放るゝを地獄と云又節に當るを極樂といふ則中庸の中じや又至善の地とも云心の本躰じや上天の事は聲もなし臭もなし目にもろくの不淨を見て心にもろくの不淨を見ずといふて胸の中に色々様々の分別しらへて迷ふて見ても鳥は黒し鷺は白しどのやうに迷ふていても水は寒し火は熱し又分別迷ひを止めて見てもやつぱり火は熱し水は寒い同じことなら迷ひの妄想をやめて心に不淨を見ぬときは高間原に神といまり八百萬の神達を神集にあつめ給ひ神議にはかり給ひてたばこを呑ふと思ふといつの間にやら吸口が口の側へ來てゐる何の事もなふたばこ呑んでゐるうまいものじや又天窓が痒い直に手が行て搔てゐる右の手に用があるとい左の手が勤てゐる手がもちつと待てくれは言はめ左右互ににらみ合氣がねなし君に順ふ臣なれば心に何ぞ思ひ出して斯したいと思ふ直に手足が働てる躰用一致顯密隔なし身と心と合一にして天地自然の御相是則今日の道道は即今の上に明らか也今日は結構な御天氣様でござります

ハイ左様でござりますすと同じ事を言てゐる言ぬ先からよい天氣は知れてある事じやけれと思はず知らず言ふてゐるは今日天地の此姿の通りを説法するのじや夫が無心無念の本佛の御説法少しも思慮分別なしで節に當りてある世の中の賣り買ふ聲も法を説也三千世界が常説法じや又雨の降日今日は天氣でござります誰も相手にする者がないアノ人は間違ふてゐるさふな天地が御合點なされぬ也へどこへ持て行ても通用が出来ぬ又何ぼ知れた事じやとてちつと顔形の不出來な人を見てたまへ様の顔はさたない顔じやといふて見たがよい知れた事じやけれとそんなものでも腹立る其苦じや天が人の心じやによつて天を惡口したり謗たりする也へどの様な愚なものでも腹立る盗人を盗人といふは知れた事なれど腹立る穢多を穢多といふも同じ事じやけれと小人を小人といふては腹立ぬ我事ではないと思ふてゐるたまへの顔をきたない顔じやといふてゐるのじやけれど何とも思はずにゐるじやによつて形では不義不道を行ひながら心には

わしはよつばと慈悲善根を施し陰徳を積ものじやと思ふてゐる盗人が形  
 では盗してゐるが心の内ではわしはよつばと利口な者じや此やうな結  
 構な事をしらすにゐる。世間の人はぬるいものじやと思ふてゐると同じも  
 のでは是が心を以て形の役とし家來が主人を使ふて丁稚が座敷に居り且那  
 殿が豆腐箱提たりたばこ盆の除掃するのじや。家内が犬の獄器のやうに成  
 てわけがしれぬソコデ神佛聖人様方が氣の毒に思召て教を御立なされて。  
 此心と形と一體なる事を能合點せよ。夫から其一體なら心も形も引さらへ  
 て直に天の功用なる事をしらしめ去によつて人には微塵いさゝかも私心  
 といふものゝない事をしらしめ生れぬ先から天の靈明我に備りて有事を  
 しらさん爲に古の明徳を天下に明かにせんと欲するが故に春に成れば梅  
 がさく秋になれば柿が出来栗の木に柿も出来ぬ人は孝悌忠信のみ此佛知  
 見を開かしめんが爲に世に出現したもののじや。うろたへに出現したもので  
 はない。夫に子が出来たといふてはうろたへ金もふけたといふてはうろた

へ損したといふてはうろたへ譽られてはうろたへ誘られてはうろたへ見  
 るにうろたへ聞にうろたへうろたへ佛目を覺せいかなるか是が本來の面  
 目親に孝行主人大事いかなるか是古の明徳其親を親として其長を長とす  
 雀はちうく鳥はかあく。は何ものが啼ぞ又何ものが啼すや不審付て御  
 らうじませねつから此方細工じやござりませぬわいな。此前蜘蛛が巢を作る  
 のを見ましたがアノ蜘蛛が巢を造るに高い所からぶらりとさがりて風まぢ  
 してゐる時にどちからから不風が吹く其風に隨ひてチヨイトひつ付其糸を  
 便として段々とかけて廻るが蜘蛛の腹の中にあのやうに何丈も糸が有  
 てもあるまひけれと巢をかけんと思へば何が糸になるやらざるくく  
 どあの通りに出来るは不思議なものじや其糸を後足でチヨイくくくと  
 かけて廻る鹽梅浮めたものじや。曲尺も墨計も持てはるぬが寸分違さぬ去  
 とては蜘蛛はかしこいものじやと蜘蛛ばかり譽てござるがアレが蜘蛛の智慧  
 才覚で出来るふなものかいな。誰が使てゐる不考て御らうじませ。花壇には



牡丹の盛何と見事な事じやないかど牡丹ばかり譽てござる菊の花盛さ  
 ても奇麗な事じや色々の花くらべをふして此やうに出来るぞと菊ばつか  
 り譽てござるねつから菊の根や株ばかりでは出来ぬ天地の父母の晝夜御  
 苦勞なざる事はならずれが作つたれが咲いたれが「前方冬  
 鳥の巢といふものを見ましたが是はきやうとい細工じや小サイ籬のやう  
 なものじやが草の根のやうなもの髪を毛の様なものを集めて編だもの  
 じや水の上に浮んである地からはへた草を便りに編付たものもへ風が吹  
 てもながれぬ用搦がしてあるけしからぬ細工ものじやアレが冬鳥の思案分  
 別で出来るものじやない細工人は天地にたつたひとりじや考て御らうじ  
 ませ私も此スウの息ばかりで腹の中は虚空じやはなしが仕込で有  
 ものではあけれを何と言はふ思へば此やうにうだくはなしてたり  
 ます蜘蛛の腹から糸が出ると同じやうなものじや何が此やうに言ふてゐる  
 ぞふしぎなものじやござりませぬか此身のはたらき目鼻の細工見たり聞

たり誰がするぞ死人にも目もあり鼻もあるけれを何にも見ぬ何にもし  
 らぬとふしたものを考て御らうじませ即今日をふさげば暗闇此くらやみ  
 は誰が見てゐるぞ骸中がくらがりをを見てゐるかくらがりが骸を見てゐる  
 か目をふさいでゐても何ぞ音がすると一番に耳が見るぞんく太鼓じや  
 ぐりぐり鼠が下櫃かぢるのじやにはひがすると目も耳も能見ぬ事を鼻が  
 見る其役々の請取まへ少しも違はぬ晴の藝人間業とはよも見ぬじじや又  
 あぢわひは舌が見る腰のあたりが痒と腰が見る手が往て何やらひねり出  
 すチツト堅い是は蚤じやと脂が見る一切心で見るとへに聞て見や喰ふみ  
 や嗅で見や言ふて見や仕て見やと世界の音を觀じ見る娑婆示現觀世音大  
 悲一鉢衆生を利益スト云此本文は何を言ふたものぞ三界唯一心の功用で  
 見るも聞も思おも云ふも此娑婆世界一觀世音の示現なざるものじや其見  
 ると聞と提婆めがれのれがものにして何がほしいかほしいとどうしたい  
 かうしたいと惡業を積かさね生身地獄に入るといふて生ながら大地引裂て

地獄に落入たといふ事じやが此生ながら土の中で。ホン／＼する提婆はど  
 こにゐるやちつと吟味して御らうじませ骸は土の小高さもの其中から何  
 がほしいかいほしい春はとうせう秋はとうせう何を言ふも金の事じや金  
 がなければどうもならぬ人を突倒しても金をしてやらふともがきくるし  
 む此提婆は生々世々地獄釜焦浮む事はならぬ去とは不便な事じやないか  
 どうぞ大慈大悲を起し成佛さして御やりなさりませ何にもむつかしい事  
 じやない。三界唯一心といふて天地の間にたつた一ツの誠を御知りなさる  
 のじや

「傀儡師胸にかけたる人形箱佛出さふと鬼を出さふと  
 三界にたつた一ツ誠から観音を出さふと提婆を出さふと御望次第好次第  
 じや其誠が天地も産出したものもへ天地の間に二ツもなく三ツもなく目  
 もなく鼻もなく影も形もなきものなれど忠信孝子の断しを聞ては感心あ  
 まりて涙がこぼるゝ又不義不道の断しを聞ては何となく忌々しき心生ずる。

是は慈悲な性は善なり性に順ふ人の道じや。此外に教は入らぬ神道も佛道  
 も此外にはない

「聞わくる心の中の誠こそ教によらぬさとりなりけり

此誠の通りをせぬをうろといふうろは天地が御合點なされぬもへ其うろ  
 が誠になるまで天地の間をハアスウ／＼くるしみ廻る地獄道誠は天の道  
 也誠は物の終始也誠なければ物なし是を人面獸心といふ誠は人の心なり  
 顔形に用事はない心には男女の差別もない人は心に天然と五倫五常の道  
 が備つて有也へ貴の至り也此道にかけるが人でなし神といふも佛といふ  
 も心の事。聖人といふも顔形の事ではない心の事じや。主人大事親大事も心  
 の事。百姓といふも心の事。商人といふも心の事。町人といふも心の事。侍とい  
 ふも心の事。侍じやによつて刀を差か刀を差也へ侍といふか侍が下を納る  
 心がなければ刀は差れぬ去によつて侍といふも心の事。坊主じやによつて  
 衣着るか衣を着る也へ出家といふか出家といふも心の事じや。皆顔形の事

ではない。心の事じや心の外に名はない。名の外に心もない。女中方何ば器量  
 がよふても衣裳が能ても。兎角大事は心の事じや。是をたどへて御断し申ま  
 せう。結構な時繪の重箱に綾綸子のふくさをかけて其帛に種々様々のめづ  
 らしい模様縫やら箔やら色どりて見るほどの人が目を驚かし是見やしや  
 れ此やうな見事なふくさ。此やうな結構な重箱内は何でゐる。虎屋の巾幘  
 か小倉で有ふと明てみれば馬の屎エ、きたな惣ぐが胸が悪ふなつた。何  
 ぼ帛や重箱が能ても馬の屎じやいかぬ。又木綿の洗濯風呂敷に重箱の  
 縁もかけてある。扱もきたない。中は何で有ふ。ハテよじになされむさくろ  
 しい。しかし何やら甘さふな一ツねあがりなさりませ。コリヤさやうとい爰  
 へも御くれと惣ぐが味ふて見て。コリヤたまらぬと重箱のきたない事も。  
 木綿の風呂敷も打忘れても一ツねくれじや。何と能したもののじや。どかく中  
 の代もの次第じや。上の町のねげん様器量はよし。風俗はよし。つまはづれの  
 ぢんじやうな事。どこに一ツいひぶんなし。衣裳もたんとあるげな。夫はさや

うといものじや。あのやうな子を嫁にもらふは。大きな仕合せと評判まらま  
 ちじやがうす。聞ばどふでも親御様方にちと不返事なるふな。夫に御氣  
 が短ひやら折々ふりが出るを母御様が機嫌を取てござるといふこと  
 じや。どふでも仕事は余り御すきじやな。さるふを其かわりに芝居が御すき  
 かして替に役者の紋を付てござるげな。イヤモウ其やうな馬の屎はマア止  
 めにいたしませうと。どんと相談が出来ぬ。又横町のねしな様。少々ふとり肉  
 脊はひくいけれ。色が黒い。形もかうにして御ざるけれ。親御様方への  
 事がよといふ事じや。内外の衆や出入衆の断しに能御氣が付といふ。尊じ  
 や。夫はさやうといものじや。いつそ其御子に極めませうと。チャント相談が  
 極まる。是で能御得心なさりませ。是も女中方ばかりの事じやない。へ金銀  
 財寶家藏味附部屋まで引包まれ。旦那様の奥様の若旦那様の御後室様の  
 御寮人様のとれかみ。尊みはやさされても馬の屎じやいかぬ。へ旦那様とい  
 ふも心の事。奥様といふも心の事じや。名は旦那様でも心が旦那様でない。

いかぬ予へ似せ物は通用が出来ぬ。重箱やふくさに用事はない中の代物が  
 大事じや。孟子曰人々己に貴きものあり。夫に皆似せものを搦して置ゆへや  
 かましい。勿躰ない事じや。此貴きものを佛家では己心の彌陀唯心の淨土。法華  
 經に五百由旬の寶塔が大地から涌出ても多寶如來が内にござらねば何ん  
 も役に立ぬ。誰も證明するものがない。先づ寶塔とは何んぞ此形の事じや。此骸  
 はどふして出来たものじや。一滴の水が母の胎内十月の間に鼻が出来目  
 が出来耳が出来口が出来手足が出来てどうく。建立成た此寶塔じや。是は  
 誰が立たのじや。親の細工ばかりじやない。是が親の細工ばかりで出来るも  
 のなら。世界中に片輪者は一人も出来ぬ。はづじや。尻の大きな女中や鼻のひく  
 い者はない。はづじや。アして御らうじませ。出来はせぬ。二人が一所へ寄て  
 またしやんせや。斯すれば鼻すじが押通るイヤかふすれば目もとに張りか  
 出来る。其やうに自由に出来るものじやない。こしらへる時は両方互に無  
 心境界。少しでも手細工は叶はぬ。天命じや。天命に違ひはない。貧乏も天命金

持も天命。貧乏を歎く事もない。天命の貧乏じや。又たどひ富貴なとて著高ぶ  
 る事もない。我智恵才覺で金持になられるものなら。世界に貧乏人は一人も  
 ない。はづじや。皆天命なる事を能りあきらめ。自身一人前の願ひ望みをさつば  
 り捨て。たい今日から一日ぐらし。御先祖の御影で先づ雨露にも濡す。一日  
 ひもじいめ寒いめしらす。三度くの御飯いたいて。疊の上に寐起する事  
 は扱もく。有難い事と。一ツく。味ふて見たがよい。何が不足な。大鉢果報  
 な身の上じやない。予へあんまり結構過るもへ。ホンくく。向ふはつかり  
 見て。肝心の我乗てゐる結構な蓮華を踏はづして落るものが多い。あつたら  
 事じや。此蓮華ふみはづして落る事をたへて御断し申ませう。丁稚のやぶ  
 入親方がヤイ長吉。明日は一日際をやる程に芝居を見てこい。ハイ有難ふ御  
 ざります。サア嬉うてく。夜も寐られぬ夜の明るを待かねて手水をつかひ。  
 にぎりめしをこしらへ。香の物入れ。竹の皮に包み。間ふころへ入て。門口を出  
 た時の嬉しさ。天へもあがる心地じや。扱芝居へ行て。うつゝぬかして。樂んで

ゐる時刻もうつれば御腹が大ぶんさびしう成た世間もろろ中食時分  
 爰でころ懐中の竹の皮を出さんと思ひ向ふを見れば銘々に辨當開きいろ  
 くの煮しめもの其側で丁稚どのどふも竹の皮のにぎりめしは出し憎ひ  
 扱々恥かし事と我乗てゐる蓮華を踏はづして落る爰が大事の所じや此丁  
 稚どのもちつと先までは此丁簡ではなかつたにかわつた事ななせ此や  
 うに成たのなれば我蓮華をはづれてよその蓮華に目が付もへふみはづし  
 て落たのじやこはひものな是が丁稚の芝居ばかりじやないやへ能考て御  
 らうじませ銘々どもは朝から晩まで踏はづして落通しじや扱又向ふの内  
 から辨當持て来た人は又向ふ茶屋から場を取中食は勿論酒肴まで取寄て  
 ゐる人を見て大に羨み此やうな所では内から持て来た辨當が出される物  
 かい責て茶屋から酒など取たがよいあた外聞の悪いと踏はづして落る其  
 又向ふ茶屋から何もかも取よせて見てゐる人は場中を見廻し棧敷に毛氈  
 花麗に酒肴やら吸物やら本膳やら山やら中居やら取よせて楽しんでゐる

人を見て咽乾かしイヤモ芝居を場で見る程窮屈なものはない此後から棧  
 敷にする其かわりに是から内を始末して年忌法事も止にする斯言ふ場所  
 で見とむない世間の外聞にかゝる事じやとホン／＼踏はづして落る  
 又棧敷で見てゐる衆はさうでも棧敷は氣詰りな茶屋へ取寄る敷内へ取寄  
 て見るがよい其次手に此方の身上もたゝき潰して貰ふたら一向氣が發散  
 して宜らふと向ふへばつかりホン／＼氣を張て我蓮華を踏はづして  
 落るのじや是が芝居の事ばかりじやない皆我助りてゐる蓮華をしらす兎  
 角人の商賈が好もしくあれが宜らふか是がよからふかとよる見ばつかり  
 してゐる何にも外を見る事はない今日我身に請得た天命が則蓮華じや米  
 屋は米が蓮華酒屋は酒が蓮華紙屋は紙が蓮華百姓は田畑が蓮華皆銘々の  
 商賈が蓮華じや我天命の蓮華でなければたすからぬさたないたどへなれ  
 ど雪隠虫で御らうじませ雪隠虫は尿が蓮華じや斯言ふはわかしいやうな  
 物なれど其證據があるアノ屎虫を可愛らふに同じ虫に生れながら松虫や

鈴虫は結構な籠に入て重寶せらるゝに其方は不仕合せものじやな扱々悪臭い虫じやと水で洗ひ結構な座敷へ段子の蒲團をしき其上に置いてくるりて名香焼て嗅したら雪隠虫何と思ふで有ふな鼻をひこくして扱々悪くさい嗅がする近所へ糞取は来やせぬかどあちらへにけこちらへにけこころりくと逃まはりどふく雪隠へこけ込でヤレく嬉しや極樂じやといふて悦ぶ夫を久しう蒲團の上で馳走すると術無がりてツイ死で仕廻ふ何でも我請得た天命でなければ安心せぬとなたでも左様で有ふがどのやうなれもしろい花見遊山に樂しみ或は結構な座敷で山海の珍物珍味種々の御馳走に逢ても我内へ戻ればヤレく嬉しや極樂じやと安心する君子其位素而行外を願はずといふて我分外を願ふ事はないたい身に備りたる天命の違華踏はづさぬやう我身に立歸りて今日の有難事をするのじや其上が天命まかせ

「權も權も我とは取らじあま小船たい浦々の風にまかせて

天道次第あなた次第で樂になる何にも不自由な事はない麥も出る米も出ける夏になれば西瓜眞桑秋になれば柿の栗のどて飯のたしにもならぬ物まで天道は愛たてあいは世世話やいて少しも恩にさせる心はない其御仕送り預りながら足納するすべ知らずに結構な座敷でふとんの上にあがり色々のものぐるりに並べたて青い顔して何喰ふても味がない是モフ胡麻入てたもんなわしがやうな因果なものく。とあす御助けなさつて下さりませ其上がどう助けらるゝもので一生有難いといふ事しらぬ生得といふものじやどのやうにしても笑ふ事の出来ぬ顔は難義なものじや是じやによつて随分ちいさい時から嬉しいくさし付たがよいうれしいくさし付た子は成人しても愛比敷て人づき合が能鼻くばつかりさし付た子は我ふりて人のする事が氣に入らぬソコデ腹立るが仕事じやちつと心が叶はぬか少し我了簡に合ぬ事があると扱もくいやな浮世じやもはや此身に秋果た早ふ極樂参りさして下さりませと鼻の先の極樂しらすにまだ

極樂が有かと思ふてどふぞ助けて下さりませ〜

「六道の街に迷ふぞあはれなり身は極樂の真中に居て

極樂の真中に居るものがどふの上が助けらるゝものじやぞよいかげんに迷ふて置たがよいもし佛様があすの晩逃ひにやるとれつしやつたら。イ

エ〜〜〜まだ〜すつと先の事で御ざりますと辭義するので有ふが先

ッ極樂の佛様とは何を言ふたものじやぞとつくり吟味して達者な内から

佛様に近付に成て置たがよいううないと極樂で付合が出来ぬ先生の子守

歌に内の佛にやまだ〜はやい門の二王に先ッなりやれマア佛様より人

に成たがよい今日の人の道を全ふ勤めた御方様方を佛様とも神様とも聖

人とも君子とも跡から名を付たものじや皆名は跡から悪人といふも善人

といふも横着ものといふも盗人といふも其人々其勤行ふ通りを跡から送

り号を付たものじや而見れば極樂はいづくに有る極樂も毘毛地獄又いづ

くに有る地極是此毘毛じや道は近きに有然るを遠に求むあまり近ふて見

付ざりけりめつたに辭義する事もない高でこちら風情極樂の迎ひを待て

ゐる事もない事じや此方から押かけて往たがよい又極樂へ往ても朝寐し

たり片意地言たりする佛様はないほごに今日から稽古して隨分行義能仕

ならふたがよい空鹿〜してゐるとッイ地獄の御迎ひ船に乗てゐるもの

じや。こはひ事じやマア先ッ極樂とはいづくぞ西方十萬億土とあれば又唯

心の淨土ともありマア近ひ方から吟味して見たがよい極樂清淨土といふ

て至極正しい清淨土潔白の所じや其清淨土な所へ此方から塵埃ばつかり

持て行ッコデ極樂の住居がならぬ氣の毒なものじや勘當は誰がするぞ親

は勘當はしやせぬぞこの親じやとて勘當せうとて育あげる親はない親は

よいが上にもよかれがし〜と願ふ清淨土夫に皆子の方から勘當持て行

のじや大なる罰あたり何と勿躰ない事じやないか又牢は誰がこしらへたも

のじや御上は清淨土で埃はいやがりてござる其所へ家尻切りも間男も獄門

も張付も火あぶりも皆此方から持て持て行のじや扱又地獄の施主はどな

たじや不目が明と何がほしいかいほしい有が上にも積重ね何をいふも金の事じや〜と棺桶へ眞逆様に杉たち金を抱へて地獄に不入る或人の興歌に「棺桶へたどへ小判を詰たどて黄金佛になりはせまい不皆餓鬼道引擔て行のじや餓鬼も畜生も他國ものじやない腹の中を能吟味して置にやならぬ扱此餓鬼の中でも米一握りか飯一盃ぐらいで合點する餓鬼はしよひけれを結構な着物着て大きな家屋敷を構て腹ぶくれの餓鬼があるこいつが折々悪い事を仕居る或は賈しめ買じめ世界の咽じめと悪い事の一關をする其替りにひさい目にも逢ねるけれを懲もせずしよとい餓鬼じや皆地獄の願主じや一切心の建立する地獄じやによつて造地獄といふ此方の勝手に造るもへ地獄は手細工極樂は造極樂といふはない極樂は生れ付のじや此又影も形も目も鼻も手足もない心が其やうに種々様々と姿をあらわし呵責せらるゝとはどうしたもつ能考て御らうじませ或は主君の大切なる用事いつ幾日に相勤めよと仰付られた其用向をとんと忘れてゐた其

忘れ九替によつて刑罪に逢ふではないか其わすれた心はそんなものじや又忘れぬ心もそんなものじや二ツながら影も形もないものなれを形の上では追放か遠島かしばり首か切腹の科は遁れぬ恐しいものじや天は生々するばつかりが仕事じやによつてもし一念あやまれば過たなりで成長する其筈じや影も形もないものなれを活潑々地生ものじや去によつて日々に新に時々刻々に新に心を付て吟味せにやならぬ此造地獄のたどへがある夏向在郷の塵埃の溜りにくろ竹といふものが出来る是が奇妙なものだな一夜さの間に五六尺或は一丈ほどにもあるものじや草でもなく木でもなく其形蕤荷茸のごとく脊ばつかり高くて喰へるものでもなく役に立ものでもない仕廻ひは夫なりに腐て又もとの塵埃となる何の役にたぬものじやけれは是がこれ天地の仕業のねつからるみない事を考て御らうじませ塵埃場といふものは何やらかやら色々さまぐの悪溜ものばつかりが積重ねてある夫を天地の晝夜陰陽の蒸籠でむし上ケ給ふもへ其腐も



の、打込が一緒に成て形を顯したもののじや、麥でも米でも豆でも小豆でも、其外わけの知れたものはわけの知れた通りに正しい姿を顯はす。又わけの知れぬものはわけもなふ形を顯はす。油断はならぬ。是じやによつて腹の中に埃が溜るともいやくやくしてわつけもないくろ草がぬんぬく生じて何の役にたぬものじや。一念も塵末にならぬといふは爰の事じや。一切萬物因縁因果果報といふて天地の間に生ずるもの。此行列にはづれるものはない。去によつて一念生ずる其みなもとを吟味して種を下さねば皆くろ竹に成て仕廻ふくろだわけに成て一生を過るとは残念なものじや。おぢ目を覺して御らうじませ。大切な事じや。へ

一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と釋迦如來も始めて目が覺た。和泉式部の歌に「草も木も佛になると説法のもとあらはす山櫻かな。たつた一ツの誠を見付たのじや。天理に少しも私心はない。谷蔭の櫻がてらは人の見ぬ所じや。とてじだらくにも咲ぬ。操正しいまことあらはす。其誠を顯はすも

のは、阿の一字。此阿字はいづくに有る腹の中のおたゝかみ。此おたゝかみは萬物一躰。うれぐの形の上になことをあらはす。ちうくかあく鳥や雀の事ばかりじやない。森羅萬象阿字のはたらき。阿字はぬなものじや。此やうに私ひとり自慢したとて役に立事でもない。釋迦如來は天上天下唯我獨尊とてござるも外のものじやない。此阿字のおたゝかみ。上は梵天三十三天のまだ上から下は金輪ならくの底までつらぬいて壽命の限りない事は、過去久遠劫から盡未來際まで活通しの漢じや。其目から能う御らうじませ。三千世界といへども大海の粟一粒じや。况や其中の銘々も何程の事。貝に一ぱいほどの分別を濼廻して。おふのかふのくいふたとて埒の明事でもない。けれと此眼貝の中へ三千世界を入れるものは有けれと三千世界へ眼貝を入れる事が出来憎い。その筈じや。三千世界より眼貝が大キイものサア爰が大事の所じや。とあたも入て御らうじませぬか。何にもむつかしい事じやない。古の明德を天下に明らかにするのじや。放之彌六合。卷之退藏

密トアリ此限りもない大きなものをみな銘々の心として居ながら何がほ  
 しいかいほしいも止たがよい止たどて何にも不自由な事はない此先五尺  
 の骸一ツでさへ天は大躰御苦勞に思召す事じやない其譯はどかしたも  
 やら三世の諸佛梵天帝釋四天王八百萬の神達水神金神山の神木火の神い  
 ふに及ばず世界中から此身一ツを大切に守護してござるなせなれば則天  
 のものじやさかいに夫もしらずにれれがものじやれれが骸じやれれが身  
 でれれがする事誰が何といふものでれれが家じやれれが金じやとやかま  
 しい言言は目を明て寐とといふてゐるといふものじや去りては勿躰な  
 い一向人たるもの言ふ事ではない先今日現銀こうに女猫算用にして見  
 たがよい普天の下卒土の濱いづれか王土にあらすといふ事なし然ればあ  
 くび一ツくつさめ一ツも皆天の御はからひ此やうにもものいふてゐるもの  
 ぐるめに天の玉ものじや天何をかもの言はざるもへに御上に命せられて  
 天下の萬民を預け給ふ則御上が天の御名代なれば直に天じや人は御上の

ものにして此身は御上よりの預りものじや去によつて一世を全ふ勤めあ  
 かせ疊の上で臨終しても御上より立置るゝ御寺の改めを請ケ隣家の證人  
 を以て一家親類送らねば御上より立置るゝ墓所の御坊が請取らぬじやな  
 いか扱明白に葬禮して御上の地面に取納め其後町内の人別を除ク是でこ  
 れ此身は御上のかし物なる事慥に得心したがよい夫から又御上の金銀米  
 錢を以て死者の追福諸入用を取附かといふものじやないか夫でも合點の  
 悪い人は我家や我入れものにある金はやつぱり我ものゝやうに染來沈込  
 ふ思ひ詰てゐるものじやけれと元來御上のものなれば何時召上らるゝと  
 いふても仕やうはない夫でも天道は大慈大悲のあまり四民といふて役く  
 をわけ士は不義不道を糺す臣百姓は農業の臣商人職人は市世の臣といふ  
 て夫々の家業の上に御定めありて利益を下さる夫を天祿として今日を送  
 る是は言いでも知れた事じや右申ス通りに疊の上で目出たふ順死したの  
 でさへ皆是御上の御世話じや况や逆死横死のものにねゐては御檢使を遣

はされ吟味にぎんみして明白に御糺しなされる事は直に天の御制度といふものじやあいか。一ツく能ウ味ふて見たがよい。此やうに御上の事を銘々共の口の端に申上るも恐れ多い事なれど。子供衆や女子衆は是を何とも思はずにゐる。勿躰ないことじや其上何にもしらぬ下賤のものは女房を呼んで子が出来る。自身自身の慰み持もちありびこしらへた様に思ふてゐる。たわいもない事じや是も御上より御立置る所の宮寺へつれて参り。此度かやうのものが出生しゅつじやういたしましてござりますと御断申上る。此宮寺は直に天の御出店其土地を守護しゆごなし下さる神佛は則天の御名代なる也へ御目見へ致させ其上御上の人別帳へ相記すではないか。去によつて我子ながらも疵でも付るか殺害でもすると急度其科を御糺しなされる。是で我子も我子にあらす我身も我身にあらぬ事を能ウ知つたがよい。夫に百姓でも町家でも少々家内大勢くらし。金銀の貯へもあれば。れがものじや。れが金じやと。氣きまゝをいふて。ホンニくくする其金銀米錢家屋敷諸道具は申に及ば

す裏の埃場あしの塵一本までも皆天のものじや。どんと我ものといふは芥子みぢんもない。我ものではない證據が有。どかたでも寐た時骸はここにあるな。ここへ紛失した。寐た姿は外のもの。目には見ゆる。けれど寐たものはとんとしらぬ。知らぬ筈じや。本來空の天じや。ふじの白雪朝日しらゆきあさひでとける。君と我とは寐てとける。どふもせう事がない。嘘なら寐た時覺てゐるかな。本來くくくの息いきばつかり。其その願ねがひといふ事も知りやせぬ。夫でも目が明とれれば。じや。くと思ふが。其やうに道具かざる物の様に二色も三色もあるものじやない。起たて此やうに見たり聞たりするも。やつぱり天のかり物じや。夫でかりの世じや。天のかりものなら。ころ天道様から大切になさつて下さる。其天の損料物で憎いの可愛のほしいのね。しいの何のかの。も死では身に随したがふてはいぬが。ここへ行いく土躰どたいに此骸からたまで置いて行いか。やならぬじやないか。地水火風の四ツも戻して仕廻しまひ。残る一ツは本來の空じや。是も本來へ歸して仕廻しまひ。何もかもすつべらば。んど引ひたくられてしまひ仕廻しまふた所が引ひ残りて。生涯

何のかのくもいやくやいふた。小言の粕ばつかり奢たら負ふて死出三途の道中じやけれども虚空でこしらへた咎を虚空の中へ持て這入てはねつからわかるものじやない。丁を風の腐たやうなものでとふも仕様はない。所を又天は陰陽の蒸籠でむし上て一厘一毛も違はぬやうに製法なさる。是が能うしたものでじや少しでもよい所があれば上へ引上て人を治るものとなし。又少しでも悪い所は一生漂泊愁ひ災難病難片輪或は癩禽獸魚鼈虫けらの類ひと種々さまざまに種を仕わけて又形をこしらへて働らかす能うしたものでじや其中でもわけのしれぬ所は皆くを草と成る是が又天命じや此天道の算用といふものは中々人間の及ぶ所ではない。天のものじやといふ事を慥に決定したがよい。去によつて此骸を三世諸佛梵天帝釋四天王八百萬の神達の守護なさるといふ事。上は天子様より下庶人に至るまで須彌山の圖と同じ事じや。先賤しい銘々どもの身に取つて言ふて見やうなら。蚤は濕氣を吸ひ。虱は死血を喰ひ。蚊は人の怠りを禁しむ。鼠は家宅に住て着虫を

喰して人の災害を拂ふ役人なれば。誠に八百萬の神達晝夜此身をなさるといふものじやないか。是が直に天命。天の法令といふものじやけれども情ない事が有じやて商人が天命の職分を守りて。一匁取る利を一匁取ておればよければ。人欲の私心といふものが出て。ツイ一匁四五分も又欲ぼりて二匁も利を貪るじや。夫が直に天命に背咎也へ身の災ひと成て難義すると同じやうなもので。虱も天命の食分の濕氣ばかりを吸ふてゐる間は。人の害にもならぬけれど。こいつも私心が出て。味ひにふけり。大事の正血をむさばるじや。ソコで梵天帝釋いかり給へば。右の手の毘沙門天直に虱を引つまみ。大指の爪でふちりと刑罰し給ふ。蚊も又其通りで。人の怠りを禁めてゐる間は。自身の役前也へ咎にならぬけれど。蚊も私心が出て。正血を盗む也へ左りの手の持國天王大手をひろげびしやりと。片手の聲の御制罰じや。是が神佛でも菩薩方でも。殺生のしたい事もなく。罰の當たい事はないけれど。天命の御役目といふものじやによつて。とふも是非があひ。其外蚤も鼠も犬も猿も狐も狸も

も一切禽獸同じ事じや。れのれくが天命の職分を守りてゐる中は皆守護神じや。げれど少しでも私心を出せば直に天命に背也へ。御刑罰を運る事にはならぬ。何ば神佛は御慈悲深いといふて。夫もよいは。是もよいは。といふて。御救しなされて御らうじませ。世界は丸で腐て仕廻ふ。西瓜のたなの落たやうなものじや。是でとくと御考あさつて御らうじませ。何と面白い事がむかしからしてあるじや。御らうじませぬか。大躰有難いものじや。御ざりませぬ。予へ。人は一箇の小天地。此身は須彌の四州の雛形で。三十三天も。金輪ならくも身に備りてある。梵天帝釋も。四天も。皆天の御分別じや。八百萬の神達も。一切天の御作物に違ひはない。夜よふ寐てゐる時。蚤蚊が喰ふ。我も知らずになる。けれど手足が働いて制止してゐる。皆是天の御功用で。直に天の御分別じや。能う考て御らうじませ。ねつから天に私心はない。寐てゐる時も。起てゐる時も。寤寐合一といふて。同じものじや。此やうに御世話なさる天じや。程に逆もの事に。いつう天まかせにして御らうじませ。打任したとて。何にも氣遣ひ

な事は御ざりませぬ。れがくを打殺して。たい今日の天命にしたがひ。教の通り大切に勤るのじや。其教とは。どおや。則今日が道じや。銘々。どのやうな愚智無智なものでも。心安ふ勤るやう。天から書付を以て。教て。ごさる。乍。恐讀奉る御制札の寫。則天の御言葉。天の御聲也。いづれも。謹で拜聴あれ。

一 親子兄弟夫婦を始め。諸親類にしたしく。下人等に。至るまで。これを。おはれむべし。主人有輩は。れのく。其奉公に。情を出すべき事。

一 家業を専にし。懈る事。なく。萬事其分限に。不可過事。

一 いつわりをなし。又は無理を。いひ。惣じて。人の害に。成べき事。すべからざる事。

一 博奕の類。一切禁制之事。尙此外は。略之。

何と有難ひ無造作な御示しで。ないか。と。ふ。予此通りを。銘々。どのに。勤め。さし。たい。ば。つ。かりの。神道の。教。儒道。佛道の。教。へ。じや。皆。是。法。の。御。聲。なり。けり。直に。天の。御。言葉。じや。此。通り。を。勤。め。さ。へ。す。り。や。家。内。安。全。商。賣。繁。昌。子。孫。長。久。の。御

祈禱じや又家内安全子孫長久すれ誰が爲になる事不皆銘々其身の徳に成事じやないか爰を能御合點なさりませ此身も心も天のものならこそ此様にあはたてなふ御世話なさる事じやほかに能考て御らうじませソナ是が何ぞむつかしい事か親子兄弟夫婦を始め諸親類にしたしうして中和で暮すのじや錢銀も入らぬたい出来る仕よい事の天上じや又腹立て喧嘩するほは仕憎い事はなけれど夫が常くせに成てある也へ和合で暮すを何ぞかわつた事のやうに思ふてとふして是が勤まるものでと勤めても見ず天窓から退屈してかゝる其やうな御方々はマア一日勤めて見たがよい初なる御方余慶は御無用とふたつた一日勤めて御らうじませ今夜から工面してあすの朝とふから起て手水をつかひ先ツ御高札を禮拜し親孝の今日が初日一家親類中和狂言の始り何とぞ今日一日首尾能勤めさして下さりませとけふ一日の願をかける扱親御様から始めかける親父様御膳を御あがりなさりませ御相伴をいたします扱何ぞ用事有てよろへゆく

事あらば親御様の前へ手をつかへとそこへ参りてさんじませう又辰のたら只今歸りましたと夫も口を尖らかして言ふ事はならぬ不随分にこにこそとれとなしうして母様是はとふいたしませう親父様是を貰ましても大事ござりませぬかと一ツ親御様方と相談して假にも我まゝ氣まゝにする事ならぬ親父様もう御休みなされませ母様もう御休みなされませとマア言ふて御らうじませ大躰心よいものじや御ざりませぬ又兄弟の間も其通りにはむつまじうするのじや其外諸親類の間も少しでも争事は御法度忽天下の科人と成事じやと深く恐れ慎み一家親類よりちつと無理な事いふて來ても成程左様御尤どと思案いたして御返事致しませふとにこそして暮すのじやマア一日勤めて御らうじませ其寐節の快さどんど極樂世界じや是程の事は出來ふかい何にもむつかしい事じやないもせぬもの大人は赤子の心を失はずといふてもどの生れ子に成て勤るのじや扱翌日も又一日の願かけるとふ今日一日勤めさして下さりませわすか

らは芝居も見に行酒も飲む茶屋へも行博奕も打ッせおけふ一日と思ふて願かける毎日く其通りに一日ツ、の願かけて勤める是が退屈せぬまじないじやとふでも初手の間はういくしいけれどとふ辛抱して十日ほど嘸しばかりで勤て御らうじませうふすると御腹の中に快い事を覺ゆる夫から常僻に成て後々は何ともなふ勤まるものじや其かわりに勤めれさせたら大きなものじや此行義をさせうばかりの神道の教儒道佛道の教じや八千余巻も四書五經も禮義三百威儀三千も此事じや是が勤さしたいばかりで天照太神様も孔子様も釋迦如來様も阿彌陀様も三世の諸佛菩薩も八百萬の神達も物がより成ての御頼じやとふ一日なりと御勤なされて御らうじませ直に其日の御祈禱じやわいな扱下人等に至るまで是をあはれむべし

「心せよつかふも人の思ひ子不我思ひ子にれもひくらべて。」

主人たる人は家内の者をとふぞよいものにして身を立さしてやりたいとすば我旦那と言はれじと誓ひを立たがよい阿彌陀如來と同じ本願を起して見たがよい御家長久の基じや又それが出來すば旦那役をマア斷云て休んだがよい我勝手ばかり言ふて人を追ひ廻し少も勞る心のないは天命に背く咎人じや雪の降夜も闇の夜も構はずコリヤ長吉八百屋へ往て玉子取てこいハイく丁稚殿横町温飽屋で蝟の足喰ふてとざる皆影法師の移るのじや隠す事あらぬ隠たるより顯はるゝはなし主從諸共咎人じや不へ一主人有輩はれのく其奉公に情を出すべき事天地の間に主君の無いものはない目上は皆主人じやけれとふ爰では先ツ若い衆や小供衆能香込んでもらにはにやならぬ奉公とは公に奉つるといふとで奉公に出た日から此身は主人のもの我身といふは芥子微塵もない足の小指の先の爪の垢までみな主人のものじや此事は奉公に出す親御方が能言ひ付けてやらにやならぬ我子ながらも世話が出來兼るへ主人を頼み

に其子一生の身の納を頼むのじやないかスリヤ大躰殿しう言ひ付てやら  
 にやならぬ又奉公する衆も能合點したがい主人は今日の命の親じやた  
 とへば一季半季の奉公でも奉公するからは天命の奉公じや我身といふも  
 のはない皆主人の骸じやうれに主人のあしらいがらつと悪いと頬を脹ら  
 しびんく弾廻りモウ暇取て外へ行ふ爰ばかりに日は照らぬなと入れたの  
 れが心の暗闇を知らずとこへ往て立身出世大きな罰あたり一生不仕合に  
 なけりやならぬ使ひに出せば情断する買喰したり上るり稽古したり三味  
 線習ふたり身の慰みをかせぐ外道其骸はとこから盗み出したものじやう。  
 女中方奉公の内男暫配するど行く夫の縁にたより一生不仕合なす皆天  
 命に背事故難義せにやならぬいかになればとてア、まゝい此くらの事  
 はまゝいくの筒尾が節鬼と成て来るとそろく主人の物を私するやう  
 になるこはひものじやうれでも足らぬ迎もの序にもつと罰あたれくど  
 だんく罰が大キウ成てどうぐ請人呼出し親兄弟の身上仕廻ひさもな

くば欠落身投首く入り大槩御定の行列じや是がいやさな惚ぐが寄か  
 りて御世話なさるのじや  
 一家業を専にし惰る事なく萬事其分限に過べからざる事 我商賣の外に  
 あれもしたり是もしたり不時のもふけを期にして商賣不情でのらくす  
 る事堅く御法度じや其分限に過べからずとは食物から着る物からわしに  
 は是で分限に過はせぬか此着ものは分限に相應かど我身と引合し少しでも  
 奢高ぶる所あるは皆御法度じや其上にホンニくするは尙科が重いぞ我  
 家業を大切にして随分仕にせ子孫に譲りより外に人に用はない夫にちつ  
 どでもよい家の普請を見るか人がよいものきてゐると咽かわかし借錢し  
 ても負まいくど力身歸る去てはわけもない事じや別して女中方香具  
 屋呉服やが来てもめつたに手を出すものじやないぞ是は我身分に過はせ  
 ぬかわしは何ほどの徳あるものぞと身に立かへりて見ぬと思ひの外過分  
 に成て有ものじやうへ殊に女は夫より外に便りのあいものじやうれに此



やうに予べくとして暮してゐるはもし連合の身上をつぶす祈禱してゐるのではないかと折々尺も入れて見るがよい是も女中方の事ばかりじやない予へ皆銘々の心得事じや行末詰らぬ御祈禱でもしてゐやせぬかと身に立歸りて吟味するのじや

一いつわりをなし又は無理をいひ惣じて人の害に成べき事をすべからざる事。うろつく事かたくならぬ予我身の勝手ばかりするのは無理してゐるのじや無理するは堅く御法度じや況や人の難義がる事をするは盜賊劫盜の類にして大罪人じやたとへ僥倖にして暫く幸ひに逢ふとも死人がものいふてゐるやうなもので天命運れぬ其身の果愁ひ災難身にまどひ難病に苦んで詫言して廻りても叶はぬ夫が直に天の御刑罰じや

一博奕の類一切禁制之事子供衆。穴一六道する事かたくな御法度じや不御法度に背ものは皆天下の科人の内じや予天命に背ものは行末が不仕合な子供衆は友達が悪いと所作がらが悪うなりとつけもない大口言ふたり。おほ

う口たよく手柄のやうに思ふてゐる。去りては氣の毒なものじや自然と身に取りじめがないやうに成て身を持崩さにやならぬ。是は親御様方がとつくり言ひ聞して置ぬと行末ひよんなものになる予其外賭祿勝負事皆博奕の類御法度じや折角天から此やうに片輪でもなく指も五本揃ふてゐるが結構を骸をもらひながら有難いとも思はず。天の此手で博奕打たり盗みしたり。何の事じや予い罰が當らにやならぬ形は人で有ながらにやんくわんくいふてゐるのじや勿躰ない事じやないか終には家を亡ぼし身をやぶり子孫の難義は何程の事じや予きつと改め慎まねばならぬ事じや又天命に背き悪い遊びせぬほどにて。何ぼもする事があるに。悪いものずきじや天はれほやけなもので罰が忽にあたるものじやないけれと自然と其身の納め所がない故終には切るか殺すかして仕廻にやならぬ。此天の網といふは世界に一ぱい張詰てある。けれと小人の目にはかゝらぬ。其網の目があらひゆへ少々の事は網の目をぬけて知れず。有事が何ぼもあるものじや。

是をまぐれさいわいと云。ソコデ是はうまいと段々人我の私心増長して我悪い事我もしらすうか〜としてゐる内に咎が大キウなる。何は網のあらうても、モウぬける事ならぬソコデ我手でびしやりと網にかゝる。能しものじや、天のなす災ひは運るべしなせる災ひは運れがたし、天の成す災とは我不覺悟で人に欺れたり、或は物の掛り合と成て難義する事あれど、我もはからずした事なれば難義するほとして其事相濟ば運るゝ事もあれど、我どわがでにこしらへた咎は、どふも運やうがない故に君子は其獨を慎む身に立歸りて吟味せにやならぬ事で御ざります

道二翁道話四編終

道二翁道話五編

大哉乾元萬物資始乃統天雲行雨施品物流形乾道變化各正性命一  
天與樂實面白有樣哉何を以てかこれを加へん

是は石田先生易の象傳の辭を引て都鄙問答の序となされたので御ざります是まで先生方御説解も多く御ざりますれば知れました事なれど、ざつと其大躰を申上ませう先此大哉とは畢竟かぎりのない事を申たもので大小にかゝわる大では御ざりませぬ子供衆女中方の耳に入よいやうには扱も〜大きなといふがよい又乾元とは天の御徳を名付たもので道の本躰じや本立て道なる道といふは神道佛道平等一枚隔はない神道でいへば神の道の本佛道でいへば佛の道の本儒道でいへば儒の道のもど此乾元の天徳で世界中が統ひつくりてあるけれども目には見ぬかしぎなものじや陰陽昇降して雲行雨施し乾道變化して色々様々形地をあらはし一切萬物人間はいふに及ばず禽獸草木山河大地幽谷砂石の類に至るまで其形の品々

がをのく其性命を正しうして天の與ふる樂みは人には人の道雀はちう  
 く鳥はかあく己々が道を盡し柳はみどりには花は紅少しも天命に背く  
 ものではない取わけ人は萬物の中でも尊ひ天上で五倫五常の天徳が身に備  
 はりてある故人は人の道を勤め行ふてたのく其性命を正しうする自由  
 自在な大安樂を天からあたへ下さる何を以てか此うへにましかへん何を  
 か願ひ求めん扱々有難く實に面白き有様かなど故先生の御悦びなされた  
 序文でござります天から此やうに結構な靈明の本心を受得て何不足があ  
 るぞ有難い事じやござりませぬか孟子の曰人々己に貴き物あり乍恐上々  
 様方も釋迦も孔子も提婆も盜賊も銘々多も乞食も犬も猫も狐も  
 狸も猿も熊も明徳にかわりはない萬物一躰じや其中でも人ばかりに衆理  
 を備へて萬事に應ずる知恵がある此知恵で迷ひが多い夫もへ教へに寄ね  
 ばならぬ扱此知恵といへば何ぞかわつた物のやうに思ふて居る何にも別  
 の物じやない此見たり聞たり覺たり知りたりする自由自在な天徳を譽た

名じや此徳は天地に貫てあるけれと目に見へるものじやないたい氣有て  
 動くばつかり影も形もない是を譬て見れば鏡に物の移るやうなもので物  
 來れば移り去れば跡も形もなし物に向ふて移まいといふ事もならず又物  
 來らぬに移ふといふ事もならぬ見たら見ればかり聞たばかりで取事も捨  
 る事もならぬ又思ふたも思ふたばつかり知りたも知りたばかり誠片便  
 宜なものじや夫を我思案分別に合したらとどないに不なる物のやうに思ふ  
 て居る別にとどふも仕やうのないものじや夫なら又捕へ所もないものかと  
 思ふてみれば即今見れば見ゆる聞ば聞ゆる是又體なものじや衆理を備へ  
 て萬事に應ずる本心が備はりて有也へじやが是何者の所爲なるぞや取ら  
 へんとすれと水の月姿は見れども手に取られずとどふもならぬふしぎ奇妙  
 といふて啼止ふより外に仕やうはない是が直に天地はへぬきの功德じや  
 といふ事を體に決定するを本心を知るといふけれと迷ひなご此道理が明らめ體い  
 所じや去によつて迷ひが多いけれと迷ひながらも天徳が備はりて有也へ。

見聞覺知の自由が出来来る。ソコで我でに我するやうにねもひ詰て。それが目で見る。扇じやとれれが心で知るよし。と我でにちやんと埒明て。我一人前に見たり聞たりする。と覺へ込だものじや。其覺込だぐるめに天の御徳でして居るとはしらすやつぱり我する。と思ふ思惑が迷ひと成て無もせぬ生死を無理ににらみ出し。實に生死といふものがある。と思ふて居る。思惑さへ取てやると何にも生死するものはないもせぬもの。ソコで一休和尚の歌に「我死にはせぬ。とこへも行ぬ。こゝに居る。尋ねはするなものはいはぬ。此骸は生滅すれ。心に生滅は無い。又此骸も生滅するやうなれ。乾道變化の内なれば實に生滅するでもない。たい迷ひさへせにや。此思惑もねつから悪いものじやない。直に乾道變化の知恵じや。千石船萬石船造るも印籠巾着の細工するも皆天の思惑ではたらひてゐるのじや。世界はたい一人形も影もない人がたい氣有て動く。ばつかりじや。ほらぬ井にたまらぬ水の浪立て影もかたちもない人が水汲たり飯焚たり

實に面白きありさまかな。何を以てか是に加へん。サア爰が有難い所じや。けれど今一越聞へ憎い。夫で今日の有難い事知れぬ。しれぬはづじや。あんまり大キナニよつてじや。是をぎつといへば乾元とは天の此空な所じや。此空は椽の下でもたばこ盆の中でも明た所はみな空じや。天窓の上の青い所も空じや。御日様の御座る所まで二百七十萬里とやらいふが。また其上も空じや。釋迦も孔子も不可思議といふてござる。形あるは斗られる。大地は何ほどありても形地があるもへ。天竺でも長崎でも斗れる。形のない所はどふも斗る事ならぬ。おかしぎじや。けれとこゝを何にも無ひと思ふてゐるは間違じや。斯は天氣が満切て有也へ弓射る矢がし。と鳴る。又水入の穴が二ツある。一ツでは水が這入ぬ。天と水と入かわつてぶつ。と。陀羅尼を唱へ。這入。何と能したるものな。夫でこゝは天の満てある事を御合點なさりませ。大地は天の塊りたのじや。則天の肉じや。夫で人は天の種じや。去によつて。天地の道を相續するものは人じや。其人が天地の道に背はたい。欲が深ひ也。

へ目が明と何がほしいか、ほしい春はとふせう秋はとふせう何をいふも金の事じや金がなければとふもならぬと人の難義もかまはずハアスウく  
 夫から人の道を失ひ欠落分散狐つき心中身投首縊さもなくば愁ひ災  
 難困窮にくるしみ妻子を失ひ難病業病癩とまで成て身を腐すいづれ  
 天の御刑罰通るゝ事はならぬかゝる淺間敷罪科を作りて迷ふが故人はつ  
 かりへの教へじや外のものに教へは入らぬ一切萬物れのれくが道の通  
 り齋が鳥のまねもせず犬が猫の身ぶり物まねもせず春咲花は春さき朝が  
 ほが晝過に咲た事もなく寒菊は寒に咲く皆天命に順ふ各其性命を正する  
 其根元は天が統といふて一切の萬物を天が本にしてござるければ此肉眼  
 で見へるものじやない此統といふを譬て見やうなれば薬をせんじるに益  
 氣湯の歸脾湯のと病人相應の薬を調合して煎じ上たる其湯の内に薬の氣  
 が籠りてあるければ目には見へぬ煮出した粕は形が有也へ目に見へる薬  
 の氣は茶碗の湯の内に統てゐれば目には見へぬたゞ氣ばかりじやなれ

ども陳皮は陳皮の用を勤め甘草は甘草の用を働き各々其性命を正しう勤  
 め行ふ也へるれくの病に應じて五臓が健固に成て本腹すると同じやう  
 なもので天の統といふも此虚空の内に天氣が詰り切てある也へ乾道變化  
 し空即是色光明遍照十方世界念佛衆生と顯はれ給ふ此念佛衆生とは一切  
 萬物の事じや天の御徳が光明遍照とあまねく照し給ふ故一切萬物各形を  
 顯はす

「時なくは何を種とてうき草の浪のうねく生ひ繁るらん  
 草木生々するは悉くも天の木星天下り天地の母の胎内にやどり晝夜御劬  
 勞遊ばされ光明遍照十方世界へホギヤアと梅の花が咲き栗の木に栗が出  
 來柿の木に柿が出来る其外一切萬物千草形をあらわし春雨のわきてるれ  
 とは降ねどもうくる草木はれのがさまく一切の形あるものは其道々を  
 つくし切て各性命を正し魚は水に住て水をしらすぬ人は天に住て天をし  
 らぬ大海の魚が水を心として水をしらすぬ水中を遊ぎ廻るは鱗が有也へじ

や鱗は鳥の羽根じや鳥が虚空を飛行する時の羽根と同じ事じや人は天を  
 心として天をしらぬ知らぬはづじや天は無漏の大海じや爰をさして大哉  
 といふ此乾元の天の腹から生じた一切萬物なる也へ四海兄弟釋迦も孔子  
 も富士の山も湖水も百姓も丁人も乞食も穢多も禽獸草木其外江河の鱗類  
 までも皆天の一腹で出来たものじや何と大なる哉じやないか此道理を極  
 める神道儒道佛道道は近きにあり然るを遠きに求む神道は睫毛儒道も佛  
 道も睫毛じや氣を付て考へて御らうじませ道は天地より先達てある也へ  
 一切萬物生ずると直にみちはしやんと備りてある名といふものは跡から  
 付たものじや又名がなければ通用が出来ぬ天地といふも題號じや其名に  
 迷ふて難儀する其迷ひを取てやる神道儒道佛道の教へ佛といふも神とい  
 ふも跡から付た名じや鳥といふ名のないさきからかあ〜いふてゐる今  
 日は結構な天氣で御さります言はぬ先から結構な天氣じや  
 「天の戸を開く神代に告るめて今に入聲の時をたがへず

天地はまだ開けざる内に國家孝行と啼てゐるぞうやらふら〜寐むたい  
 は夜前夜がふけた故じや又夜も更さぬに寐むたいはソリヤ盗人めが屋尻  
 切れるのじや

「天地の開けぬ先に謠らん玉子の中の鶏のこゑ  
 黒いといふ名のないさきから鳥は黒い鷺は白いといふ名のない先から白  
 い太郎兵衛もれげんも生れた跡から付た名じや名の本は道道の本は心去  
 によつて心は道の跡なり佛さまの華嚴阿含法等般若法華涅槃も跡から付  
 た名じや生れた佛道といふは銘々心の事じや三界唯一心心外無別法と心の  
 外に別に法はないと佛さまの御説なされた  
 「夜もすがら佛の道を尋れば我心にぞたづね入りける  
 心の外に何が有る欲さへなければ即心即佛迷さへ取れば直に丸佛じや一  
 切經は心の事あみだ經も大日經も法華經も涅槃經も何にも別のものじや  
 ない心が大事といふ事じや儒道といふも心の事書物は心の所書誠の生た

儒道とは參乎吾道一以貫之と何を貫のじや。本心の靈明の思ひ邪無心が  
 三千世界を貫ひてゐるといふ事じや。是則心の事一切の書物一字も外の事  
 じやない。皆心のことじや。神道でも日本紀舊事記故事記本義其外神秘あら  
 ぬ。書物皆神の事を書た書物じや。誠の神道とは心の事。是私に言ふ事。でな  
 い。神道唯一天人一致。とは心が大事といふ神の教へ此外に神道はない。或は  
 三教一致の心を歌に

「わけ登る麓の道は多けれど同じ高根の月を見るかな  
 大山の麓に幾も道がある。どの道からなりと登りて見ればたい一ツの月じ  
 や。其一ツの月を所々で色々様々と名を付樂しんでゐる。湖水の月の田毎の  
 月の更科の月。武藏野の月。こちの裏の泉水の月。手水鉢の月。水溜りの月。犬の  
 食器の月。小便田子の月。までにしめ細張てこちのが本真じや。〜と唯一ツ  
 の月かけを争ふてゐる。マア仰向て見ればよい。蓮師の歌に  
 「うつひきて案じて見ても寐られねば月を身延と起かへりけり

「雲非なる月は居ながら見るものをわけ登るとは迷ひなりけり

此月とは心の事。釋迦も孔子も石川五右衛門も穢多も乞食も一切萬物禽獸  
 草木に至るまで。天の御徳の満々である心のたとへじや。取わけ人には靈明  
 の徳が備りてある。夫を知らずにあるとは。可惜事じや。夫を教てもらふ。三教  
 の道じや。何にも外の事じやない。本心とは我に備りてある。道を知るのじや。  
 心を離れて外に道はない。國の元は家にあり。家の本は身におり。身の本は心  
 に有。一人貪戻なれば。一國乱を起す。御地頭様に仁があれば。國中が治る。一軒  
 の内の旦那殿の心が大事。上清ければ。流れ清し。水上濁れば。下は泥界。上に立  
 人は阿りてがないと。こわいものじや。我まゝ氣まゝともしらず。ホン〜

「外からは手もさへられぬ要搦を内からやぶる粟のいかな  
 國天下の反覆も主人の心一ツからたい心が大事じや。日々に新に戦々競々。  
 朝夕神佛を禮拜するにも。たい心の吟味するのじや。腹の中に何にも穢たも

のほないか先祖の御心に背はせぬか若得て勝手して人に難義をさせてはいぬかどたい己を責るのじや己に克て禮に復るが人の道じや又小人といふものはれのれは我まゝ氣まゝしてわつゝいふて家内中を責廻りどふが濟ぬかうが聞へぬと我ばつかり合點して熱かへる何の役に立ぬ事じや悪い事は随分ひかへてたい善を揚たがよい小人はめつたに悪を揚るゆへやかましい丁稚の使の遅ひ時もちつと了簡して其かわり早い時に譽たがよいチ、長吉早かつたなどマア譽て御らうじませ其時の長吉殿の顔は途んなものじやにつこゝして代物の直打がぐつゝと上る又掃ろうじがちつと悪ふても堪忍してチ、奇麗に掃除が出来たと譽るうすると此くらひじだらくにしてさへ譽さつしやる今度からもつと奇麗にせにやならぬとひとり情出す能したるのじやたい善を擧さへすると家内がにこゝして治る皆心の事じや此道話も御銘々の心の事じやと思ふて御聞なさるがよい皆あなれた方の御腹の中のはなしじや何も外の事では

ない家内和合が子孫長久の御祈禱じや仕よい事の天上じや御高札を禮拜し親子兄弟夫婦をはじめ諸親類にしたしく和合で暮すのじや何にもむつかしい事は入らぬ主従親子兄弟夫婦和合した所へ釋迦如來が御出なされても何にも用がない又孔子様が御見まひなされても何にも言事がないチ、よしゝ其通りにしてもらひたいばかり随分御頼申といふて禮いふて御歸りなさる

一下人等に至るまで是をあはれむべし是は主人たる人の心得じや「心せよ使も人の思ひ子ぞ我思ひ子にねもひくらべて此やうにいふと奉公する衆がチットよしゝと思ふが情斷する事ならぬぞ

一主人ある輩はをのゝ其奉公に情を出すべき事御主人を大切にするが奉公人の道じや假にも不奉公したら忽ち天下の咎人じや

一家業を専らにし憎る事なく此家業とは即天命じや天の九星二十八宿其外微塵のごとき糠星様まで悉く皆家業がある何の爲に晝夜御回りなさる



のなれば一切萬物を守護なさるが天の御職分則御家業じやうの天の御仕業のれかけで受る草木はをのがさまくで釋迦如來は佛の道を御説なさるが家業孔子様は天命を御説なさるが御仕業で則御家業貴人方は上に御位なされて下を御治め下さる御職分が御家業侍は侍が家業百性は農業が職分じや丁人は丁人が家業商人は商人が家業米屋は米屋醫者は醫者赤子は乳を飲が家業乞食は貫ひありくが職分をのゝ家業を専らにし惰る事なく萬事其分限に過べからざる事此萬事と言は我心に立歸る事じや家内の諸道具諸式私が身分に過はせぬか屋造り普請身の廻り着物から給ものから我分限に過はせぬか私には何ほどの徳が有て此やうにしてゐるものと折々吟味してもし我分限に過たれば忽ち天地の咎人なる事を恐れ慎むのじや女中方なと小間物屋が結構な櫛出してめつたに手を出すものじやあいなと奢といふは我心が暗いからじや一萬石は一萬石のほどがある貴人は貴人の御身の程がある殷の紂王夏の桀王身の分限に過たれどり我

職分の家業に惰り終に天下を失ふた元や虫同前の銘々共身のほどしらぬ故向ふへばつかりホソく

「鏡山人の志賀から先見へて我身の上はかへり水海

一いつわりをなし又は無理をいひ糺して人の害になるべき事すべからざる事こちら無理はせず非道はせず密夫はせず人は殺さず是等の事をせねば大きな事のやうに思ふて居る夫もへ目が明と何がほしいかいほしいと朝から晩までうろだらけ無理だらけ何をいふも金の事じや金がなければどふもならぬ人を突倒しても金をしてやらふといふやうな心持ではいぬかと身に立かへりて吟味するのじや去年の火事に半分焼た梅の木が今年春焼残りの枝から芽を出し不肖な顔もせずいさぎ能咲てござる此衆達は身に不幸あればとて天道を曲るといふ事もなく其性命正しく家業を情出して御ざる此衆達の手前もあるに大なりして耻かしうもなふ火事に逢ふたといふては借錢のことはり子が生れたといふては無心をいひ死た

といふては借徳にし煩ふたと言ては借たものをやらぬやうにし。雨が降といふては物をかり風が吹といふては取込た物をやらぬ工面し是が照降ならしのやう坊といふものじや  
 一いつわりをなし無理をいひ惣じて人の害になるべき事随分可仕候。大  
 な科人じや此やうなものは道づれにもなるなど天道様から御禁めなさつてござる恐ろしい事じや。皆銘々心得事でござります。扱此天の乾元から人の呼吸に通ふて命と成て御ざるもへ人は出入の息のみじや。夫で皆是天の御功用なるもへ死ぬるといふ事もなく長久なものじや。佛家で是を無量壽と云孔子も仁者は壽と仰られた天は無心にして萬物生々するばかりで死ぬるといふも虚空のふへるのじやといふてござる。是でも合點の悪い御方は其やうに生通しのものなら死でもものが言へるはづじや。めしも喰ふなもものと思ふてござる御方もあるものじや。夫は骸ばつかりの算用で。此目に見へぬ虚空の天が本メしてござる事が借にわからぬ故迷ひが取れ

ぬ

「くらきより暗き道にぞ入ぬべし遙に照らせ山の端の月  
 學問の道他なし其放心を求むるのみ立歸りて見れば迷ひはない。躰用一原顯微隔なしといふて心は妙骸は法。心は躰身は用身と心と一相にして見たり聞たり自由する。一ッ以てこれを貫く。此骸に水が加へれば冷と心を知る。是で心と身と一致にして躰用隔なし。又骸ばかりで知れぬ證據にや。死人に水をかけてはしらぬなせなれば心がない也へじや。是ほ借な證據はない。何と算ひ事じや。ござりませぬか。有難いはづじや。御腹の中のあたゝかみ。則天じや。是私事じやないぞ。有難いものじや。けれとも心は結構なものじや。有難いものじや。とて母親が心ばかり産で御らうじませ何にも役に立ものじやない。是で心身一相躰用一致にして隔のない心を御合點なさりませ。是はくどいやうなけれと。此あたゝかみをとふぞしらせたいばかり生ていは天のあたゝかみ。茶のさめてぬるいはあたゝかみが天の本來空へ歸つ

たのじや是も本來空へ歸るの本來空から来て知るのといふやうな間垂い  
 事じやない即今此身このまゝ虚空法界と同性同根なるがゆへ火に入ても  
 焼す水に入ても溺れず生ずといへども生を離れ死すといへども死をはな  
 れたどへば水上に浮べる月の水に濡ざるがごとくかしぎ奇妙な生を得て  
 天地と共に寐起して鬼神と共に吉凶を見る實に面白きありさまかなと聞  
 たばのかりとふしたもののやら最一越れもしろき有様かなにならぬ可惜事  
 じやとふ不信心起して知つて御らうじませ。一軒の内の旦那殿が知ると家  
 内が安樂に成る妻子眷属一家親類出入方から知音近付門賣の大こん屋ま  
 でが助る事じや何をいふても纒の財寶に迷ふて息子にはとふして遣りた  
 い孫にはとふしたい曾孫にはとふしたい鶴の孫にもとふしたい龜の孫に  
 もとふしたいと思惑ばかりが膨張もへ世界中の錢金を集めても足ぬ  
 算用夫故明ても暮てもハアスウ〜とたわいもない事で月日を送る勿体  
 ない事じや難儀せにやならぬはづじやとふ不本心知りて御らうじませ。少

し斗身に立歸る事を知ると此身このまゝで今日の有難い事を知るゆへ中  
 々うるたへてゐられるものやじない天地の間に人は尊ひ天じやうじやと  
 いふてあるじやないかとこが尊ひ天上じやうじやうか〜と飯喰ふて口舌ば  
 つかりいふてゐるが尊ひ天上じやないやへ人は人の道其道の有べきやう  
 を勧め行ばつかりで世に出現したもののじやうるたへに出たのじやない夫  
 故天地は勿論一切萬物禽獸草木江河の鱗類虫甲介に至る迄皆人ばつかり  
 へ御苦勞の御姿じやとつくりと目をさまし身に立歸りて御らうじませ。有  
 難ひ事の天上じやわいな先此目に見へぬ天が慈悲の根元一切萬物皆此天  
 から光明遍照十方世界と出現なされて我々を御助け下さる攝取不捨有難  
 い事じやないか先光明とは何ぞ光明といへばモウ光明といふ名に縛られ  
 てひかり赫くやうに覺へてゐるいかにも光りかいやくに違ひはない其光  
 明はどこにある即此燈火火鉢の火是もツイ火とばかり見れば本來の有難  
 い事しらすにゐる此火の出所はいつくろ石と金とを持てカチツト打ばば

つと光明顯れ給ふ。夫を木に付て今日を助る。飯を焚にも火火燧にあたるも。直に日輪様の分身じや。冬向足のつめたい時。其足を懐に入れ。夜通しに温めて呉る人があらば。大躰恩に着にや。あらぬ。それを何とも思はず。火燧でのさばりかへつて寐る。皆御日様の分身じや。勿躰さい事じや。挑灯の禮は言はれど。火の禮をいふ事知らぬ。あんまり御慈悲が大キイ也へ。何とも思はぬ。暗がり。で火も燈さず。挑灯ばかり提あるひて。何の役に立ものじやない。溝へはまつたり。石に躓ひたりせにや。ならぬ。雪隠へ迄付て来て。御助け下さる。深々微妙の光明を。たれがくで。仕廻ふてゐる。口で消たり。足で消したり。するど罰があたる。と。そ。で。は。大。な。目。に。逢。ふ。も。の。じ。や。扱。此。光。明。の。序。に。聞。て。置。て。も。ら。は。ね。ば。な。ら。ぬ。事。が。あ。る。先。今。日。主。人。や。親。御。様。の。光。明。で。世。間。の。人。が。ハ。イ。ス。ウ。い。ふ。て。く。れ。る。を。自。身。の。光。明。の。や。う。に。思。て。ど。つ。け。も。な。い。所。い。義。理。張。て。ゐ。る。も。の。じ。や。夫。が。挑。灯。の。禮。ば。つ。か。り。い。ふ。て。ゐ。る。の。じ。や。若。い。衆。は。取。わ。け。ど。う。ろ。う。鬚。や。芝。居。へ。御。禮。申。て。ゐ。る。女。中。方。銀。の。筭。や。役。者。の。紋。付。ま。い。ろ。一。向。火。も。

燈さず挑灯ばかり。ぶらつく。さげてゐる。く。と。こ。へ。踏。か。ぶ。る。や。ら。知。れ。ぬ。あ。ふ。な。い。事。じ。や。又。水。は。と。こ。か。ら。出。る。予。非。戸。を。堀。れ。ば。水。の。光。明。ホ。ギ。ヤ。ア。ト。顯。れ。給。ふ。直。に。御。月。さ。ま。の。分。身。じ。や。則。今。日。の。我。々。を。御。助。け。下。さ。る。御。苦。勞。の。御。姿。勿。躰。な。い。事。じ。や。前。方。も。此。は。な。し。を。し。た。れ。ば。或。御。方。が。貴。様。め。つ。た。に。段。付。て。イ。ヤ。光。明。じ。や。の。御。助。け。の。と。言。は。る。ゝ。が。我。等。は。其。様。な。も。の。で。は。助。か。ら。ぬ。兎。角。錢。銀。で。な。け。れ。ば。今。日。が。助。か。ら。れ。ぬ。と。い。ふ。御。方。が。有。た。左。様。な。ら。ば。水。も。火。も。二。三。日。此。方。へ。預。ま。す。が。と。ふ。じ。や。夫。で。は。忽。ち。渴。て。死。を。に。や。な。ら。ぬ。ス。リ。ヤ。大。切。な。此。命。を。助。て。と。さ。る。じ。や。な。い。か。と。い。ふ。た。れ。ば。夫。で。や。う。く。御。合。點。な。さ。れ。た。扱。又。あ。な。た。方。私。共。が。着。て。ゐ。る。綿。入。木。綿。此。も。と。は。と。こ。か。ら。出。來。た。予。た。れ。が。く。で。出。來。る。も。の。じ。や。な。い。し。た。し。物。に。も。な。ら。ず。汗。の。浮。し。に。も。な。ら。ず。甚。深。微妙。を。綿。と。い。ふ。て。ば。い。や。り。と。し。て。あ。た。ゝ。か。に。寒。さ。を。凌。げ。と。い。ふ。て。天。よ。り。あ。た。へ。給。ふ。綿。入。と。成。て。御。助。け。下。さ。る。御。姿。は。忝。く。も。天。氣。下。り。て。大。地。の。母。の。